遊戯王ｇｘ　転生者の介入録

ボルケーノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ｇｘ　転生者の介入録

【Ｎコード】
Ｎ８０８９Ｗ

【作者名】
ボルケーノ

【あらすじ】
神の仕業で死んでしまった主人公如月魁史（きさらぎかいり）
神は、代わりに別の世界に転生させてやるといい主人公が選んだのは「遊戯王ＧＸ」の世界だった。
主人公は、積極的に原作に介入しどのような事になっていくのか？

第一話　転生そして新たなる人生（前書き）

始まりました。更新は不定期ですがガンバて行きたいです

第一話　転生そして新たなる人生

「ん、此処は何処だ・・」

俺の名前は、如月魁史大学が終わっていつも通りに行きつけのカードショップに行くはずだったんだかいつの間にか、辺りか真っ白な空間にいる。

腕を組んで、辺りを見わせていると向こうから白髪の爺さんがこっちに向ってきてスライディング土下座をしてきた

「どうも、すいませんでした！！！！！！！！」

「な、なんだ・・・・あんたは？」

俺は、いきなりの事態に混乱しながらも土下座をしている爺さんに聞いた。

「私は、貴方の世界で言う神という者じゃ」

そして、爺さん・・・・いや、一応神と言っておこう。神が、此処が何処か、なぜ俺が此処にいるかを説明してくれた。

「此処は天界の爺さんの空間で、爺さんが暇つぶしに紙飛行機を折っていて間違って俺の人生が書いてある紙を折り、他のゴミと一緒に捨てたということか？」

俺は、ひたすら土下座をしている神に聞き、神は額についた汗をつきながら

「う、うむ・・・ちゃんと分けてはいたんじゃが、たまたま混じっていたようで気づいた時には焼却所で・・・・・」

神は、言い辛そうに答えた。

「はぁ～まぁ、もう起きた事だから取り返しないけどさ。これから、俺はどうなるんだ？死んだってことは、元の世界には戻れないんだろ？」

俺は、ため息を吐きながらも起きてしまった事を受け止め神に聞いた。

「そ、それについては、特例として違う世界に転生という処置が取られることになったんじゃ。わしに出来る事はなんでもするから、言っておくれ」

俺は、神のその言葉を聞き興奮しながら聞いた。

「違う世界って、漫画やゲームの世界でもいいのか！？」

「う、うむ。　その程度なら訳はない、何処か行きたい世界にでもあるのかの？」

俺は、生前はゲームやアニメが大好きだったため実際に行ってみたいと何度を考えた事があった。

「そうだなぁ・・・（ゲームの世界か、面白いかもしれないけど。やっぱり、言ってみたい世界は、『あの世界』だよな！！）」

俺は、色々と考えようやく転生先に選んだ世界は・・・・・

「決めたぞ、俺は遊戯王の世界に行ってみたい！！！」

そう、生前は何種類ものカードゲームをやっていたが、その中でも遊戯王は１０年以上やっていたカードゲームだった、アニメも全シリーズ見たし目の前で自分が好きなモンスターが実体化するなんて、ここまで興奮する世界はない。

「遊戯王の世界か、うむ。大丈夫じゃよ、しかし、この世界は何種類かに分かれているが何処の行きたいのじゃ？」

神の、その言葉に俺の考えはすでに決まっていた。

「俺が、行きたい遊戯王の世界はＧＸの世界だ！！」

そして、ここから俺の新たな人生が始まった。

第2話　VSクロノス　轟け、龍の息吹（前書き）

第二話投稿

第2話　VSクロノス　轟け、龍の息吹

「さて、此処が童実野町か。うはぁ～マジで、アニメ通りだ、感激だ！！！」

神と話していた空間から、出た俺は童実野町の時計台の下に立っていた。

「此処が、初代遊戯王のバトルシティーが始まった場所か。まさか、俺が立つことが出来る何で夢にも思わなかったな。　そういえば、俺、デッキは持っているのか？」

転生直前まで、鞄の中には多くのデッキが入っていたが神と話している時にはその鞄がなかった事に気が付き身に付いているものを確認してみると

「お、これって転生前から使っていた鞄だ。中身はっと・・・・良かった~ 一軍や他のデッキも全部入ってるよ、後はこれは、デュエルアカデミアの受験票か？」

見てみると、番号は１１１番か確か、十代は１１０番だったかな？
　俺は、辺りも見回してみると時計の時間に気がついた。

「やべ！！入学試験に遅れちまう、此処まで来て入学できないなんて洒落にならない。」

俺は、走って海馬ドームに向った。

そして、ドーム内に入るとちょうど十代がクロノスの「古代の機械

巨人」に攻撃する所だった。

「ガッチャッ！楽しいデュエルだったぜ、先生！！」

「そんな、ワタ―シがこんなドロップアウトボーイに負けるナンーテ」

クロノスが、すごく落ち込んでいる。まぁ、バカにしていた奴に負けるのはくやしいけどあんなにかと、考えていると

「次、１１１番！デュエル場に！」

そして、俺の番になったので下に降りる最中に十代とすれ違い様に

「頑張れよ！！」

「おう！！ありがとよ！！」

俺は、気を引き締めてデュエル場に立った。

「では、試験を開始する。デュエ「チョット、待つの～ネ」ク、クロノス教諭どうしましたか？」

「その子の、相手はワタシ～がするの～ネ（あんな、負け方をし～て、学園に帰った～らいい笑い者なの～ネ。この子には悪いです～が名誉挽回させてもらう～ノ）」

そして、試験官とクロノスが交換した様子を見ていた魁吏は

「（絶対に、俺を名誉挽回の道具に使うつもりだろうなぁ～なら、

逆にボロボロにしてやるぜ！！）」

魁吏は、明らかに悪い顔をしながらクロノスを見た。

「では、試験を始める～ノ！！」

「「デュエル！！！」」

クロノスＬＰ４０００

魁吏ＬＰ４０００

「先攻は、譲るの～ネ」

「なら、俺のターン。ドロー！！」

俺は、引いたカードと手札を見て

「よし、これなら。俺は、フィールド魔法『龍の渓谷』を発動する！！」

場　龍の渓谷

「このカードは、１ターンに１度手札を一枚捨てる事でデッキからレベル４以下のドラグニティと付いたモンスターを一枚手札に加えるか、ドラゴン族モンスターを一枚墓地に送るが出来る！！俺は、ドラグニティ・ブラックスピアを墓地に送りデッキから、ドラグニティ・ファランクスを墓地に送る！！そして、手札から霧の谷のファルコンを攻撃表示で召喚してターンエンド！！」

霧の谷のファルコン　ＡＴＫ２０００

魁吏

モンスター　霧の谷のファルコン

「私のターン、ドロー。　ワターシは伏せカードを2枚セットシーテ、魔法カード大嵐を発動スルーノ。そして、破壊されたカードは黄金の邪神像、このカードは破壊されたときに、邪神像トークンを特殊召喚する～ノ」

場　無し

クロノス

モンスター　邪神像トークン×2

「ち、やっぱり原作通りか。で、次に出てくるのは・・・・」

「ワターシは二体の邪神像トークンを生贄～にいでよ、古代の機械巨人を召喚する～ノ」

クロノス

モンスター　古代の機械巨人　ＡＴＫ３０００

「そし～て、バトルフェイズ。古代の機械巨人で霧の谷のファルコンを攻撃！！」

魁吏　ＬＰ４０００→３０００

「ワターシはさらに、一枚セットし～て、エンドなの～ネ（念のため～に聖なるバリア　ミラーフォースを伏せておくの～ネ）」

クロノス
モンスター　古代の機械巨人
伏せカード　一枚

「俺のターン！！ドロー！（まさか、ここまで原作通りとは思わなかったぜ。しかし、会場の奴らもうダメだって顔で俺の事見やがって、でもここからが俺の見せ場だぜ！！）　俺は、手札から魔法カード手札抹殺を発動！！互いのプレイヤーは手札を全て捨て、捨てた枚数分ドローする。俺は、四枚ドロー！！」

「フン、何をする～と思え～ばただの、手札交換です～か。所詮は、ドロップアウトボーイなのーネ」

クロノスは、鼻で笑っていたが

「それは、これから起きる事を見てからいいな！！俺は、ドラグニティ・アキュリスを召喚」

魁吏
モンスター　ドラグニティ・アキュリス　ＡＴＫ１０００

「このカード召喚された時ドラグニティと付いたモンスターを特殊召喚しこのカードを装備する。ドラグニティ・レギオンを特殊召喚！！そして、レギオンの効果発動、自分フィールドの魔法・罠ゾーンにあるドラグニティを墓地に送る事で相手フィールドに表側に存在するカードを破壊する、俺は古代の機械巨人を選択！！」

魁吏
ドラグニティ・レギオン（ドラグニティ・アキュリス装備）

レギオンから発射されたアキュリスがクロノスの古代の機械巨人を
を貫いた。

「アンマミーヤ、ワターシの古代の機械巨人をが～！？！？！？」

しかし、クロノスの不幸はまだ続く

「そして、墓地に送られたアキュリスのモンスター効果発動！！この
のカードが装備状態で墓地に送られた時フィールドに存在するカー
ドを一枚破壊する、俺は先生の伏せカードを破壊！！」

アキュリスが、クロノスの伏せカードを貫き破壊した。

「やはり、攻撃反応型の罠か。俺は、魔法カード二重召喚を発動！
！俺は、これでもう一度、通常召喚が出来る。俺は、もう一度ドラ
グニティ・レギオンを召喚、そして効果発動、このカードが召喚に
成功した時墓地に存在するドラグニティを装備できる、俺は、墓地
よりドラグニティ・ファランクスを装備する！そして、装備状態の
ファランクスの効果発動、装備されているこのカードを特殊召喚す
る事が出来る。チューナーモンスター　ドラグニティ・ファランク
スを特殊召喚！！」

「「「「「「「「「チューナー！？！？！？！？！」」」」」」」
」

会場から、声沸き上がった

「何なの～ネ、チューナーとは？」

クロノスはクロノスで、始めてみるモンスターに混乱している。

「見ていれば分かるぜ、行くぜ！！俺は、レベル３のレギオン二体にレベル２のファランクスをチューニング！！いざ、ドラゴンの咆哮を轟かせ墓地に眠りし同胞を力に変えよ！！シンクロ召喚　ドラグニティナイト・バルーチャ！！」

魁吏　ドラグニティナイト・バルーチャ　ＡＴＫ　２０００

「シンクロ召喚とはなんなの～ね？？？」

「シンクロ召喚とは、チューナーとチューナー以外のモンスターを素材に合計レベルと同じモンスターを融合デッキから特殊召喚する召喚方法だ！！」

「すげーな、あいつのモンスター！！闘ってみて～～」

「何か、すごいっす！！」

観客席で、十代や翔が騒いでいた。

「しかし、レベル８にしてはたったの２０００しかな～いなん～てたいしたことないの～ね」

「俺は、まだバルーチャの効果を使っていない！！効果発動、このカードが召喚に成功した時に自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスターを任意の数だけ選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。このカードの攻撃力は、このカードに装備された「ドラグニティ」と名のついたカードの枚数×３００ポイントアップする！！俺の墓地には五枚のド

ラグニティがいるので、全て装備する、よって攻撃力は・・・」

魁吏

モンスター　ドラグニティナイト・バルーチャ　ＡＴＫ２０００→３５００

魔法・罠

ドラグニティ・ファランクス×2、ドラグニティ・アキュリス、ドラグニティ・ブラックスピア、ドラグニティ・プランディストック、

「こ、攻撃力が・・・・３５００に。　し、しかし攻撃されたとしても後５００は残るのーネ」

クロノスは、ビビりながらも言った。

「それは、どうかな。」

魁吏は、笑いながら言った

「ど、どう言うことなの～ネ！！」

「バルーチャに装備されている、ドラグニティ・プランディストックの効果は装備されているモンスターに二回の攻撃を与える能力を持っている、よってバルーチャは３５００の二回攻撃が可能！！バトルだ！！ドラグニティナイト・バルーチャで先生に向ってダイレクトアタック！！」

バルーチャから、放たれた咆哮がクロノスを襲った

クロノス　ＬＰ４０００→－３０００

「マンママミーヤ！！！！」

こうして、入学試験が終わった。

第2話　VSクロノス　轟け、龍の息吹（後書き）

「こんにちは、主人公の如月　魁吏です。」

「こんにちは、作者のホッシーです。」

「おい、とどめがバルーチャってなんなんだ。あれは」

「あれは、実際にやられて事があるしやった事があったので、最初にはちょうどいいかな思ったんだよね♪」

「いや、他にも色々ととどめの指し方あっただろ。ドラクニティならトラドラとか」

「あれも、一応考えてはいたんですが・・・ありきたりなので没にしました。まぁ、ドラグニティは以上にあれは出しやすいんだけどね」

「はぁ、まあいいか。で、次はどんな話なんだ？」

「原作通りに進む予定なので次は、自称エリートとのいざこざですかね。では、」

『ばいば～い』

主人公設定（前書き）

今回は、主人公　如月魁吏についての書きます

主人公設定

名前　如月　魁吏

容姿

ドットハックGUのハセヲの髪を黒くし、後ろ髪を長くしたような感じになっている。

年齢

転生前　２３歳→転生後　１５歳

神のせいで死んでしまいその後、GXの世界へと転生した。デッキは複数持っており状況によってデッキを変える。普段はやさしいがキレるとかなり危険だ。

使用デッキ

１軍　???

制裁デュエルで登場予定

２軍　獣デッキ（エクシーズ・シンクロ混合型）

主に「神獣王バルバロス」と「森の番人　グリーン・バブーン」の２体で殴るデッキだが場合によってはエクシーズやシンクロする。

３軍　レスキューラビットデッキ

名前通りレスキューラビットがメイン。エースモンスターは「銀河眼の光子竜」

４軍　ドラグニティデッキ

純正ドラグニティデッキだが「Ｓｉｎ　スターダスト・ドラゴン」が入っており「トライデント・ドラギオン」を出しやすくなっている。

その他にも色々とデッキを持っているが、主に使う2軍から４軍

主人公設定（後書き）

以上です。

第三話　入学そして接触（前書き）

今回はデュエルはなしです。

第三話　入学そして接触

、俺はデュエルアカデミアに向う船にいる。制服の色は赤、つまりレッド寮だ。クロノスに３５００の二回攻撃で倒したのに、筆記テストでは十代よりも下だったらしい、しかし・・・

「ドラグニティーは、まだ完璧に使いこなせてないなぁ～まぁ、クロノス相手に『あのデッキ』を使いたくなかったし、仕方ないか。」

（作者は、小説を書くまでドラグニティーを使った事がなく実際に作成し現在練習中）

「しかし、バルーチャが出るとは思わなかった・・・・レヴァテインが手札に来ていたら、トライデントの三回攻撃をしていただろうけど、勝てたからいいか。」

魁吏が、クロノスとの戦いを振り返っていると、後ろから

「なぁ、お前シンクロっていうカードを使った奴だろ！？俺の名前は、遊城　十代っていうんだ、よろしくな！」

「僕は、丸藤翔っス。よろしく」

「俺は、三沢大地だ。よろしく。」

ＧＸの主要キャラ達が話しかけてきた。

「ああ、俺は如月魁吏。こちらこそ、よろしく」

魁吏は、十代達と握手し島に着くまで話をし、十代達と一緒にレッド寮の前まで来た。

「・・・・・・・・ここまでとは、思わなかった」

アニメで、ボロいのは知っているが此処までとは思わっていなかった。

「でも、なかなか良いんじゃないか？俺は、好きだぜ。」

十代は、生き生きと自分の部屋に向った。

「まぁ、十代達は三人だけど俺は、一人らしいし良いかな？」

そして、魁吏も自分の部屋に向い、デッキの調節をしているとドンドン！！とノック？？する音がし、開けてみると

「よう、魁吏！さっそくだけどデュエルやろうぜ！！」

十代が部屋に遊びに来た、後ろを見ると苦笑している翔がいた。

「良いけど、何処でやるんだ？」

「学校内にデュエル場があるらしいから、そこでやろうぜ！！」

「分かった、少し待っていてくれデッキを持ってくるから（デュエル場か、となると万丈目との接触かな？）」

そして、十代達とデュエル場に行ったが原作通り、万丈目達と一悶

着があった・・・・・が、なぜか。

「おい、貴様！！クロノス教諭を倒したからといい気になっているなよ！！」

怒りの矛先が俺に向けられていた。さっきから、話しかけられても無視を決め込んだからだと思うけど、

「はぁ～（俺、最初の方の万丈目って嫌いなんだよなぁ～エリートぶって）」

「貴様、俺様を見てため息吐きやがって、上がれ、貴様をみじめに負かせてやる！！」

万丈目は、デュエルディスクを腕に付け挑発してきた、そこに

「貴方達、何をしているの。」

入口から、ＧＸのヒロイン天上院　明日香が現れた。良く見ると、後ろには原作には居なかった青髪ロングの女の子がいた。容姿は、出る所は出ており引っ込む所は引っ込んでいてかなりの美人だ。（分かりやすく言うと、シャッフルのネリネの青髪と考えてください）

「天上院君に、天原君。この新入生にアカデミアの厳しさを教えてあげようとしていた所さ。」

万丈目が、魁吏達を指さしたが

「そ、そろそろ、歓迎会の時間なのでやめておいた方がいいと思います。」

天原という女の子がびくびくしながらも、万丈目に言った。

「ちっ、行くぞ！お前達！」

万丈目は取り巻きを連れて、デュエル場を出て行った後

「貴方達、彼の挑発に乗らない方がいいわよ。」

「そ、そうです。万丈目さんは怖いですし、デュエルの腕もかなり高いんです。」

魁吏と十代は、二人の言葉に

「デュエル（喧嘩）を売ってき買わないなんて、デュエリストじゃないぜ！」

「そうさ、それに強い奴と戦えるんだ。そっちの方がずっと楽しみだぜ！！」

魁吏と十代は、拳をコッとぶつけて明日香達に言った。

「所で、あなたよね。入学試験でシンクロ召喚っていうのを使ったのは。」

明日香は、魁吏に聞いてきた。

「知っているということは、見ていたのか？」

「私だけじゃないわよ。こっちの天原さんやさっきの万丈目君達も

見ていたもの」

「ふ～ん（確かに、原作でもいたな。後、カイザーもいたかな？）」

「で、何か用なのか？」

「いえ、今後色々と楽しみが増えそうと思ってね。そっちの彼と同じように」

明日香は、十代の方を見て笑った。

「まぁ、この学校にいるんだ。いずれは戦う事になるだろうからその時は、よろしく。俺は、如月魁吏」

「私の、名前は天上院明日香。こちらこそ、よろしく」

そして、魁吏はもう一人の女の子に近づき

「よろしくな。」

「は、はい。私の名前は、天原　美里　こちらこそ、よろしくお願いします・・・・」

やはり、少しびくびくしている。

「大丈夫だよ。何もしないし、これから友達になるんだからびくびくするなよ。」

魁吏は笑いながら言いその言葉に、天原は顔を上げ魁吏の顔を見て

「は、はい。ありがとうございます／／／／／／／」

顔を、赤くしながら握手をした。その後、天原たちと別れ、この時代の制限・禁止リストを確認しながらデッキを調節していたら

「これって・・・・・この時代でシンクロなんて使ったらマジで、無双じゃないか・・・・（これは、ひどいな。強欲が使えて、天使が使えてこれは、いじるのが楽しみになってきた♪）」

としていると、ＰＤＡからメールの着信音が聞こえてきた。ちなみに、曲は真恋姫無双～萌将軍～『深紅の呂旗』だ。これを、聞いた時はしびれた。

「何々、『ドロップアウトボーイ、午前０時に決闘場で待っている。互いのベストカードを賭けたアンティルールでデュエルだ。勇気があるな。はははははははっは！！！！』だと、なら鼻っ柱を叩き折りに行くかな。」

外に、行くと十代達が見え一緒にデュエル場に行った。

第三話　入学そして接触（後書き）

次回は、ついに万城目とのデュエルです。お楽しみ

第四話　ＶＳ万城目　壊れた機械の力（前書き）

では、万城目とのデュエルです。

第四話　ＶＳ万城目　壊れた機械の力

「よく来たな、ドロップアウトボーイ。逃げなかった事は褒めてやろうだが、来た事を後か「うるさい、わざわざ来てやったんだ。御託はいいから早くしな。」き、貴様！一度ならず二度までも俺を馬鹿にするとは叩きのめす！！」

魁吏の一言で、万丈目がキれ、デュエルが始まった。

「魁吏、頑張れよ！！」

「応援してるっすよ！！」

十代達が、少し離れた所から応援していると、

「やっぱり、こんな事になっていたわね。」

十代達が、後ろを見ると明日香と天原がいた。

「でも、明日香さん。デュエルは始まったばかりらしいですよ。」

十代が明日香達に近づき

「お前ら、何でこんな時間に此処にいるんだ？万丈目から何か来たのか？」

十代の質問に天原が答えた。

「い、いえ。あの万丈目さんが、大人しく引き下がるわけがないっ

て明日香さんが言うので見に来てみたら・・・まさか、本当にこんな事になっているなんて。」

天原が魁吏の方を見ながら言うと

「まぁ、始まったものは仕方ないから見てようぜ！今度は、どんなシンクロモンスターが出るか楽しみだぜ！！」

十代が興奮しながら言い、デュエルが始まった。

「行くぞ、万丈目！！」

「万丈目『さん』だ！！」

「「デュエル！！」」

魁吏　ＬＰ４０００

万丈目ＬＰ４０００

「先攻はいただく！ドロー！！」

万丈目は、自分の手札を確認し

「俺は、リボーン・ゾンビを召喚！さらに、伏せカードを２枚セットしターンエンド！！（俺が、伏せたのは通常・特殊召喚したモンスターを破壊し除外する『奈落の落とし穴』あいつのシンクロモンスターは特殊召喚だからな。した瞬間、除外してくれる！！）」

万丈目

モンスター
リボーン・ゾンビ
ＡＫＴ１０００
伏せカード
２枚

「俺のターン、ドロー！！」

魁吏は、ドローしたカードと手札を見ると

「（えっ！！この手札って）俺は、魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動！！このカードは手札から、モンスターを捨てデッキからレベル１のモンスターを特殊召喚する。来い、レベルスティーラ」

魁吏
モンスター　レベルスティーラ　ＡＫＴ６００

「さらに、魔法カード愚かな埋葬を発動、デッキからモンスターを一枚墓地に送る。そして、魔法カードサイクロンを発動。万丈目、左のカードを破壊する！！」

「ちっ！」

サイクロンは、『奈落の落とし穴』を破壊した。

「（奈落の落とし穴が破壊されたが、もう一枚は相手が攻撃してきたら攻撃表示モンスターをすべて破壊する『聖なるバリア～ミラーフォース』！！攻撃してきた瞬間にお前は、終わりだ！！）」

「（やはり、原作と違っているか・・・となると、もう一枚は攻撃

反応型の罠かな？でも、今から、出すモンスターには意味なし！！）
俺は、チューナーモンスター、スクラップ・ビーストを攻撃表示で召喚！！」

魁吏
モンスター
レベルスティーラ　ＡＫＴ６００
スクラップ・ビースト　ＡＫＴ１６００

「来たか、チューナーモンスター！！」

魁吏が新たなチューナーモンスターを召喚を見て、十代達は

「お、来たぜ！チューナーモンスター、今度はどんな、シンクロモンスターを見せてくれるのかな！？」

「でも、入学試験で使っていた『ドラグニティー』じゃないんすね。今回はまるで」

翔のその言葉に明日香は

「ええ、チューナーモンスター、だからシンクロはするだろうけど・・・何かあのモンスターは機械っぽいモンスターね。」

「（あの、モンスター達で今度はいったいどんなモンスターが・・・）」

「俺は、最後に魔法カード死者蘇生を発動！！俺の場に甦れ、スクラップ・ゴーレム！！」

魁吏
モンスター
★１レベルスティーラ
★４スクラップ・ビースト
★５スクラップ・ゴーレム　ＡＫＴ２１００

「俺は、レベル５のスクラップ・ゴーレムにレベル４のスクラップ・ビーストをチューニング！！今ここに、破棄された龍がその力を振るうために起動する！シンクロ召喚、スクラップ・ツイン・ドラゴン！！」

魁吏
モンスター
★１レベルスティーラ
★９スクラップ・ツイン・ドラゴン　ＡＫＴ３０００

魁吏の場に頭を二つある機械のような龍が召喚されたモンスターを見て十代達は

「うぉぉぉぉ！！かっけ～」

「何すか、あのモンスターは」

「あれが、彼の新たなシンクロモンスター・・・・」

「（すごい、あんなモンスターを一ターンで召喚するなんて）」

万丈目は、スクラップ・ツイン・ドラゴンを見て、最初は驚いていたが

「（いくら、攻撃力が高かろうと破壊されてしまえばこっちの物だ！！）さあ、どうした！！攻撃してきてみろ！！」

万丈目は、魁吏の事を挑発してきたが魁吏は落ち着いており

「（あの様子だと、やはりあの伏せカードは攻撃反応型か。しかし、今となったら意味がないけれどな！！）俺は、スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果発動！！このカードは１ターンに一度、俺の場のカードと相手のカードを二枚選択する、俺のカードは破壊され、相手の選択したカードは手札に戻る！！俺は、自分の場のレベルスティーラとお前の場のリボーン・ゾンビともう一枚の伏せカード選択する！！」

「な、なんだと！！それじゃあ！！」

魁吏
モンスター　スクラップ・ツイン・ドラゴン

万丈目
モンスター　０
伏せカード　０

「さらに、墓地に存在する二枚のレベルスティーラの効果を発動、俺の場にいるレベル５以上のモンスターのレベルを１下げる事で特殊召喚できる！俺は、スクラップ・ツイン・ドラゴンのレベルを２下げ、特殊召喚！！」

魁吏
モンスター
スクラップ・ツイン・ドラゴン

レベルスティーラ　二枚

「すげー、一気に三体並んだ！！」

十代と翔は、召喚されたモンスターに興奮し、明日香は魁吏の無駄の無いプレイングを見て

「相手の場のカードを処理し、自分の場は強化・・・なんて人なの」

そこに、天原はある事に気がついた。

「あの、気づいたんですが、あのレベルスティーラというモンスターって自分の場のレベル5以上のモンスターのレベルを1下げて特殊召喚するんですよね？」

「そうね、それがどうかしたの？」

明日香は、まだ気づいていなく十代と翔に関しては全く分かっていなかった

「つまり、あのスクラップ・ツイン・ドラゴンは効果で自分のカードも選択しないといけないんですが・・・あの、モンスターが墓地にあり限り何度でもつかえるのでは・・・」

天原の、その言葉を聞いて皆は、

「あっ・・・・・・・・・・・・」

「さて、とどめと行きますか？レベルスティーラ2体で万丈目を攻撃！！」

万丈目　ＬＰ４０００→２８００

「ぐっ！き、貴様！」

「これで、とどめだ！！スクラップ・ツイン・ドラゴンの攻撃！！ブラスト・ツイン・インパクト！」

万丈目　ＬＰ２８００→０

「そんな、俺が、エリートの俺がこんなドロップアウトボーイなんぞに負けるなんて・・・」

「これからは、人を馬鹿にするのはやめるんだな。万丈目。」

「まずいです、警備の人がこっちに向ってきます！」

天原のその言葉に俺達は

「マジで！！逃げるぞ、魁吏！」

「ああ！！」

魁吏がデュエル場から降り、走りだしたら後ろから

「如月　魁吏！覚えておけ、俺に与えたこの屈辱は忘れんぞ！！」

「で、どうだったかしら？ブルーの先例は。」

明日香は、腕を組みながら魁吏に聞いた

「大したことは無かったな。あんな満身野郎に負けるほどひ弱でもないしな、それに俺も本気を出していなかったし。」

その言葉を聞き明日香や十代達は驚いた。

「あのデッキは、本気じゃなかったの！？」

「ああ、あれはお気に入りの一つだけど一軍じゃないな。このデッキは、せいぜい五軍位のデッキかな。」

「な！！（あの力で五軍だなんて、その上は一体なんなの・・・）」

「さてと、俺は眠いから帰らせてもらうぜ。また明日な、行くぜ、十代に翔。」

「お、おい。待ってくれよ、魁吏。」

「ああ、僕を置いていかないで欲しいっす！！」

こうして、万丈目との戦いは終わった。

第四話　ＶＳ万城目　壊れた機械の力（後書き）

「おい、作者・・・」

な、なんだ、魁吏

「また、ワンキルて言うのはどいう事だ。」

え～と、すみませんでした～どうしても、ライフが４０００だとワンキルになってしまいやすく二回連続でワンキルという事になってしまいました。

「すみませんでしたじゃね～よ。少しは、内容を濃くしろよ！この駄作者！！」

次回こそは、しっかりとしたデュエル後景を書きたいと思います。お楽しみにしていてください。

「全く、ちゃんとしろよな。」

第五話　ＶＳ天原　侍対獣（前書き）

すみません。一つ投稿し忘れました・・・・

翔ののぞき事件編です。

第五話　ＶＳ天原　侍対獣

あれから、数日が経ったが…なぜか翔の奴が異常に気持ち悪かった…

「おい、十代。翔の奴どうかしたのか？体育が終わった辺りから、変に笑って気味が悪いんだが」

「さぁ、知らないな、聞いてみた方が早いかな。」

そして、魁吏と十代は翔に近づくと、

「うふふふ。あ、魁吏君にアニキ～いや～春って良いっすね～アニキ達にも早く、春が来ると良いすね～」

と、やはり気味が悪い笑顔で笑っていた……

「これは、入れて…こっちはどうするかな？」

その夜、魁吏がデッキ調整していると　ドンドン！！

「魁吏、大変だ！翔が誘拐された！」　十代が、魁吏の部屋に飛び込んできた

「何があった…」

魁吏は、突然の事で余り頭が回らなかったが喋ることが出来た

「さっき、俺のＰＤＡに変なメールが来て、翔を預かった。返して

ほしければ、女子寮まで来いって来たんだ！」

「（ああ、今日はこのイベントの日だったな。めんどくさいが行ってくるとするか・・・）しゃあない、行くか十代。」

「おう、翔を早く助けに行こうぜ！！」

十代が、ドアをから飛び出していったがずぐに戻ってきた

「そういえば、俺、女子寮が何処にあるか知らなかったけ」

「確認してから、飛んで行けよ！！！！！」

そうして、魁吏の案内で女子寮まで行き、そこで待っていたのは、原作通りに明日香、ともえ、ジュンコがいて、翔を簀巻きにして立っていた。それとなぜか天原も一緒に立っていた

「翔、お前何をやったんだ。今なら、罪は軽いぞ？」

魁吏は、翔を見る途端真剣なまなざしで言ったら

「違うッす。僕は、何もやっていないっす！！」

翔は、涙目になりながら魁吏に言うが、

「何よ、覗きのくせにしらばっくれるつもりなの！！」

ももえが、翔の方を向き言いその言葉を聞いた魁吏は少しだけ引いたら

「ああ、魁吏君引かないでほしいっす！！僕は、手紙に此処に来てほしいって書いたっす。」

「手紙？」

魁吏は、翔のポケットから手紙を取り出してみたが・・・・・・・

「おい、翔。これ、字が汚すぎるだろ・・・・なんで、こんなので来る気になったかな。」

「そうよ、私の字はこんなに汚くはないわ。」

明日香も、手紙の字を見て少しだけ怒っている

「なぁ、なら事件は解決ってことで翔は連れ帰ってもいいだろ？」

十代は、明日香達に近寄り言うが

「ここまで来て、ただで帰るなんてもったいなくない？十代、魁吏、貴方達どちらでもいいからデュエルしない？」

「お、面白いじゃん！！魁吏、俺に行かせてくれよ、頼む！！」

「まぁ、いいか。じゃあ、俺はけんが「魁吏さん、だったら私とデュエルしませんか？」え？」

美里が、おどおどしながら言ってきた

「あら、めずらしい。美里が自分からデュエルを申し込むなんて、しかも男子に。」

美里は、性格上自分から申し込みなどはしないほらいいが

「だ、だめでしょうか？」

目をうるうるしながら見つめられたので

「い、いいぜ、やろうか。（こ、こんな見つめられて、断れるか・・・）」

そして、明日香とのデュエルは原作通りにサンダー・ジャイアントで止めをさし俺達の番となった。

「さて、じゃあ。俺達もさっさと始めるか？」

「は、はい。少しだけ待ってください。」

そうすると、手首に巻いてあったひもを解き長い髪をまとめ始めた。

「魁吏、少しびっくりするかもしれないけど頑張りなさいよ。」

後ろにいた明日香が不意にこんな事を魁吏に言った

「それって、どういうこと「では、魁吏殿！尋常に勝負を開始いたしましょう！！」な、何・・」

美里が、髪をまとめたら今までのおどおどとした態度から凛々しいという言葉が合う感じになっていた。

「え～明日香さん、出来れば説明をしていただけたいんですが・・・

」

「美里はね、デュエルとなると髪をまとめる癖があるみたいで・・・・髪をまとめると、まさに武士という言葉が合う風になってしまうの。彼女のデッキがそうだからかもしれないけど」

「魁吏殿、お話もその辺で終わりにして勝負（デュエル）です！！」

「お、おう。では、あらためて！！」

「「デュエル！！！」」

魁吏ＬＰ４０００

天原ＬＰ４０００

「行きます、魁吏殿！私のターン、ドロー！」

「私は、六武衆キザンを攻撃表示で召喚！さらに、二枚伏せてターンエンド！」

天原場

モンスター六武衆キザン　ＡＫＴ１８００

伏せカード二枚

手札３枚

天原のモンスターを見た十代達は

「へぇ～六武衆デッキか、おもしろいデッキだな。」

「そうね、でも場の支配力はかなり高いデッキよ。」

「六武衆は展開中はすさまじいすから」

「俺のターン！ドロー！（六武衆か、並ばれると厄介だからな。）
俺は、おとぼけオポッサムを召喚」

魁吏　場
モンスターおとぼけオポッサム　ＡＫＴ６００

「攻撃力６００を攻撃表示で召喚？何を、考えているの」

「見てればわかるさ。俺は、さらにおとぼけオポッサムの効果を発動。このカードの召喚時、相手の場にこのカードよりも攻撃力が高いモンスターが存在する場合、このカードは破壊される。天原の場には攻撃力１８００のキザンがいるため、おとぼけオポッサムを破壊する！！」

魁吏　場
モンスター　０

「じ、自分のモンスターを破壊した！？どうして・・・」

「その瞬間、手札からモンスター効果発動！！このカードは、自分の獣族モンスターが破壊される事でライフを１０００支払う事で手札又は墓地から特殊召喚する事が出来る、来い、我がデッキの番人！！森の番人　グリーン・バブーン！！」

魁吏

ＬＰ４０００→３０００

場

モンスター　森の番人グリーン・バブーン　ＡＫＴ　２６００

「すげ～１ターン目から攻撃力２６００の上級モンスターを召喚したぜ！！」

「彼、さすがね。２体のモンスター効果をうまく組み合わせているわ。全く、無駄がないわ・・・（彼、シンクロ召喚だけじゃなくモンスターの相性も理解している。）」

「１ターン目から上級モンスターとはやりますね、魁吏殿。（しかし、私の伏せカードの一枚は収縮。攻撃してきたか返り討ちです。）」

「俺は、永続魔法、強者の苦痛を２枚発動する。この魔法カードは相手モンスターのレベルかける１００下がる。よってザンジの攻撃力は」

六武衆ザンジ　ＡＫＴ１８００→１４００→１０００

「そ、そんな・・・（これでは、半減させても迎撃出来ない）」

「それでは、バトルフェイズ！！グリーンバブーンで六武衆キザンを攻撃、怒りの鉄槌！！」

天原ＬＰ４０００→２４００

「俺は、さらに伏せカードを1枚セットし、ターンエンド！！」

魁吏　場
モンスター　森の番人　グリーンバブーン　ＡＫＴ２６００
伏せカード一枚　強者の苦痛二枚
手札１枚

「私のターン、ドロー！！私は、魔法カード二重召喚発動。このカードの効果でこのターン二度通常召喚できる、私は六武衆カモンとイロウを召喚！」

天原　場
モンスター　六武衆　カモン　ＡＫＴ１５００→９００
六武衆　イロウ　ＡＫＴ１７００→９００

「私は、カモンの効果発動、フィールドのある表側の魔法又は罠を1枚破壊できる。私は、強者の苦痛を1枚破壊し、これによって攻撃力が」

六武衆　カモン　ＡＫＴ９００→１２００
六武衆　イロウ　ＡＫＴ９００→１３００

「攻撃力は、少しだけ元に戻ったか・・・（このデッキには召喚反応系の罠が入っていないから召喚時何もできないか・・・）」

「私は、このままバトルフェイズに移行しイロウで森の番人　グリーンバブーンを攻撃！！」

「くっ、イロウで攻撃という事は手札に・・・・」

「ええ、その通りです。だから、速効魔法　月の書を発動しグリーン・バブーンを裏向きにします。そして、裏向きになったグリーン・バブーンをイロウで攻撃！沈黙の剣！！」

イロウがセット状態のグリーンバブーンを刀で突き刺し破壊した

「カモンは効果を使ったターンは攻撃はできません。ターンエンドです」

天原　場
モンスター　六武衆イロウ　ＡＫＴ１３００
　　六武衆カモン　ＡＫＴ１２００
伏せカード２枚
手札０

「俺のターン、ドロー！俺は、手札からおとぼけオポッサムを召還し、効果で破壊。ＬＰを１０００支払い、もう一度グリーン・バブーンを墓地から復活させる。」

魁吏
ＬＰ３０００→２０００

場
モンスター　グリーン・バブーンＡＫＴ２６００

「そして、グリーン・バブーンで六武衆カモンを攻撃！怒りのコンバット！」

「私は、伏せカードをオープン！攻撃の無力化。攻撃を無効にして、

バトルフェィズを終了させる。」

「ち！（しかし、これで下準備は完成だ、後はあのカードを引ければ）」

魁吏は、頭に中で計算し

「俺は、魔法カードの光の護封剣を発動しターンエンド！」

魁吏場
モンスター　森の番人グリーンバブーン　ＡＫＴ２６００
光の護封剣（１ターン目）強者の苦痛

「私のターン、ドロー！」

「カモンの効果を発動します！！攻撃を放棄することで相手の表表示のされている魔法、罠を破壊することが出来る。私は、カモンの効果で魁吏殿の強者の苦痛を破壊する！」

カモンは手に持っていた爆弾を投げ、強者の苦痛を破壊した。

「でも、今グリーン・バブーンを倒す手段が無いから、イロウとカモンを守備にして伏せカード１枚セットしてターンエンド」

天原場　六武衆イロウＡＫＴ１４００
六武衆カモンＡＫＴ１２００
伏せカード２枚
手札０

「俺のターン、ドロー！（来た！！！！俺の切り札）俺は、魔法カード、大寒波を発動！このカードは次の自分のターンまで魔法、罠をプレイする事が出来ない魔法カードだ、俺は、さらに墓地からおとぼけオポッサムの効果を発動しフィールドに２体蘇生させる」

魁吏　場

モンスター　おとぼけオポッサム×２　ＡＫＴ６００
グリーン・バブーンＡＫＴ２６００

「い、一気に三体もモンスターが！」

離れていた十代達も

「すげ～一気に場を固めやがった。」

「でも、おとぼけオポッサムじゃあ、六武衆達には勝てないっすよ？」

「彼も、それは重々承知のつもりでしょ…しかも、大寒波で魔法、罠を封印した事も気になるわ（しかし、どうするつもりなのかしら？）」

「見せてやるぜ、このデッキの真のエースモンスターにしてマイフィイバリットカードをな！」

「グリーン・バブーンが切り札じゃ無いの！？」

「コイツは、双角の一つだよ。俺は、おとぼけオポッサム２体とグリーン・バブーンをリリースする！」

「グリーン・ババブーンを生贄！そこまでして出すモンスターって！？」

魁吏は笑みを浮かべながら叫んだ。

「出でよ、神の名を持つ聖なる獣！神獣王バルバロス降臨せよ！！！！」

魁吏　場

モンスター　神獣王バルバロスＡＫＴ３０００

「し、神獣王バルバロス！獣戦士族の中でも最高級のレアカード…」

「美里、油断しないで！バルバロスの効果はこれからよ！」

呆然とする天原に明日香は言い、

「明日香の言う通りだ！獣王バルバロスの効果発動、このカードを三体リリースで召喚した場合、相手フィールドを全て破壊する！」

「なっ！？私のフィールド全体を破壊効果！なら、リバースカードオープ」

「無駄だ、大寒波によって魔法、罠は使用不可だ！」

明日香は魁吏のその言葉を聞き

「そういうことだったのね！」

十代はまだ意味が分かっていないらしく明日香に聞いた

「明日香、どういう意味だよ。」

「神獣王バルバロスは確かに強力モンスターだけどチェーンで奈落の落とし穴や天罰で破壊される可能性もあるわ。しかし、彼は大寒波によって魔法、罠を使用不可にしてバルバロスの効果を１００％使ったのよ…」

「正解だぜ、明日香！バルバロスを確実に効果を使い、場に残すにはこうするのが一番なんでね。さてと、バトルフェィズだ！神獣王バルバロスの攻撃！スパイラルセイバー！」

天原ＬＰ２６００→－４００

「じゃあ、翔はかえしてもらうぜ。」

「ええ、こっちも色々と勉強になったわ。特に魁吏にはね♪」

明日香が魁吏を見ながら言い、天原が魁吏に近づいてきた。

「どうした、天原？」

「あ、あの・・・・で、できれば今度からは名前で呼んでくれませんか？あそこまで、本気になったのは久々でしたし、呼んでほしいので／／／／　だめですが？」

天原が、ウルウルした眼で魁吏の事を見て

「（だから、こんな目で見られたら断れねっての！！）わ、分かった、美里。」

「は、はい！！魁吏さん」

「さ、さて。用事も済んだ事だしさっさと帰って寝るか！！」

「お、おい。待てよ、魁吏～」

「待ってくださいっす～アニキ～魁吏君」

魁吏達が言った後

「美里、貴方から男子に名前で呼んでほしいなんて珍しいではありませんか？」

「そうですね、美里さん。どうしてですか？」

モモヨとジュンコがニヤニヤしながら美里に迫っていくと

「／／／／／／／／／／／／／　あ、明日も早いですし、早く寝ましょう！！お休みなさい！！！」

美里は、寮に向って走っていった

「ふふふふ。（それにしても、如月魁吏。思った以上に面白いわね・・・今度は、私がデュエルしたいわね）」

ボートの上では

「「ニヤニヤ」」

2人が、魁吏の方も見てニヤニヤしていたので

「お前ら、早く帰るんだから漕げよ！！」

「まぁ、良いじゃんか。」

「そうっすよ。僕と違って、春が近づいてきてるんっすから♪」

翔のニヤケ顔が以上にムカついたのか魁吏は

「おい、翔、十代・・・人ってどのくらいの重さで沈むのかな・・・・」

「さっさと帰って寝るッす。明日も学校っす。」

魁吏から、オールの奪って凄まじい早さで漕ぐ翔であった。

「・・・・・・・・魁吏、ボソっとは怖いぜ・・・・」

第五話　ＶＳ天原　侍対獣（後書き）

「おい。」

・・・・・（眼を合わそうとしない）

「おい！！」

な、なにか・・・・

「投稿し忘れるってなんだぁ！！！しかも、今回のデュエルで使ったデッキは元お前の一軍だろうが！！」

ご、ごめんなさい！！読者のみなさんと我が獣デッキに対して本当にすみませんでした！！

「今度は、気を付けよな。」

はい（涙）

第六話　昇格試験　前篇（前書き）

再投稿です

第六話　昇格試験　前篇

あれから、数日がたち進級試験の日が近づいてきた…

え、試験はどうなんだって？いや～大丈夫じゃね、まぁ勉強はしておくけどね

翔は原作通りに死者蘇生に祈っている、なんだろ。アレを見ているとカードを地獄からの呼び声やら降格処分やら反対のカードに変えたいと思ってしまうのは…

思ってしまったんなら仕方ないよね♪

翔にバレないように、三枚の死者蘇生を地獄からの呼び声・降格処分・地獄からの呼び声と言う順に置き換えて置いた。

その夜に、隣からなにやら叫び声が聞こえたような気がしたが気のせいだな。

「ふぁ～少しばかり頑張りすぎたかな？」

目を擦りながら、外に出てみると翔からドヨ～ンという効果音が合いそうな雰囲気を出していた。

一緒に歩いていた十代が魁吏に気づき走ってきた

「おふぁよ～十代。」

「ああ、おはようじゃなくて！魁吏、あれどうするんだよ！」
十代が翔の方を指を指しながら言った。
「ん～なんかあったのか？」
「お前が、昨日死者蘇生を地獄からの呼び声やら降格処分に置き換えたのを知らずに祈り続けて、ようやく気づいたと思ったら変な奇声を上げて口からなんか出てきたんだ！」
「あ～、昨日の奇声は気のせいじゃなかったのか。良かった、良かった。変な電波を受信出来るようになったのかと心配だったんだが。」
魁吏が胸をなで下ろすと
「おい、そういう問題じゃないだろ！」
十代と魁吏の会話にようやく翔も気づき、まるでゾンビのようにこっちに向かってきた
「か～い～り～くん。君っすか？死者蘇生を地獄からの呼び声と降格処分に置き換えたのは…」
「ああ、それでか」
「それがじゃないっす！！ひどいじゃないすっか、よりによって地獄からの呼び声にするなんて」
魁吏に掴みかかるように言ってくる翔に対して魁吏は

「馬鹿野郎、自分のデッキを信じずに使者蘇生だのみしているお前が悪い。そんな事をしているんだったらデッキを見直して改良でもしてろ。」

魁吏に痛い所を突っ込まれ翔は蹲って地面にのの字を書き始めてしまった。

「だって、しかたないじゃないっか・・・カードも枚数持ってないからデッキも改良出来なかったし」

「はぁ～なら、今度からは俺の所に来い。色々とカードは余っているからデッキを改良手伝ってやるから」

魁吏は額を手で押さえながら翔に言った

「ホントすか！なら、お願いしたいっす！！」

「お、面白そうだな、俺もその時は混ぜてくれよ！！」

このような感じで、テストを受けた。

「はぁ～筆記テスト、本当にめんどかった・・・まぁ、全部問題は埋められたからいいかな」

魁吏が机に伏せていると

「あら、どうしたの？もしかして、テストうまくいかなたったのから？」

「そ、そうなんですか、魁吏さん。」

「ちげ～よ。疲れただけだよ。明日香、美里」

そう、話しかけてきたのは明日香と美里だった。

「そう、所で貴方は、カードを買いにいかないのかしら？十代や翔君は買いにいたんでしょ？」

「俺には必要ないな。それに急にカードを追加してバランス崩しても大変だしな。」

明日香達とご飯を食べ、午後の実施試験へ向かった

そして、試験が始まり、十代は万丈目に勝ち他の皆も

「ドリルロイドで止めっす！！」

「行け、ウォータードラゴン！！！！」

「代将軍　紫炎を筆頭に皆で止め！！」

翔も、前日にデッキを見て調整してあげたおかげか、らくらく勝てていた（相手は、同じオシリスレッドだけれども・・・・）

「しかし、美里のあれを見るとただのいじめに見えてくるのは俺だけかなぁ～」

「仕方ないわよ、あれの爆発力が六武衆なんだから。」

後ろを振り返ると、明日香とえ～と・・・・あ、モモヨとジュンコ

がいた

「ちょっと！！今、私達の名前忘れていなかった！！」

「明らかに、反応が遅かったですわよ！！」

「ははははは、所で明日香？お前、まだ試験やっていなかったよな？」

「ふふ、ええそうよ。何時になったら始まるのかしら。」

最初の笑いに少しだけ不安が過った、こうしていると階段から試験を終えたばかりの美里と十代達が上がってきた。

「おつかれさま、皆。どうだった、試験は？」

魁吏が聞くと

「いや～トメさんからパックを貰っていなかったら負けてだぜ～あ～良かった」

「こっちも、問題はない。むしろ、本気が出せなかったがな。」

「魁吏君が、昨日デッキを弄ってくれたおかげで回りが良かったす！！ありがとう！！」

「わ、私も大丈夫でした・・・魁吏さん達はまだなんですか？」

美里が、魁吏と明日香を見て言った

「ああ、全く。早く、終わって欲しいもんだぜ。」

魁吏がため息をはくと

「そう、長くは待たないと思うわよ。ほとんどの生徒が試験を終えているからそろそろでしょう。」

明日香は相変わらず笑って言い、そこに

『オシリスレッド　如月魁吏君。オシリスレッド　如月魁吏君。まもなく試験を開始します。特定の位置で用意してください』

「お、ようやくか。さてと、じゃあ油断せずにがんばってくるかな。」

「おう、頑張ってこいよ、魁吏！！」

「頑張るっすよ！！」

「君なら、そう簡単に負けはないと思うが頑張れ。」

十代、翔、三沢の順に声を掛けてくれて

「あ、あの・・・頑張ってくださいね！！」

顔も、真っ赤にしながらも魁吏を応援した美里に

「おう、ありがとな、頑張ってくるよ！！」

そして、デュエル場に着いたはいいが

「おい。なんで、相手がお前なんだ？明日香・・・」

そう、魁吏の対戦相手は魁吏の後に呼ばれた明日香だった。

「あら、知らないの？オベリスクブルーにはね、相手も選択する事が出来て許可が通れば試験を受ける事が出来るのよ。」

明日香は、悪戯を成功した子供のように笑っていた

「さっきから、ひたすら笑っていたのはこれだったのか・・・しかたね、迷っていたって仕方がない！さぁ、やるか、明日香！」

「ちょっと待って、ただデュエルするだけじゃあ面白くないから少し賭けをしないかしら」

あの、優等生の明日香からは信じられないような言葉が出てきたが

「賭けだぁ～一体何を賭けるって言うんだ。」

魁吏は、明日香を真っすぐ見て言い、おもむろに明日香は言った

「もし、このデュエルで私が勝ったらシンクロモンしたーとそれに必要なチューナーを少し分けてくれないから」

魁吏は、その言葉を聞き仰天した

「明日香、お前分かって言っているんだよな。それを条件に出すっていう事はそれなりに対価を払う覚悟があるんだな？」

魁吏は、明日香を睨むように言い明日香は

「ええ、分かっているわ。でも、あなたが見せてくれたあの美しいモンスターを自分も使ってみたいという感情が日に日に高まっていくのよ。だから、こんな賭けを提案したのよ。」

明日香の眼は確かに、覚悟の決めていた

「分かった、約束しよう。もし、お前が勝ったらシンクロモンスターとチューナーモンスターをくれてやるよ。ただし、負けだ場合、こっちの条件を飲んでもらう」

「いいわ、そのくらいの覚悟がなければこんな事を言うわけがないもの。さぁ、その条件とは何！！」

明日香が生きこんできいた

「ああ、もし負けたら・・・・・お前とモモヨとジュンコ、それに美里は明日超ミニのチャイナ服で授業を受けてもらう。」

「・・・・・・・・・・はっ？」

『『『『『『『『はあああああああ！！！！！！！！！』』』』』』』』

「ちょ、ちょっとなんでそこに、美里達の名前が出てくるのよ！！」

「こっちは大事なカードを賭けるんだ。そっちもそれなりの対価は必要だろ？」

「それでも、モモヨ達も巻き込むのは「いいです！！明日香様」ジュンコ！？」

「明日香さん、私達は明日香さんと一緒なら何も怖くありませんし、必ず勝ってくれると信じています！！」

「モモヨ、分かったわ。ありがとね、二人とも。それと、ごめんなさいね、美里。こんな事に巻き込んでしまって」

「い、いいえ。大丈夫です。それよりも、恥ずかしいのは苦手なので勝ってくださいね（魁吏さんなら、見てもらってもいいけど／／／／／）」

「さて、そろそろ良いかな？明日香。」

「ええ、貴方の力、存分に見せてもらうわ・・・そして、約束通りシンクロモンスターをいただくわよ！！」

「へっ、明日が楽しみだぜ！！」

『デュエル！！！！！』

第七話　昇格試験　後篇（前書き）

さて、後篇です。明日香とのデュエルはどうなるでしょうか？

第七話　昇格試験　後篇

『デュエル！！』

魁吏　ＬＰ４０００

明日香　ＬＰ４０００

「私のターン、ドロー！　私は、サイバーチュチュを攻撃表示で召喚し、カードを２枚セットしターンエンド！！」

明日香　場

サイバーチュチュ　ＡＫＴ１０００

伏せ　２枚

手札　３枚

「俺のターン、ドロー！」

「魁吏、見せてもらいましょうか。貴方のシンクロ召喚をこの実戦で！！」

その言葉を聞いた魁吏は少し言葉を濁らせた

「え～と。悪い、明日香・・・・」

「へっ」

「今日は、シンクロは使わないんだというかこのデッキにチューナ

ーそのものが入っていないだよね♪」

「はい？？？？？」

『『『『『『『『はあああああああああああ！！！！！！！』』』』』』』』』

魁吏のその一言に、会場に残っていた生徒が叫んだ

「おい、魁吏！今日は、シンクロは使わないのかよ～せっかく楽しみにしてたのに」

「せっかく、新しいデータが取れると思っていたんだがな。残念だ。」

等など、皆好き勝手な事を言っている

「そんな、楽しみにしていたのに・・・・なら、今回は前に美里と戦った獣デッキかしら？」

明日香も少なからず、意気込みがなくなっていたが

「いや、あれとは違うデッキだし、でもシンクロと同じくらい面白い事が起きる事になると思うぜ。」

魁吏は、明日香の方を見て笑った。

「シンクロと同じくらい面白いですって？どう言う事？」

「まぁ、見てれば分かるよ。俺は、手札からレスキューラビットを

攻撃表示で召喚！」

魁吏　場
レスキューラビット　ＡＫＴ３００

「シンクロを使わないのにそんな、攻撃力の低いモンスターで何をするつもり？」

明日香は、魁吏が召喚したモンスターをみて言った

「それはな・・・こうするのさ！レスキューラビットの効果、このカードを除外する事でデッキから同名通常モンスターを２体特殊召喚する！来い、マンモスの墓場を特殊召喚！」

魁吏　場
マンモスの墓場　ＡＫＴ　１２００　×２

「な、魁吏。貴方は私を馬鹿にしているの！！モンスター効果を使ってまで召喚したのがたかが攻撃力が１２００しかないマンモスの墓場なんて、バカにするのも体外にしなさい！！」

明日香は、魁吏が召喚したマンモスの墓場をみて明らかに怒っている。

「いや、明日香。俺は、バカに何かしてないぜ」

「なら、なんでこんなモンスターを召喚したのよ！」

「それはな、こうするからさ！！俺は、レベル３のマンモスの墓場２体をオーバーレイ！！」

『『『『オーバーレイ！？！？』』』』』

「２体のモンスターでオーバーレイネットワークと構築！エクシーズ召喚、現れろ！！？２０　蟻岩土　ブリリアント！！」

魁吏　場

？２０　蟻岩土　ブリリアント　ＡＫＴ１９００

「な、エクシーズ召喚！？！？」

「なんだ、あのモンスターは！！」

「シンクロ召喚とは違う新しい召喚方法！！」

魁吏が見せたエクシーズ召喚で会場内がざわめき始めた

「魁吏、何なのよ。そのエクシーズ召喚って！？」

明日香もシンクロ召喚とは違う召喚方法でモンスターが出てきた事に驚いていた

「ああ、このモンスターをシンクロモンスターとは違いエクシーズモンスターって言ってな。このモンスターを召喚するには同じレベルを持つモンスターを素材にする事で召喚する事が出来、このモンスター達にはレベルがなく、ランクという形で決められているモンスターなんだ。後は、効果を持つエクシーズモンスターは素材となるモンスターを取り除く事で効果を発揮できる事かな？」

魁吏が、エクシーズ召喚とエクシーズモンスターの説明をし終える

と明日香の眼はさっきまでとは違いまるで、子どもが新しいおもちゃを買ってもらったような目でキラキラと輝いていた

「面白いわ。確かに、シンクロ召喚と同じ位にいえ、私はまだシンクロモンスターとは戦っていないからそれ以上にワクワクするわ。」

「喜んでもらってうれしいが、これはデュエル中なんでね。続いて、蟻岩土ブリリアントの効果発動、オーバーレイユニットを一つ使い自分フィールドにモンスター全て攻撃力を３００上げる事が出来る、これによりブリリアントの攻撃力は２１００に上昇する。バトルフェイズに移行し蟻岩土ブリリアントで攻撃、クラッシュブレイク！」

「させないわ。伏せカードオープン、和睦の使者！これにより、私のモンスターは破壊されずダメージも０になる。」

「なら、３枚カードをセットしターンエンド。」

魁吏　場
蟻岩土　ブリリアント　ＡＫＴ１８００
伏せカード　３枚
手札　２枚

「私のターン、ドロー。私は、融合を発動させ手札のエトワールサイバーとブレイド・スケイターを融合しサイバーブレイダーを融合召喚するわ。」

明日香　場
サイバーブレイダー　ＡＫＴ２１００

「さっそく出てきたか。めんどくさいモンスターだな。」

「めんどくさいとは随分な言い方ね。まぁ、いいわ、バトルフェイズに入るわ。サイバーブレイダーで蟻岩土ブリリアントを攻撃！」

「く、お互いのモンスターは2，１００が・・・」

「その様子だと、知っているようね。サイバーブレイダーの第一に効果相手の場にいるモンスターが1体のみの場合、このカードは戦闘では破壊されない。よって、蟻岩土　ブリリアントを破壊するわ。」

「ちっ（くそ、このカードはＯＣＧ版だからアニメ版のような効果は持っていない。）」

「残念だったわね、せっかく出したエクシーズモンスターだったのに破壊されてしまって。続いて、サイバーチュチュでダイレクトアタック！」

魁吏　ＬＰ４０００→３０００

魁吏は、明日香を見ながら

「ああ、まさかこんなに早くこいつを破壊されるとは思っていなかったよ。さすがは、オベリスクブルー女子筆頭だけはあるな。」

「あら、こんなことでもう諦めてしまったのかしら？」

「なめるなよ。勝負はここからだ。」

「そう、良かったわ。こんな事であきらめてしまったら面白くない

もの。私は、これでターンエンドよ。」

明日香　場
サイバーブレイダー　ＡＫＴ２１００　（戦闘破壊不可）
伏せ　一枚

「おっと、エンドフェイス時にリバースカードオープン　サイクロン！お前のリバースを破壊させてもらうぜ。」

破壊されたのは、ホーリライフバリアだった。

「そして、俺のターンドロー！（来た、このデッキのエースモンスター！）俺は、魔法カードＤ・Ｄ・Ｒを発動する、手札から一枚手札を捨て除外されているモンスターに装備する。俺は、レスキューラビットを特殊召喚」

魁吏　場
レスキューラビット　ＡＫＴ３００
伏せ　２枚

「あら、今度はどんなエクシーズモンスターを召喚してくれるのかしら？」

明日香は、レスキューラビットを見ながら笑ったが魁吏は

「明日香、これから出すモンスターはこのデッキのエースであり最強の相棒だ。その目に焼き付けろ！俺は、レスキューラビットの効果でデッキからジェネティック・ワーウルフを二体特殊召喚！」

魁吏　場
ジェネティック・ワーウルフ　ＡＫＴ２０００　×２

「（レベル４を二体・・・ランク４のエクシーズモンスターかしらけど！）相手の場にいるモンスターが２体のみの場合このサイバーブレイダーの攻撃力は２倍となるよって、攻撃力は４２００さぁ、どうする魁吏！」

「行くぜ、俺は二体のジェネティック・ワーウルフを生贄に現れろ銀河から生まれた光の龍、銀河眼の光子竜　ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン！！」

魁吏　場

銀河眼の光子竜　ＡＫＴ３０００

「綺麗。何、そのドラゴンは・・・」

明日香は、いや会場中が魁吏が召喚した竜に見とれた

「綺麗・・・」

「うつくしい」

「あの眼に引き込まれそうだ・・・・」

会場の皆は思い思い口にした

「この竜は眼に銀河を宿し神聖なる竜、その力はデュエルキング武藤遊戯のライバル海馬瀬戸が持つ青い眼の白竜を超える。」

「な、あの青い眼の白竜を超える力ですって！？」

「まぁ、そのかわりにこのモンスターは通常召喚が出来ず、攻撃力２０００以上のモンスターをリリースしないと出せないがな。さらに、リバース発動！リビングデットの呼び声、甦れマンモスの墓場を蘇生し、使者蘇生を発動もう一体のマンモスの墓場を復活させる！！」

魁吏　場

銀河眼の光子龍　ＡＫＴ３０００
マンモスの墓場　ＡＫＴ１２００　×２
リビングデットの呼び声
伏せ　１枚

「また、エクシーズ召喚！？」

「行くぜ、マンモスの墓場二体をオーバーレイ、２体のモンスターでオーバーレイネットワークと構築！エクシーズ召喚、現れろ！！？１７　リバイス・ドラゴン！」

魁吏　場

銀河眼の光子龍　ＡＫＴ３０００
リバイス・ドラゴン　ＡＫＴ２０００
リビングデットの呼び声
伏せ　１枚

今度は、魁吏の場に青い龍が特殊召喚された。

「また、？なの！？　何枚あるのよ、？って！」

・・・・９９枚あるらしいけど、言わない方がいいな。見せろって言われたら困るし

魁吏　場

銀河眼の光子龍　ＡＫＴ３０００
リバイス・ドラゴン　ＡＫＴ２０００
リビングデットの呼び声
伏せ　１枚

「攻撃力３０００と２０００のモンスターを2体・・・しかも、一ターンの間でこんな」

「俺はリバイス・ドラゴンの効果を発動する。このカードはオーバーレイユニットを一つ使う事で攻撃力を５００上げる事が出来る。よって攻撃力は２５００だ！そして、俺は通常召喚を行っていない！！俺は、手札からセイバーザウルスを召喚する。これによって、俺の場はモンスターが3体よってサイバーブレイダーの効果は変わる。

銀河眼の光子龍　ＡＫＴ３０００
リバイス・ドラゴン　ＡＫＴ２０００
セイバーザウルス　ＡＫＴ１９００
リビングデットの呼び声
伏せ　１枚

「サイバーブレイダーの第三の効果は相手の場にいるモンスターが３体の場合相手の魔法・罠・モンスター効果を無効にするけど」

「ああ、此処までいたら問題はないな。さてと、バトルフェイズに入るぜ！！やれ、銀河眼の光子龍の攻撃、破滅のフォトン・ストリーム！！」

銀河眼の光子龍の放ったブレスがサイバーブレイダーを破壊した

明日香　ＬＰ４０００→３１００

「くっ、サイバーブレイダーが」

「まだだ！セイバーザウルスでサイバーチュチュを攻撃」

「きゃあああああああ！！！」

破壊の衝撃が明日香を襲った。

明日香　ＬＰ３１００→２２００

「止めだ！リバイス・ドラゴンの攻撃、くらえ、バイス・ストリーム！！」

「きゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」

明日香　ＬＰ２２００→－３００

『勝者　如月魁吏！！』

「よし、俺の勝ちだな。明日香」

魁吏は、明日香に手を伸ばし立たせる

「ええ、私の負けよ。まさか、シンクロじゃなくエクシーズ召喚なんて違った召喚方法を使うなんて驚いたわ。」

「で、どうだった？シンクロと同じくらい面白かったか？」

「ええ、とてもね。でも、今度はシンクロと戦ってみたいわね。」

「ああ、その時を楽しみにしているよ。」

『おめでとう、如月　魁吏君。そして遊城　十代君。君たちは格上であるオベリスクブルーに果敢に挑み勝ち、如月君の場合はまた違った召喚方法で勝利した。君達をラーイエローに昇格しよう。』

その後、十代は原作通りオシリスレッドに残り、魁吏は素直に昇格を受け取りラーイエローに上がった。

おまけ

「おい、所で約束は忘れていないだろうな～」

「「「「ギック！！！」」」」

「明日は、約束通り超ミニチャイナだから～♪」

「「「「い、いや～～～！！！

その翌日、四人は約束通りチャイナ服で受けた。

「いや～良い物を見た♪」

第七話　昇格試験　後篇（後書き）

「なぁ、これってマジなのか？」

「なにが？」

「いや、マンモスの墓場の事がだよ。」

「ああ、これは実際に俺のデッキの中に入っているカードだよ。」

「なんで！？なんで、マンモスの墓場！？レベル３のバニラモンスターなら他にもいるじゃん。ハウンド・ドラゴンやマッド・ロブスターやら」

「いや、最初はそうだったんだけど実は・・・・・」

「実は？」

「初代主人公が使ったカードを使ってみたいというのが理由かな？はははは！」

「くらえ、スパイラル・シェイバー！！！！」

「あぶね！！何しやがる！攻撃力３０００で攻撃してきやがって！？」

「馬鹿か、お前は！？そんな理由でマンモスの墓場を入れたんかい！」

「いや、他にも理由はあるぜ？ラビット効果で特殊召喚すると奈落の落とし穴で二体とも除外されるんだよね。だから、攻撃力１３００のマンモスの墓場を入れたんだ。」

「なるほど、でも最終的にエクシーズで除外されたら意味が無いんじゃないか？」

「でも、墓地肥しにはなるだろ？そういう意味でもマンモスを選んだ。」

「なるほど、一応頭は使っているんだな。」

「一応とはなんだ、一応とは。でも、俺はマンモスで止め刺した事があるぜ。」

「うそだ！」ひぐ〇し風

「うそじゃね！手札に止めをさせられるカードがそろって勝てたんだ。」

「ありえね～」

「では、また次回に会いましょう。」

「「ばいば～い」」

試しに、止めを刺した時の手札

死者蘇生

グランモール

大嵐

の三枚です。最後のドローで死者蘇生を引いたので大嵐→グランモール召喚→死者蘇生でマンモスの墓場という順で止めを刺しました。

第八話　登場！魁吏の精霊達（前書き）

今回は、ついに魁吏の精霊が登場します。　精霊は複数いますがその内出していきたいと思います。

第八話　登場！魁吏の精霊達

「・・・ネエ。ハヤク、ボクのコトにキヅイテヨ」

「俺様をいつまでも無視するとはいい度胸だな、旦那。俺達は、早く旦那に会いたいんだぜ。」

「「俺達(ボク)に早く気づきな（いて）！！他の仲間達も待っているぜ（ヨ）。」」

「はっ！な、なんだ、今の夢は夢にしてはかなりしっかりとした夢だったけど・・・」

とある朝、前回の昇格試験でラー・イエローに昇格が決まった魁吏はベットの飛び上がるかのように起きた。この不思議な夢によって起こされた魁吏、これが魁吏と精霊達との最初の接触だった。

「さて、どうすっかな。暇だしデッキの調整でもするか、まずは明日香と戦った準獣デッキの中身を調整するかな。」

そういい、朝からデッキを調整し始め3時間くらいが経ったころドアから

「お～い、魁吏少しいいか？」

『ドンドン』

十代の声がしドアを叩く音が聞こえてきた。

「ああ、いいぞ。鍵は開いてるから勝手に入ってくれ。」
そうすると、ドアの向こうには十代だけでなく翔と大地それと
「なんだ、チャイナの一緒にいたのか。」
「「チャイナって言わないで！！」」
そう、前回の昇格試験で賭けに負けてしまい一日チャイナ服で過ごした明日香と美里がいた。
「どうした、みんな？わざわざ、ラーイエローの寮に来るくらいだ何かあったのか？」
「まぁ、そうなんだが・・・その前に部屋に入っていいか？廊下だと、ちょっと」
確かに、オシリス寮と比べて広くなったが十代、翔、大地、明日香、美里が部屋の前で集まれば邪魔になる。
「わかった、とにかく入れよ。」
そして、みんな魁吏の部屋に入っていった、そして机の上に置いてあるカード達を見て大地は
「もしかしてデッキの調節でもしていたのか？すまない、邪魔をしてしまって。」
「ああ、気にしなくていい。邪魔されるのは、オシリス寮で慣れた、毎回デッキを弄ってると狙ったかのようにこいつらが部屋に突入し

てくるからな。」
魁吏は、十代達を指さしながら言った、言われた十代達は笑いながら視線を外したのは言うまでもない。
「で、どうしたんだ。十代達はいつもの事だとして、大地や明日香達が一緒だなんて。」
「ああ、実は今日用があるのは俺じゃなくて。「私達よ、魁吏。」ということだ。」
魁吏の前に一歩前に出てきた明日香が十代の言葉をさえぎり言った。
「明日香が俺にか？じゃあ、美里と大地はどうしたんだ。」
「私は、明日香さんと同じ理由で来ました。」
「俺は、面白そうだったから着いてきただけだ。」
美里も明日香と同じように一歩前に出て、大地は笑いながら言った。
「なるほど、で俺に用って何だ？もう少しで、獣デッキにシンクロを混合するためにデッキを見直しているんだが。」
「そのシンクロに関係する事なの・・・」
そうすると、明日香と美里がいきなり頭を下げて
「お願い、シンクロ召喚とエクシーズ召喚について色々と教えて！！私、最初は興味本心でしか考えていなかった。でも、貴方とのデ

ュエルしてもっと知りたいと思ったのお願い！」

「私も、魁吏さんのデュエルを見てもっと強くなりたいって感じたのお願いします！」

二人の姿を見て魁吏は

「なるほど、いいぜ。その意気込み嫌いじゃないぜ。なら、明日香にあったシンクロとチューナ、それとエクシーズを見ないとな、十代達も手伝えこの量を確認するのは大変なんだから。」

魁吏は、積み上げられた段ボールを指さしながら言った

「ああ、分かったぜ。よし、やるか！」

そして、皆でカードを探そうとすると美里が

「あ、あの、魁吏さん。私には探してくれないんですか・・・」

「お前用には、もう眼星は付いているんだよ。どこに置いたかな？え～と、有った有った、ほらこれだよ。」

魁吏は、段ボールとは違う箱からカードの束を美里に渡した。

「な！！なんですか、このカードは！？」

美里の反応を見た十代達も、美里に渡したカードを見た

「こ、これは・・・六武衆？いや、これは真六武衆！？」

そう、美里に渡したカードは六武衆が進化し爆発力がとんでもないカード真六武衆シリーズだ。

「これは、美里が持っている真六武衆が進化した姿だ。試しに、どんな動きをするか見せてやるから良く見てろよ。」

「は、はい」

そして、真六武衆の主な動きを見せたら他の連中の動きが止り、次々と明日香と翔は顔を引きつりながら

「これは・・・」

「なんすか、この爆発力は」

大地は、眉間を押さえながら対策を考えていた。

「これは、場を固める前に瞬殺されるぞ・・・これに対して、どう対策をとれば」

十代はというと

「すげ～、早く戦ってみて～」と眼を輝きながら言っていた。
(作者は、大会で何度か戦いひどい目に合っています。あの爆発力は一体何なんだよ！手札にゴーズかトラゴ、バトルフェーダーがなければ一瞬だって！！)

なんか、電波が飛んできたがそれは、置いといて

「後は、これをどう使いこなせるかはお前次第だ。がんばりな。」

しかし、美里は真六武衆を見ながら

「私なんかに、こんな強力なカードを使いこなせるでしょうか・・・」

「はぁ～おい、美里」

「は、はい。」

そうすると、魁吏は美里の額にビッシ！！言い音のデコピンがした。

「あ、あう・・・な、なにをするんでしか。」

「なにをするんですかじゃね～よ。あたしなんかなんていうな、強くなりたいから此処に来たんだろ？だったら、絶対に使いこなすっていう気迫で行けよ。見込みない奴には、カードは絶対に渡したりはしないんだからよ。」

魁吏は、笑いながら美里の頭を撫でた。

「よし、次は明日香の奴だな。明日香のデッキは戦士だったよな？」

「え、ええ。何か、相性のいい奴はあるかしら？」

「そうだな。まずは、ジュッテ・ナイトこのカードは・・・・・・」

こうして、3時間余り明日香に合うチューナーやらシンクロを選んだ。ついでに、大地にもシンクロ関係を分けようと思って言ってみたら

「俺は、シンクロよりもエクシーズ召喚に興味があるからそっちを重点に教えてくれないか」とエクシーズについて教えた。

その後、デッキの調節をするために何度がデュエルをした。

「しかし、美里の奴すごいな少し教えただけでかなり使いこなせるようになっていた。しかし、疲れた～今日は早めに休むかな？「ソウダよ。カラダハちゃんとヤスメナイと」ああ、そうだな。無理して体を壊したらたい・・・へんだ？」

不意に魁吏の頭の上から声が聞こえてきた。

「だ、だれだ！！」

魁吏が上をむいてみるとそこには、体が機械で出来ており額にはｌｏｖｅと書いてあるウサギ？がこっちを見ていた。

「お、お前、もしかしたらいやもしかしなくても『メカウサー』か？」

魁吏がそういうとメカウサーは魁吏に向って落ちてきた。

「ソウダヨ、ヨウヤクニンシキデキタンダね。」

「お前、もしかして精霊か？十代のハネクリボーみたいな。」

「へ、そうだ。ようやく気付いたか、旦那。」

メカウサーとは違う方から声が聞こえその方向を見てみると机の上に、背中に何やら大砲？を背負っているハ虫類みたいなモンスター

がいた。

「お前、幻銃士か？」

そう、そこにいたのはメカウサーと共に獣デッキに入っているお気に入りのカードの一枚幻銃士だった。

「そうだぜ、全くようやく俺達を見る事が出来るようになったか。こっちは、何度も呼びかけてたって言うのによ。」

「呼びかけてた？もしかして、今日夢で見た奴はもしかして！？」

「ソウダヨ、ボクタチがずっとカイリにムかってヨビカケテいたんだヨ。」

メカウサーは魁吏のあぶらの上に乗って見ていた。

「なぁ、何でいきなりお前達の事が見えるようになったんだ？今まで、ずっと見えなかったのに。」

「旦那、それは俺達を召喚したからだぜ。前回では俺達は召喚はされなかったからな、今回召喚してもらってようやく入口が安定してみる事が出来るようになったんだぜ。」

「そうか、前回はおとぼけしか使わなかったし見る事が出来なかったのか。所で、夢での話で他の仲間って他にもいるのか精霊が？」

魁吏は、メカウサーを抱きかかえながら幻銃士の隣に座った。

「ああ、他に3体程いるけどまだ召喚されていないか条件が適って

いないから現れる事が出来ないけどな。」

「条件？」

「ソウダヨ、ボクタチはチャンとジョウケンをクリアしてミえる（実体化）デキルヨウニナッタンダ。」

「なるほど、お前らの条件は何なんだ？」

「俺の条件は、デュエルでフィールドに俺のトークンを三体以上出すことが条件だ。」

「ボクは、リクルータコウカでイッタイずつ、ばにダスコトがジョウケンナンだよ。」

「そうか、なら名前を付けてやらないとな。でも、今日はもう眠いからまた今度考えてやるよ。お休み。」

「ああ、お休み旦那。」

「オヤスミ、カイリ。」

こうして、魁吏に精霊が付いた

第八話　登場！魁吏の精霊達（後書き）

「なぁ、なんでメカウサーと幻銃士が精霊なんだ？」

ああ、第５話に登場した獣デッキがあったろ。このカードは、どっちも作った当時からずっと入っているお気に入りのカードなんだ。

「なるほど。でも、お前の行きつけのカードショップでも『メカウサー使っているのお前以外で見た事が無い』って言われたよな。」

そうなんだよ。こんなに可愛いし、効果で５００ダメージは地味に痛いと思うんだけどな～

「そういえば、この二体どっちもバーン効果持っているよな？幻銃士は銃士と名のつくモンスター一体に付き３００のダメージだし。」

それは、たまたまだよ。

「他に精霊はいるのか？」

まぁ、一軍から精霊を出そうかなと思っている。

第九話　廃寮探検（前書き）

タイタン編のお話です。どうぞ！！

第九話　廃寮探検

「廃寮に探検だと？」

いつのように、十代達は魁吏の部屋に来ていた

「ああ、こないだレッド寮で怖い話をしていたら大徳寺先生から聞いたんだけど昔廃寮になった所があるらしいから探検しようって話になったから誘いに来たんだ。もちろん、行くだろ？」

十代は当然のように言ってくるが

「（廃寮・・・ってことは、若本のいやタイタンって言った方がいいか此処は。デーモンデッキは見た感じめんどくさいけど、あの声を生で聴けるのは大きいな・・・多分デュエルするのは十代だろうし、念のためにデッキを一つ持って行けば大丈夫だろう。）よし、行こう！」

魁吏は机の上にあるデッキの一つを持ち制服の内ポケットへと入れ部屋を出た。

「しかし、気味が悪いな。幽霊は置いといてもかなり怖いぞ。」

「そうっすね。ここまでうす暗いと本当に何かでそうっす。」

「そう、言うな～翔。そう言っていると出るフラグなんだな。」

翔は、腕を抱えながら左右を見ながら進みその後ろに隼人が続く。

「ちょっと、貴方達何をなっているの？」

「「ぎゃあああああああ！！！！」」

「きゃう・・」

不意に、聞こえてきた声に翔と隼人はびっくりしてしまいその場で腰を抜かしてしまい座り込んでしまった。魁吏と十代は声がした方を見てみると月明かりから姿がはっきりと確認できた。

「なんだ、明日香と美里じゃないか。どうしたんだよ、こんな時間にしかもこんな場所で？」

「それは、こっちのセリフよ。貴方達が大声を出したから美里がびっくりしてしまったじゃない。」

「あ、明日香さん。私は大丈夫だから・・・」

明日香の後ろには美里が居たが、さっきの翔と隼人の大声でびっくりしてしまったようで明日香の袖をしっかりを握り締めていた。

「あ、もしかして。明日香達も廃寮に肝試しに行くのか？」

十代は何時のように能天気だった。

「い、いえ。私は、明日香さんがこんな遅く外に出て行くのを見て追いかけてきただけです。」

明日香の方を見ながら美里は此処までの経緯を話した。

「貴方達、あそこに行くのは校則違反よ。早く帰りなさい。」

明日香は、少し睨みを利かせながら魁吏達の方を睨んだ。

「え～お前も廃寮の所に行く所だったんだろ。なんで、俺達だけ帰らなきゃならないんだよ～」

「違うわ。私は・・・」

「明日香、お前何か隠しているんじゃないのか。」

今まで黙っていた魁吏が静かに口を開いた。

「お前、もしかして廃寮の行方不明者の中に知り合いでもいるんじゃないのか？」

「っ！！」

魁吏が放った言葉に明日香は少なからず驚いてしまった。

「・・・ええ。行方不明者の中に私の兄『天上院　吹雪』が居たのよ。」

「「「「！！！！！」」」」

魁吏以外は驚いた。

「なら、廃寮に行こうとしたのは何か手掛かりを探しに行く所と言った所か？お前も、かなり無茶をするな。」

「ほっといて頂戴。これは、私個人の問題なんだから首を突っ込まないで！！」

明日香は、走りながら廃寮の方へと走って行ってしまった。

「おい、魁吏！！」

「ああ、本当に世話がかかる姫だ。お前達も一緒に来い、はぐれると逆に危ない。」

「はい（っす！）（なんだな）」

「しかし、本当にボロボロだな。」

「でも、レッド寮よりはかなりいいぜ。俺、こっちに引っ越してこようかな？翔達もどうだ。」

「「いやっす（なんだな）！！」」

さすがの二人もこの不陰気には無理があるらしい

「あら、これは・・・」

美里が何かに気づき手に取った

「どうした、美里。なにか、見つけたか？」

みんなが、美里の方へ集まり手に取った物を見ると

「『１０ＪＯＩＮ』ってこれもしかして。」

その瞬間、部屋の奥から

「きゃあああああああああああああああああああああ！！！！！」

「「「「「っ！！！！！」」」」」

「今の声って！」

「ああ、明日香の声だ！！」

「（ようやく、現れたか。）よし、声がした方へ行くぞ！」

三人は部屋の奥へと走り出した。

「ま、待って～アニキ、魁吏君～」

「おいらを置いていかないでほしんだな～」

後ろから翔と隼人が涙目になりながら走って行った。

「此処は！！」

部屋の奥へと走って行くといつの間にか何やら怪しい所へと出た。

「明日香さん！！」

美里が見る方に目を向けてみると棺に入れられた明日香がいた。そして、その後ろから

「誰だ、そこにいるのは！！」

棺の後ろから深く帽子を被り長いコートを着た男が現れた。

「ふはははは！！！ようやく来たかぁ～小僧共、我はタイタン、闇のデュエルを受け継ぐ者。遊城十代に如月魁吏、貴様ら我とデュエルをしろ～い。我に書くことが出来たら彼女を解放しよう、しかし貴様らが負けた場合闇の罰を受けてもらう。」

「へ、話が早くていいや。じゃあ、此処は俺が「待て、十代。」どうした、魁吏？」

タイタンに向おうとした十代の前に魁吏が割り込んだ。

「すまないが、此処は俺にやらせてくれないか？明日香を止められなかったのは俺の責任だから俺がケリを付けさせてほしい。」

十代は、魁吏の目を見て

「分かったよ、今回は譲るけど必ず勝てよ！！」

「当然だ！！誰に言ってやがる！！」

「ふん、どっちが先でも変わりはな～し。貴様は二人は共に罰を受けるのだからなぁ～」

「それは、やってみるまで分からないぜ！！」

魁吏とタイタンはお互いに向きあいデュエルディスクを構えた。

「「デュエル！！」」

魁吏ＬＰ４０００

タイタン　ＬＰ４０００

「俺のターン、ドロー！俺は、フィールド魔法龍の渓谷を発動する。」

場　龍の渓谷

「俺は、効果で手札のドラグニティ・ファランクスを墓地に捨てデッキからドラグニティを手札に持ってくる、俺はドラグニティ・ドゥクスを手札に加えそのまま召喚。」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・ドゥクス　ＡＫＴ１５００

「お、今日はドラグニティかクロノス先生を倒してから使った所を見てないから楽しみだ。」

「今日は、どんな事が起きるのでしょうか。」

「さらに、ドゥクスの召喚時効果により墓地にあるレベル３以下のドラグニティを装備する。俺は、墓地よりドラグニティ・ファランクスを装備する、さらにドゥクスの効果より自分フィールドの存在するドラグニティと名のつくカード掛ける２００攻撃力を上げる。」

ドラグニティ・ドゥクス　ＡＫＴ１５００→１７００

「俺は、さらに装備状態のファランクスの効果を発動しこのカードを特殊召喚する。」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・ドゥクス　ＡＫＴ１７００
　　ドラグニティ・ファランクス　ＡＫＴ　５００

「さて、準備は整った。」

「準備だと～そんな雑魚モンスターでぬぁ～にが出来るというのだ。」

タイタンは魁吏の場に召喚されたモンスターを見て笑ったがすぐにそれが間違いであると思い知らされる。

「これが、その答えだ！！レベル４のドラグニティ・ドゥクスにレベル２ドラグニティ・ファランクスをチューニング！！」

「チューニングだと～！？」

「今ここに、仲間達の力で相手の強大なる力を突き破れ！！シンク

ロ召喚　現れろドラグニティ・ゲイボルク！！」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・ゲイボルク　ＡＫＴ２０００

「シンクロ召喚だと、何だそれは。」

「俺は、さらに二枚カードを伏せてターンエンド！」

魁吏　場

モンスター

ドラグニティ・ゲイボルク　ＡＫＴ２０００

魔法・罠

伏せカード　２枚

「くっ。我のターン、ドロォー！我は、デーモンソルジャーを攻撃表示で召喚。さらに、装備魔法デーモンの斧を装備する。」

タイタン（若本？）　場

モンスター

デーモンソルジャー　ＡＫＴ１９００→２９００

魔法　罠

デーモンの斧

「バァトルだ、デーモンソルジャーでドラグニティ・ゲイボルクを

攻撃！」

「なら、ドラグニティ・ゲイボルクの効果を発動！！」

「なぁんだと！？」

「こいつは、墓地にある鳥獣族を除外する事でその攻撃力分アップさせる。俺が除外したのはドラグニティ・ドゥクス、攻撃力は１５００よって攻撃力は」

ドラグニティ・ゲイボルク　ＡＫＴ２０００→３５００

「なぁんだと、それでは！」

「迎撃しろ、ゲイボルク！魔槍天羽」

剣から斧に変わったデーモンソルジャーにゲイボルクは持っていた槍で胸を貫いた。

タイタン　ＬＰ　４０００→３４００

「く、我は二枚カードを伏せターンエンド！！」

タイタン　場

モンスター　０

伏せカード２枚

「俺のターン、ドロー！俺は、龍の渓谷の効果でファランクスを墓

地に捨てドラグニティ・ブラックスピアを手札に加える。俺は、霧の谷のファルコンを召喚。」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・ゲイボルク　ＡＫＴ２０００
霧の谷のファルコン　ＡＫＴ２０００

「その瞬間、伏せカードオープン！激流葬、フィールドのモンスターをすべて破壊する！！」

「させるか、チェーンでファルコンを生贄にゴットバードアタックを発動！！発動中の激流葬と伏せカードを破壊する！！（破壊したのは・・・ヘイトバスターかいやらしいカード入れやがって）」

「だが、お前のモンスターは全滅だぁ！」

「ち、俺はカードを一枚伏せターンエンドだ。」

魁吏　場

モンスター０

伏せカード１

「我のターン、ドロー。我はインフェルノ・クインデーモンを召喚！さらに、フィールド魔法万魔殿　パンデモニウム　悪魔の巣窟を発動するぅ！」

場　龍の渓谷→万魔殿　パンデモニウム　悪魔の巣窟

タイタン　場

インフェルノ・クインデーモン　ＡＫＴ９００

「やっぱりそれが入っていたか。（まずい、龍の渓谷を破壊させた。）」

「うわっ！」

「インフェルノ・クインデーモンでダイレクトアタック！」

魁吏ＬＰ４０００→３１００

「カードを一枚伏せ我はターンエンド！そして、闇がお前の体を蝕むぞ。」

魁吏の体の一部か消えた

「か、魁吏の体が！？」

「大丈夫っすか、魁吏君！」

「ふぁぁぁ、どうするんだな！？」

「魁吏さん・・・」

十代達は体の一部が消えた事に驚き、美里は涙目になっている。

「大丈夫だ、安心して見てろ！」

タイタン　場

モンスター　インフェルノ・クインデーモン　ＡＫＴ９００

伏せカード１

「俺のターンドロー！よし、俺は手札から調和の宝札を発動する！」

「調和の宝札？」

「なんすっか、その魔法カードは？」

「このカードは手札にある攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナーを捨てて新たにデッキから二枚ドローする。俺は、手札からドラグニティ・ブラックススピアを捨てて二枚ドロー、俺はドラグニティ・レギオンを召喚！召喚時効果で墓地のドラグニティを装備する、俺はファランクスを装備。」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・レギオン　ＡＫＴ１２００

魔法　罠

ドラグニティ・ファランクス

「しかし、そのような雑魚で何かできる。」

「俺は、これで終わりなんて言っていないぜ！俺は、装備状態のレギオンをゲームから除外し現れろ、ドラグニティの王よ、ドラグニティ・レヴァテインを特殊召喚！こいつはフィールドにドラグニテ

ィを装備しているドラグニティを除外する事で手札から特殊召喚できる、そしてレギオン達と同じように召喚・特殊召喚時墓地の存在するドラゴン族を装備する出来る俺はドラグニティ・ゲイボルクを装備！」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・レヴァテイン　ＡＫＴ２６００

魔法・罠

ドラグニティ・ゲイボルク

「なんだとぉ、攻撃力１２００の雑魚が攻撃力２６００のモンスターに変わった！？」

タイタンが驚いているが後ろでも十代達が

「すげー高レベルモンスターを生贄無しで召喚しやがった！」

「装備したモンスターを除外する事で特殊召喚出来るなんて、すごいモンスターす・・・」

「でも、なんでシンクロモンスターを装備したんだろ？今までは、ファランクスだったのに。」

「確かにそうっすね。」

「あいつにはまだ隠された能力があるのか？」

「バトルフェイズだ！ドラグニティ・レヴァテインでインフェルノ・クインデーモンを攻撃！秘剣　つばめ〇し！」

「「「ここで、ネタか（ですか）（っすか）！」」」

「ふはははは、甘いぞ！トラップ発動、万能地雷グレイモア、これできさまのモンスターは破壊だぁ！」

レヴァテインの足元で爆発が起きて破壊された。

「ああ、せっかくのモンスターが。」

「これで、またお前のモンスターは０だぁ。」

「・・・・・それは、どうかな。」

魁吏は笑いながらタイタンを見た。

「何を言っている？」

爆炎により舞いあがった煙が晴れていくとそこにいたのは装備されていたゲイボルクが居た。

「な、なぜだ！？なぜ、こいつがフィールドに？」

「ドラグニティ・レヴァテインの効果が発動したんだ。こいつは相手の効果で破壊された時像微状態のモンスターを特殊召喚出来る、よって装備されていたドラグニティ・ゲイボルクを特殊召喚したんだ！」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・ゲイボルク　ＡＫＴ２０００

「こいつは、バトルフェイズ中の特殊召喚だ！よって攻撃は可能、インフェルノ・クインデーモンに攻撃、魔槍天羽！」

「がぁぁぁ！！！！」

タイタン　ＬＰ３４００→２３００

「俺はターンエンド！」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・ゲイボルク　ＡＫＴ２０００

「なかなかやるな、小僧！我のターン、強欲は壺を発動させてドロー。手札から使者蘇生を発動させインフェルノ・クインデーモンを復活させる。そして、ふはははは　堕落　フォーリン・ダウンを発動！」

「な、なんだと！！！！」

「堕落は自分フィールドにデーモンが居る時相手モンスターを奪う装備カードだぁ。よってゲイボルクはいただく！」

タイタン　場

モンスター　インフェルノ・クインデーモン　ＡＫＴ９００
　　ドラグニティ・ゲイボルク　ＡＫＴ２０００

魔法・罠

堕落

「バトルフェイズ、二体でダイレクトアタック！」

「ぐぁぁぁぁぁぁ！！！」

魁吏　ＬＰ３１００→２００

「我はターンエンドだぁ。さあ、体が消えるぞ。」

魁吏の体の全体がほぼ消えた

「「「「魁吏（君）（さん）！！！」」」」

「まだだ、俺は。まだ負けてねぇ！！俺のターンドロー！手札から強欲な壺を発動、二枚ドローする、（来た！！）俺は、ドラグニティ・ドゥクスを召喚しファランクスを装備、そして解除させ特殊召喚、最後にチューニング！ドラグニティの戦士よその力で悪魔を打ち滅ぼせ！シンクロ召喚　現れろドラグニティ・ヴァジュランダ！！」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・ヴァジュランダ　ＡＫＹ１９００

「ヴァジュランダの効果発動し、墓地からドラグニティと名のついたドラゴン族を装備する。ファランクスを装備する。」

「またそいつか。いい加減あきるぞぉ。」

「うるせえ。こいつが特徴なんだ、俺は最後の効果を発動する！！

１ターンに１度このカードの装備させれているカードを一枚墓地に送る事で攻撃力はエンドフェイズまで倍になる、俺は、装備状態のファランクスを墓地に送る！」

「な、なんだと！！それでは・・・」

魁吏　場

モンスター　ドラグニティ・ヴァジュランダ　ＡＫＴ１９００→３８００

「攻撃力３８００だと・・・」

「行くぞ、これが最後だ！ドラグニティ・ヴァジュランダでインフェルノ・クインデーモンに攻撃、雷槍一閃！！」

「ぐぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

タイタン　ＬＰ２３００→１６００

「ちぃ、今回は此処までだぁ。さらばぁ！！！」

タイタンは、煙球を投げ逃げた。魁吏もその場に座り込んだ。

「あぶね～ドゥクスを引けなかったらマジで負けてた。あそこで、堕落なんか引くか普通・・・」

そこに

「大丈夫か、魁吏？お前が、あそこまで追い込まれるなんてあいつ

中々強かったな。」

「でも、勝てたから良かったす。」

「そうなんだな。本当に良かったんだな。」

「魁吏さん、本当に無事でよかったです。本当に・・・」

「悪かったな、皆。しかし、デーモンデッキに此処まで追いつめられるとはまだまだ改良の余地はあるかな。」

魁吏は十代に手を貸してもらい立ち

「さて、明日香を連れてさっさと此処から出ようぜ。いい加減気味が悪くてたまらん。」

明日香を背負い、歩き始めた。

「ん！（何でしょう、魁吏さんが明日香さんを背負った瞬間胸がもやもやしました・・・・）」

そして、外に出たあたりで明日香が眼を覚ました

「こ、ここは・・・」

「ようやく、起きたか。」

明日香は自分が背負われている事に気づき

「か、魁吏！！なんで、貴方が！？」

「お前さ、少しは仲間を頼れよ。ほらよ。」

魁吏は写真を明日香に渡した

「こ、これは！どこで、これを？」

「廃寮の中に合ったんだよ。やっぱり、お前の兄さんの写真だったか。」

「ええ、兄さんは天を１０と書いてたのよ。　ありがとう、これだけでも見つかってよかったわ。」

「さて、眠いから早く送って帰るか。」

第十話　ＶＳ十代　属性融合モンスター（前書き）

ついに、制裁デュエル前までやってきました。少しずつストックが無くなってきました・・・・

いつまで、このペース保てるか不安です。

第十話　VS十代　属性融合モンスター

廃寮事件から数日が経った朝随分ひどい起こされ方をされていた

ドンドン！！！

「うぜ～なぁ。なんだよ、人が気持よく寝ている時によ！！」

「早く、開けろ！！開けなければドアごと爆破するぞ！！」

朝からすごく物騒な事をドアの向こうから言っている。

「なんだ、てめぇらは。」

魁吏はドアを開け、騒いでいた奴らを睨んだら隊長らしき女が

「我々はアカデミア論理委員会だ！如月魁吏、貴様には廃寮不法侵入の疑いで捕縛させてもらう。大人しく我々と一緒に来てもらおう。」

女が手を上げた瞬間、数人の男が魁吏を掴もうとした瞬間

「俺に気安く触るな、屑ども。」

掴もうとした男たちの溝を的確に殴り倒した。

「き、貴様！反抗する気か！」

「うるせぇ、一緒には行ってやる。だが、俺には触れんじゃね。今

度は、溝じゃすまねぇぞ。」

そして、魁吏は校長室に連行された。

「「退学！！！」」

「君たち～は、侵入禁止とされている旧ブルー寮に侵入したの～ネ。これは、重大な校則違反なの～ネ。」

「（ち、何時聞いてもムカつく話し方だぜ。）確かに、我々は旧ブルー寮に侵入しました。しかし、それだけで退学というのは酷すぎませんか。」

「そうだぜ、校長先生。俺達にチャンスをくれよ、お願いだ！」

「僕もお願いします。」

二人が頭を下げた後渋々、魁吏も頭を下げた。

「クロノス教諭、確かにいきなり退学は酷すぎないかね。何かしらチャンスを上げても良いんじゃないのかね。」

「む～ん、ならデュエルで決めるの～ネ。もし、貴方達が勝ったら退学は無しで１０枚の反省文許すの～ネ。負けたら退学、制裁タッグデュエルなの～ネ。」

「デュエルで決めるのか、面白いじゃんか！受けて立つぜ、なぁ、翔！魁吏！」

「ちょ、ちょっと待ってほしいっす。タッグって言っても僕たちは

三人しかいないっすよ。それは、どうするんスか？」

「その一人は俺がやるから大丈夫だ、翔。」

「か、魁吏君。一人で、二人と戦うなんて・・・・」

「その心配はありません～ノ、ならシングル戦も用意すればいい事なの～ネ。君達は他人の心配しない～で自分の心配でもしてるの～ネ。」

「ほら、翔。クロノス教諭もこう言っているんだ、部屋に戻って対策でも練ろうぜ。」

「わ、分かったッす。」

魁吏達は真っすぐ魁吏の部屋に向かった。

「ごめんなさい、私のせいで貴方達がこんな事になってしまって。」

明日香は頭を下げて謝ってきた

「魁吏さん、一人で戦うって聞いたんですが大丈夫なんですか？」

美里もどうやら、騒ぎを聞き部屋までやってきていた

「俺は、元より一人で戦った方が合っているし下手に組んだらバランスが崩れるしな。それと明日香。気にするな、最終的にあそこに行ったのは俺達の意思なんだからお前が気にする事じゃないよ。それより、俺はともかく十代と翔のデッキを改良する必要があるな。」

「俺達のデッキをか？」

十代は、あぶらを掻きながら魁吏の方を見た。

「ああ、制裁デュエルだからな。どんな相手が来るか分かったもんじゃない。だから、少しでもお前達のデッキを改良する。ビークロイドはともかくＥ・ＨＥＲＯについては俺もデッキを持っているから少なからず分かる。」

「えっ！魁吏、お前もＨＥＲＯデッキを持っているのか！」

「ああ、お前のとは融合モンスターや戦術が少し違うがな。よし、十代表に出ろ。」

「なんでだ？」

「今から、お前に渡すカードを実戦で覚え込ませる。翔は、このデュエルを見て対策を考えながらデッキの構築だ。いいな。」

「は、はいっす。よろしくお願いします。」

そして、ラーイエローより少し離れた林の中

「「デュエル！！」」

魁吏　ＬＰ４０００

十代　ＬＰ４０００

「そういえば、魁吏と戦うのってこれが初めてじゃないか。」

「ああそうだな。全く、こんな風にデュエルしたくはなかったが仕方ないか。先攻は俺がもらう！」

「ああ、来い！魁吏！」

「俺のターン！俺は、Ｅ・ＨＥＲＯエアーマンを召喚、召喚時効果によりデッキからＥ・ＨＥＲＯオーシャンを手札に加えカードを二枚伏せターンエンド！」

魁吏　場
モンスター　Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン　ＡＫＴ１８００
魔法・罠
伏せカード二枚

「見た事のない、ＨＥＲＯだな。でも、こっちも負けてられないぜ！俺のターン、ドロー！」

十代は手札を見た瞬間笑った。

「（おい、その笑い顔はなんだ・・・）」

「俺は、手札から融合を発動！手札のフェザーマンとバーストレディを融合、現れろＥ・ＨＥＲＯフレイム・ウィングマン！」

「でも、それは読んでいた！リバースカード発動、奈落の落とし穴！攻撃力１５００以上のモンスターを破壊し除外する！」

「げっ！させるか、速効魔法　融合解除を発動し素材のモンスター

を特殊召喚する。来い、フェザーマンとバーストレディ！」

十代　場

モンスター　E・HEROフレイム・ウィングマン→E・HERO
フェザーマン　AKT1000
E・HEROバーストレディ　AKT1200

「全く、いきなり融合とかいつ見てもあり得ない引きだな。おい。」

「魁吏、安心するのは早いんじゃないか。俺はまだ、通常召喚をしてないぜ」

「・・・・おい、まさか」

「二体のモンスターを生贄に来い、E・HEROエッジマン！」

十代　場

モンスター　E・HEROエッジマン　AKT2600

「ふざけんなぁ！！なんだ、その引きは！！」

「行くぜ、エッジマンでエアーマンを攻撃！パワー・エッジ・アタック」

「くそ。」

エッジマンの攻撃によりエアーマンは破壊された。

魁吏　ＬＰ４０００→３２００

「俺は、カードを一枚伏せてターンエンド！」

十代　場

モンスター　Ｅ・ＨＥＲＯエッジマン　ＡＫＴ２６００

魔法・罠

伏せカード１枚

「す、すごい。まだ、始まったばかりなのに・・・」

「魁吏の罠にとっさに反応してさらに、上級モンスターを呼び出すなんてすごいわね。」

「魁吏さん・・・」

三人は序盤から相手の読みあいをする二人に唖然としていた。

「くそ、フレイム・ウィングマンを上手く回避できたと思ったらこいつかよ。仕方ね、さっさとこいつを倒すか。」

「な！攻撃力２６００のモンスターを倒すですって、モンスターも無いのにどうやって！？」

「俺のターン、ドロー！俺は、エヴォルテクター　シュバリエを攻撃表示で召喚！」

魁吏　場

モンスター　エヴォルテクター　シュバリエ　ＡＫＴ１９００

「ＨＥＲＯじゃないんだな。でも、攻撃力１９００で攻撃力２６００のエッジマンをどう倒す！」

「こうやるんだよ、リバースカードオープン、デュアルスパーク！こいつは自分フィールドに存在するレベル４のデュアルモンスターを一体生贄にフィールドのカードを一枚破壊する。その後、デッキから一枚ドローする。俺は、エッジマンを選択！」

電撃を纏ったシュバリがエッジマンに体当たりし破壊した。

「エッジマン！こんな、簡単に破壊されるなんて・・・」

「俺は、デュアルスパークの効果で一枚ドロー。さらに、魔法カード融合を発動！」

「！？来たか、魁吏のＨＥＲＯが！」

「俺は、手札の沼地の魔神王とＥ・ＨＥＲＯオーシャンを融合！氷の世界から現れろ、Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺＥＲＯ！」

魁吏　場

モンスター　Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺＥＲＯ　ＡＫＴ２５００

「おお、見た事のないＨＥＲＯだ！」

十代も見た事のないＨＥＲＯを見てテンションも上がってきている

「こいつは、ＨＥＲＯと水属性の属性融合モンスターの一体だ！」

「「「「属性融合！？」」」」

「そう、ＺＥＲＯは水その他にも火、風、闇、光、地の計６つの属性融合モンスターがＨＥＲＯには存在する。」

「なんて、モンスター達なの・・・」

「どう言う事っすか？」

翔は、明日香が言った意味が分かっていない様子で美里が

「翔さん、つまり十代さんがいつも使っているフレイム・ウィングマンの素材のフェザーマンとバーストレディはそれぞれ風属性と火属性なのでにフェザーマンを属性の素材にすれば風属性の融合モンスターにバーストレディを属性の素材にすれば火属性の融合モンスターになるというわけです。しかも、属性に任せずにそのまま融合してフレイム・ウィングマンにする事も可能なんです。」

美里の丁寧で分かりやすい説明を聞いた翔は

「なら、状況によって融合先を変更出来るってことじゃないっすか！」

ようやく、この強力さに気づいたようだ。

「強力だな、属性融合モンスター。く～他のモンスターも早く見てみたいぜ！」

「おい、そんな悠長な事を言っている場合か？俺は、アブソルートＺＥＲＯで十代にダイレクトアタック！瞬間氷結！」

「まだ、ライフを削られるつまりはないぜ！リバースカードオープン、攻撃の無力化！」

「防いだか・・・俺はターンエンドだ。」

魁吏　場

モンスター　Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺＥＲＯ　ＡＫＴ２５００

魔法・罠

伏せカード１枚

「へへへ、俺のターン、ドロー！俺は手札からバブルマンを召喚、効果により二枚ドローする！」

「（こいつ、まじでチーとじゃないのか！？しかも、バブルマンはアニメ効果だし・・・・なんでＯＣＧだと弱体化したんだろ。）」

「俺は、魔法カード融合回収を発動しバーストレディと融合を手札

に加えるそして、融合を発動し手札のＥ・ＨＥＲＯクレイマンとバーストレディを融合！来い、Ｅ・ＨＥＲＯランパートガンナー！」

十代の場に盾を持った女性型モンスターが現れた。

十代　場

モンスター　Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー　ＤＥＦ２５００
Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　ＤＥＦ　８００

「おい、何にも居なかったはずなのに何で此処まで場が固まっている・・・」

「さぁ、なんでだろうな。とにかく、俺はランパートガンナーの効果発動、攻撃力を半分にしダイレクトアタックが出来る！ランパートショット！」

「ぐあぁぁぁぁ！！」

魁吏　ＬＰ３２００→２２００

「俺は、ターンエンドだ！」

「（このままじゃ、まずいな。）俺のターン、ドロー！俺、融合回収を発動し融合とオーシャンを手札に加える。そして、俺はＥ・ＨＥＲＯ　フォレストマンを守備表示召喚。」

魁吏　場

モンスター　Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺＥＲＯ　ＡＫＴ２５００

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン　ＤＥＦ　２０００

「さらに、融合を発動！俺はフィールドのＺＥＲＯと手札のオーシャンを融合しＺＥＲＯを融合召喚！」

皆、なぜＺＥＲＯを融合しＺＥＲＯを召喚したか不思議に思った。

「なぁ、なんでわざわざＺＥＲＯを素材にしたんだ？それなら、フォレストマンでも良かったのに。」

十代最もの疑問を魁吏にぶつけ、魁吏は含み笑いながら

「それは、ＺＥＲＯの効果を発動するためだ！ＺＥＲＯの効果発動、このモンスターがフィールドを離れた時、相手フィールドのモンスターを全て破壊する！くらえ、疑似サンダーボルト！！」

「な、なんだと！」

十代の場にいたランパートガンナーとバブルマンは体の表面化凍った瞬間粉々に砕け散った。

「なんて、効果なの・・・フィールドを離れただけで相手モンスターを破壊するなんて」

「これじゃあ、あのモンスターを破壊した瞬間巻き込まれて破壊されじゃないっすか！」

「それだけじゃない。今みたいに自分で行為にフィールドを離れさせれば相手に場を０にしてダイレクトアタックが可能になる。」

「行くぜ、十代！アブソルートＺＥＲＯでダイレクトアタック、瞬間氷結！」

「うひぃぃぃぃ、さみぃ！」

十代　ＬＰ４０００→１５００

「俺は、一枚カードを伏せてターンエンド。」

魁吏　場

モンスター　Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺＥＲＯ　ＡＫＴ２５００
Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン　ＤＥＦ　２０００

魔法・罠

伏せカード２枚

「俺のターン、ドロー！来たぜ、永続魔法　命削りの宝札を発動するぜ！デッキから五枚ドローし五ターン後手札を捨てる。」

「（こいつ、主人公の中でも一番の引きをしてないか？しかも、引いたカードの中に多分・・・）」

「俺は、魔法カード強欲な壺を発動しさらに二枚ドロー！そして、戦士の生還を発動、墓地からフェザーマンを回収し融合を発動する。手札のフェザーマンとバーストレディを融合し現れろ、フレイムウィングマン！」

十代　場

モンスター　E・HEROフレイム・ウィングマン　AKT2100

「また、こいつか・・・なら、手札には。」

「さあ、HEROの戦いにふさわしい舞台に行こうぜ、魁吏！フィールド魔法、魔天楼　スカイスクレイパーを発動！」

場　魔天楼　スカイスクレイパー

「やっぱり引いていたか！」

「これで止めだ！バトル、フレイム・ウイングマンでE・HEROアブソルートZEROを攻撃、フレイムシュート！」

「悪いが、お断りだ！リバースカードオープン、速効魔法　マスク・チェンジ！こいつは、自分フィールドにいるE・HEROをM・HEROに変身させる！」

「「「「M・HERO！？」」」」

「俺は、ZEROを変身させる。来い、M・HERO　ヴェイパー！」

魁吏　場

モンスター　M・HERO　ヴェイパー　AKT2400

「へ、でも攻撃力はZEROの方が高かったな。どっちにしろ、これで終わりだ！」

「・・・・・十代、忘れたか？ＺＥＲＯのモンスター効果を。」

「あ！！しまった、これもフィールドを離れた事に！」

「そういう事だ！ＺＥＲＯの効果再び発動、疑似サンダーボルト！」

「く、俺はまだ通常召喚を行っていない。俺は、フレンド・ドックを守備表示で召喚しカードを２枚セットしターンエンド。」

十代　場

モンスター　フレンドック　ＤＥＦ　１２００

伏せカード２枚

「俺のターン、ドロー！ここで、フォレストマンの効果を発動、墓地又はデッキから融合を手札に加える。俺はデッキから融合を手札に加える。」

「へ～融合回収モンスターか、毎ターン融合が手札に戻ってくるのはいいな。」

「俺は、今加えた融合を発動し、フィールドのフォレストマンと手札の炎属性、エヴォルテクター　シュバリエを融合！」

「炎属性！来るか、二体目の属性融合モンスター！」

「燃え上がり、全てを灰にしろ！融合召喚、Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァ・マスター！」

魁吏　場

モンスター　Ｍ・ＨＥＲＯ　ヴェイパー　ＡＫＴ　２４００
Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァ・マスター　ＡＫＴ　２６００

「あれが、二体目の属性融合モンスター炎のノヴァ・マスターなのね。」

「体全体が燃えているっす。どんな、効果を持ってるんすかね。」

「これで、水と炎・・・・やっぱり、順応性か高いモンスター達ですね。」

「ええ、相手はどっちの属性で融合するかを考えて戦略を練らなくてはいけないからかなり、厄介なモンスターね。」

「く～かっこいいぜ！炎の戦士、ノヴァ・マスター、どんな能力を持っているんだ！」

「行くぞ、十代！ノヴァ・マスターでフレンドックを攻撃。フレイム・メテオ！」

ノヴァ・マスターが放った炎の岩がフレンドックに直撃し破壊した。

「その瞬間、ノヴァ・マスターの効果発動！このモンスターが相手モンスターを破壊した時デッキから一枚ドローする。」

「ドロー効果モンスターか、相手を破壊するたびにドローし手札を増強か・・・」

「ただでさえ、融合は手札の消費が激しいからな。ドロー効果はかなり、使えるぜ。」

「でも、俺もフレンドックの効果を発動！墓地からＥ・ＨＥＲＯと融合を手札に加える。俺は、墓地からバブルマンを手札に加える。」

「Ｍ・ＨＥＲＯ　ヴェイパーでダイレクトアタックだ、フリアティクエクスプロージョン！」

「させないぜ、リバースカードオープン！聖なるバリア　ミラーフォース、攻撃モンスターを全て破壊するぜ！」

「それはどうかな、ヴぁイパーの効果は魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない！破壊されるのはノヴァ・マスターだけだ、すまないノヴァ・・・攻撃続行！」

「うわぁぁぁぁ」

十代　ＬＰ１５００→１９００

「く～負けた。今度は勝つからな、魁吏！」

倒れた十代に手を差し出し立たせる魁吏

「なぁ、なんでノヴァの攻撃時に聖バリをはつどうさせなかったんだ？発動すればまだ、生き残れたのに」

「ああ、それは」

十代が手札を見せてきた

「な！」

そう十代の手札にはミラクル・フュージョンとスパークマンが握られていた。もし、このターンでケリを着けていなかったらミラクル・フュージョンでフレイム・ウイングマンそして回収した融合でスパークマンと融合しシャイニング・フレイムウイングマンになっていた。

「あぶね～ギリギリだったぜ・・・・」

「でも、結果的には負けちまったけどな」

「さてと、十代。これで、分かったと思うがお前に渡すのはオーシャン、フォレストマン、エアーマン、そして属性融合モンスターを渡す。これらと、今お前が持つＥ・ＨＥＲＯを混ぜて変幻自在のデッキにする。翔は、ロイドデッキの内容をもう一度確認し直す、タッグデュエルなんだ。一人だけ強くても意味はないからな。」

「わ、分かったす。兄貴の足手まといにならないように頑張るっす！」

翔は、手を握り直し意気込みを入れると翔の肩を叩きながら

「その通りだ、翔。お互いに頑張ろうぜ！」

「よし、一回部屋に戻って調整だ！明日香と美里も手伝ってくれ。三沢、お前の知識には期待しているぜ。」

「いいわよ。」

「分かりました。」

「おう、分からない事があったら言ってくれ。完璧に仕上げて見せる。」

おまけ

部屋に戻りデッキの調節をしていたら十代が机の上にある一つのデッキケースに気が付いた。

「魁吏、これはなんだ？」

「ああ・・・・これは、俺の持つデッキの一軍だ。」

「「「「「一軍！？」」」」」

すると、三沢は

「となると、今度の制裁デュエルではこのデッキで出るのか？」

魁吏は、少し困った表情しながら机の上にあったデッキを手に取った。

「いや、このデッキでは出ない。」

「な、なんでだ？このデッキは一軍なのだろ、ならなんでこのデッキを使わないんだ！？」

「そうっすよ、今度のデュエルで勝たなきゃ退学になるんすよ！」

「このデッキは少しばかり癖のあるデッキでな、それとこいつは相手を徹底的に叩き潰す為のデッキなんだ。だから、今回は使わない・・・・まぁ、いつも持ち歩いてはいるがな。」

「そうなんだ、残念だな～お前の一軍と戦ってみたかったな。」

「まぁ、機会があったらな・・・・」

魁吏は、手に取ったデッキケースを引き出しの中に閉まった。

その様子を見ていた、美里は

「（魁吏さんのあのデッキは一体何なのでしょう？様子が今まで違いましたし今まで使っていたデッキとは何か違うような雰囲気が・・・・）」

第十話　ＶＳ十代　属性融合モンスター（後書き）

制裁デュエルは三回位に分けると思います。では、お楽しみに

第十一話ＶＳカイザー（前書き）

カイザーとのデュエル篇です。かなり、難しかったです・・・

第十一話ＶＳカイザー

「翔、どこだ！！！」

十代のデッキを直し、翔のデッキを許可したは良いがいざ実戦を行うとどうしてもプレミスを連発してしまい原作通り翔は逃げ出してしまった。

「翔！！て め～、デッキを強化の強化は終わってるんだから後は練習あるのみなんだから出てきやがれ！！」

「魁吏さん、それだと逆に出てきませんよ。」

額に怒りマークを作った魁吏に美里は冷静に突っ込んだ。

「でも、何処にいるのかしら？翔君は。」

「後は、海岸を探してみるか。もし、逃げる前だったら飛び蹴りをかまして逃げられなくしてやる。」

足を振り回しながら、準備をする魁吏に十代は

「おい、魁吏。デュエルが待ってるんだからほどほどにな。」

「「いや、ほどほどでもだめだから！！（です！！）」」

「アニキ、ごめん。僕にはやっぱり無理っす・・・さよなら。」

翔はいかだのオールを漕ぎ始めた瞬間

「誰の断わりを貰って逃げようとしとるんじゃ、ボケ！！」

「へ！！」

魁吏は、まるで某連金の戦士のような蹴りでいかだを叩き割った。

「ぎゃぁぁぁぁぁ！！」

「翔、大丈夫か！魁吏、少しは手加減位しろよ。」

「なに、さっきのキックは・・・・まるで流星みたいだった。」

「どうやったら、あんな直角に落ちる事が出来るんですか。」

陸をみると走って追いついた十代達が居た。

「翔！お前、デッキが少しくらい上手く回せなくてプレミスを連発したくらいで逃げるとはどういう事だ！！まともに練習しなくちゃ、回る事を出来ないしプレミスもするだろうが！！」

「魁吏君・・・でも、僕がどうやったって上手く出来るわけがないし、アニキの足を引っ張るよ。それなら、僕より魁吏君の方が・・・」

翔の言葉を聞いた魁吏は翔の胸倉を掴んだ。

「ふざげんな！！前にも言ったが、俺はタッグデュエルをする気はないしそれ用のデッキも持ってはいない！お前が、逃げ出したら自動的に十代は退学が決定してしまうんだぞ！！」

「でも、僕なんかじゃ・・・」

「情けないな、翔。」

魁吏が翔をどなっていると後ろから声が聞こえた。

「お、お兄さん。」

岩陰から出てきたのは翔の兄貴ことカイザー亮だった。

「ここで、去るか。それも、良いだろう。」

「お、お兄さん・・・」

カイザーは翔に背中を見せ歩いていこうとするが。

「ちょい待ち、カイザー。」

魁吏はカイザーを呼びとめた。

「なんだ、如月魁吏。」

「お前、実の弟に何にも言わないつもりか。」

「それも、仕方がない事だ。」

「てめー。なら、俺とデュエルをしろ。」

魁吏は腕に付けていたデュエルディスクを胸の前に掲げた。

「何？どういうつもりだ。」

「お前が、翔に何にも言わないなら俺が翔に伝えてやる。だが、今のこいつに言葉を通じない。なら、デュエルをして教えてるんだよ。」

「魁吏君・・・」

「良いだろう、如月魁吏。お前とは一度戦ってみたいと思っていた所だ。」

カイザーも同じようにデュエルディスクを掲げた。

「行くぞ！！」

「「デュエル！！」」

「先攻は、俺がもらうぞ。ドロー、俺はスクラップビーストを攻撃表示で召喚し、カードを二枚伏せターンエンド」

魁吏　場
モンスター　スクラップ・ビースト　ＡＫＴ１６００
伏せカード二枚
手札三枚

「俺のターン、融合を発動！手札のサイバードラゴン二枚を融合し来い、サイバーツインドラゴン！！」

「ちっ、いきなりツインかよ。（でも、エンドよりはマシか。）」

「バトル、サイバーツインでスクラップ・ビーストを攻撃！！」
「おっと、悪いがそれはさせないぜ。リバースカードオープン、月の書。ツインは裏側にしてもらうぜ。」
魁吏が発動した月の書によってツインは裏側になった。
「かわしたか、ならサイバーフェニックスを守備表示で召喚し一枚カードを伏せターンエンド。」
「エンドフェイズ時にスクラップ・スコールを発動。効果によりフィールドのスクラップを一体選択し、その後デッキからスクラップと名のついたモンスターを墓地に落としデッキから一枚ドローする。そして、選択したスクラップを破壊する。その瞬間、スクラップ・ビーストの効果を発動！このカードがスクラップと名の付いたカードによって破壊された時に墓地からこのカード以外のスクラップと名の付いたモンスターを手札に加える、俺はスクラップ・キマイラを手札に加える。」
「スクラップ・スコールの時に落としたモンスターか。」
カイザー　場
モンスター　伏せモンスター　一枚
　　サイバー・フェニックス　ＤＥＦ１６００
伏せカード一枚
手札一枚
「俺のターン、ドロー。俺は、ワンフォーワンを発動し手札からレ

ベルスティーラを墓地に送りデッキから黄泉ガエルを特殊召喚する。そして、黄泉ガエルを生贄にスクラップ・ゴーレムを召喚。効果を発動し来い、スクラップ・ビースト！」

「なるほど、蘇生効果を持つモンスターか。」

「ああ、こいつには一ターンに一度墓地に存在するレベル四以下のスクラップを自分または相手の場に特殊召喚する事が出来る。行くぞ、レベル五のスクラップ・ゴーレムにレベル４のスクラップ・ビーストをチューニング！！今ここに、破棄された龍がその力を振るうために起動する！シンクロ召喚、スクラップ・ツイン・ドラゴン！！」

「来たか、シンクロ召喚。」

「あの、ドラゴンは！？」

「万丈目君を倒した時に使ったカード！」

「墓地からレベルスティーラの効果を発動！スクラップ・ツイン・ドラゴンのレベルを一下げ墓地からレベルスティーラを特殊召喚しスクラップ・ツイン。ドラゴンの効果を発動！俺は、レベルスティーラを破壊しカイザーのサイバー・フェニックスと伏せカードを手札に戻す！」

「なら、チェーンしリバースカードオープン。サンダーブレイク、サイバー・フェニックスを捨てスクラップ・ツイン・ドラゴンを破壊させてもらう。」

天から落ちた雷がスクラップ・ツイン・ドラゴンを貫いた。

「すげ～、お互いに初っ端から飛ばしてるぜ。」

「ええ、攻撃を防いでシンクロ召喚をしたと思ったらそれを破壊。どちらも負けていないわ。」

明日香達の言葉に美里は

「でも、あのモンスターは破壊するのはまずかったですね。」

美里の言葉に翔は不思議に思い

「それは、どう言う事っすか？」

「カイザー。ツイン・ドラゴンを破壊されるのは少しびっくりしたが、少しばかり焦ったな。」

「何？」

「スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果を発動！このカードが相手によって破壊された時墓地からスクラップと名の付いたモンスターを特殊召喚する。来い、スクラップ・ゴーレム！」

魁吏の場にもう一度冷蔵庫のようなモンスターが現れた。

「なんだと！？」

「なんだ、あのモンスター。反則くせ～」

「破壊された時と言う事は、自滅しても特殊召喚出来るってことね。強力な効果ね。」

「前に見せてもらったんですが、スクラップのドラゴン族のシンクロモンスターはみんなあの能力を持っていました。」

「魁吏君、すごいっす。」

「俺は、もう一度ゴーレムの効果を使い現れろスクラップ・ビースト！そして、ゴーレムのレベルの一下げてレベルスティーラを特殊召喚する。」

「何をする気だ。さっきのモンスターは二体で出したが、わざわざレベルを下げてモンスターを特殊召喚するとは」

「今度は違うシンクロモンスターだ、レベル四となったスクラップ・ゴーレムとレベル一のレベルスティーラにレベル四のスクラップ・ビーストをチューニング！！凍てつく氷を吐きし古の龍が今解き放

たれる、シンクロ召喚！！現れろ、氷結界の龍　トリシューラ！！」

魁吏の前に三つの頭を氷の龍が召喚された。

「これを、召喚するためにレベルを下げたのか。」

「まあな、こいつの効果はかなり強力だぜ。」

魁吏は、笑いながらカイザーを見た。

「強力な効果とは？」

「こういう能力だ！こいつがシンクロ召喚に成功した時に相手の場、墓地、手札から一枚ずつ除外する事が出来る！」

「「「「なぁ！！！？？？」」」」

「何という効果だ・・・・」

「俺は、場のセットモンスター、墓地からサイバードラゴン、手札は一枚しから無いからそれを除外する。」

「くっ！！」

「そして、ダイレクトアタック！コキュートスブレス！」

「ぐぁぁぁ！！」

カイザーＬＰ４０００→１３００

「俺は、ターンエンドだ」

魁吏　場
モンスター　氷結界の龍　トリシューラＡＫＴ２７００
手札　二枚

「俺のターン、ドロー。ふっ、俺は魔法カード天よりの宝札を発動！お互いに手札が六枚になるまでドローする。」

「な！！（おいおい、ここで天よりの宝札って何だよ。しかも、アニメ版の効果だし・・・・）」

「俺は、死者蘇生を発動しサイバードラゴンを特殊召喚し、プロト・サイバードラゴンを召喚する。このカードはフィールドに表表示で存在する時名前をサイバードラゴンとして扱う事が出来る。そして、融合を発動！場のサイバードラゴンとプロト・サイバードラゴン、そして手札のサイバードラゴンを融合し現れろ、サイバーエンドドラゴン！！」

「出やがったな、カイザーの代名詞モンスター！」

「ついに、出てきたわね。亮の最強のモンスター。」

「すげ～、かっこいいモンスターだなぁ！」

「お兄さん、すごい。」

三人がサイバーエンドドラゴンに驚いていたが美里だけは魁吏を見て

「あれが、カイザー最強のモンスター・・・・魁吏さん。」

「バトルだ！！エターナル・エヴォリューション・バースト！」

サイバーエンドから放たれたビームがトリシューラを包み込んで破壊された。

「ぐぁぁぁぁぁ！！！！！」

魁吏ＬＰ４０００→２７００

「俺は、二枚カードを伏せてターンエンドだ。」

カイザー場

モンスター　サイバーエンドドラゴン　ＡＫＴ４０００

伏せカード二枚

手札０

「くそ、戦況を一変させられた。どうする、さっきのターンで手札は六枚まで増えたが手札にサイバーエンドドラゴンを倒すカードは手札に無い・・・チューナーはあるがスクラップゴブリンだしな。出したら、貫通効果で負ける。とにかくドローしてから考えるか。俺のターン、ドロー。」

魁吏は考えた末にドローした。

「これは！！よし、これならいける。俺は魔法カード簡易融合をＬＰ１０００を支払い発動する、この効果によりレアフィッシュを特殊召喚する。」

魁吏の場に獅子と魚が融合したモンスターが現れた。

魁吏ＬＰ２７００→１７００

「なぜ、あのようなモンスターを１０００も支払ってまで」

「理由は、これだ！！手札から、スクラップ・ゴブリンを召喚し、レベル４のレアフィッシュにレベル３のスクラップ・ゴブリンをチューニング！氷で作られし槍がこの世の全てを貫き砕く。シンクロ召喚、現れろ氷結界の龍　グングニール！！」

魁吏の前に全体を氷で覆われ、禍々しさを持った龍が現れた。

「氷結界の龍　グングニール。さっきのトリシューラと同じ系統のモンスターか。」

「その通りだ。しかし、こいつは他の奴らと違って出しづらいんだ。」

「出しづらい、それはどう言う事だ？」

「こいつは、チューナーと水属性のモンスターでなければ召喚する事が出来ないんだ。だから、水属性であるレアフィッシュを使ったっていうわけだ。」

「なるほど。それほどの手順を踏んだんだ、能力はそれなりの効果なんだろ。」

「ああ、見せてやるぜ。俺は、グングニールの効果を発動！グングニールは一ターンに一度手札を二枚まで捨て相手フィールドのカードを破壊する事が出来る。俺は、手札を二枚捨てサイバーエンドドラゴンと伏せカードを破壊する、凍りつけ！」

「くっ！！」

「すげ～、カイザーのサイバーエンドドラゴンを破壊し絶望的な戦況をさらにひっくり返した・・・・」

「なんて力なの、氷結界の龍達は」

「あんなモンスターを変幻自在に扱えるなんてすごい。」

「お兄さんの、モンスターを悉く破壊していくなんてすごいっす。魁吏君。」

「カイザーにダイレクトアタックだ！エターナル・フリーズ！」

「悪いが、それは通すわけにはいかない。リバースカードオープン、攻撃の無力化。」

グングニールが放った氷の槍はカイザーの前に現れた渦に飲み込まれ消えた。

「くっ、これでも通らないのか。俺はターンエンド。」

魁吏　場
モンスター　氷結界の龍　グングニールＡＫＴ２５００
手札　三枚

「行くぞ。俺のターン、ドロー！俺は、命削りの宝札を発動し、プロト・サイバードラゴンを召喚し貪欲な壺を発動。墓地からサイバードラゴン二枚、サイバーフェニックス、サイバー・エンド・ドラゴン、サイバー・ツイン・ドラゴンの五枚をデッキに戻し二枚ドローする。」

「（おい、最初手札０だったのに。今じゃ手札が五枚ってなんだよ。チートにも程があるだろ！！）」

「俺は、魔法カードパワーボンドを発動！手札のサイバードラゴン二枚と場のプロト・サイバードラゴンを融合、出でよサイバー・エンド・ドラゴン！！」

「ついに出たか、攻撃力８０００のサイバー・エンド・ドラゴン・・・・」

「行くぞ、魁吏。これで止めだ、エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

サイバーエンドから放たれた三つの光線は一つになりグングニールに襲う。

「くそぉぉぉぉぉ！！！！！」

魁吏　ＬＰ１７００→－６３００

「おい、魁吏！！大丈夫か！？」

「ああ、くそぉ～負けた！！最後の最後で巻き返された！！」

「でも、すごいわよ。亮相手に此処まで喰いかかったのは貴方が初めてよ。」

「そうです。すごいです、何度も何度も立ち向かっていくなんて感動しました！！」

十代達が魁吏の周りを囲んでいるとカイザーが近寄ってきた。

「如月魁吏、久々に面白いデュエルが出来た。礼を言おう。」

カイザーは手を魁吏に向け伸ばし、魁吏は手を取った。

「ああ、こっちも良い経験が出来た。ありがとう。」

カイザーは翔の方を少し見て立ち去った。

「魁吏君・・・・」

魁吏に翔が近寄った。

「翔、その顔だと何かを掴んだみたいだな。」

「うん、逃げてるだげじゃなくて立ち向かっていく事も大切なんだっていう事が良く分かったッス。」

「よし、ならさっそく戻って練習だ！」

「「おう！！」」

第十一話ＶＳカイザー（後書き）

どうだったでしょうか？カイザーのチートドローを書くのは本当に大変でした。かなり、無理やりなことをしましたが。次回はついに制裁デュエル編です。

第十二話　制裁デュエル　前篇ＶＳ十代、翔（前書き）

制裁デュエルが始まります。三つくらいに分ける予定です。では、十代＆翔篇です。

第十二話　制裁デュエル　前篇ＶＳ十代、翔

「おい、それは本当なんだろうな。」

「本当デ～ス。私は、シンクロやエクシーズ召喚などは知りませ～ン。」

「そうか、こっちも奴の事を調べてみたが素性が全くといって足が掴めなかった。だが、アカデミアの筆記試験にも受けられそして、実施試験ではシンクロ召喚という新たな召喚方法で見事、最高責任者を倒し入学を決めた。」

「そうですか、遊戯ボーイにも聞いてみましたが知らないと言ってましタ。一体、彼は一体何者何でショウカ？」

「それを、確認するために行くのだろうが。それに、アカデミアにあいつが向かったという情報も届いている。あいつが何故、アカデミアに行ったのかは知らんがあいつが絡むと悪い事しか起こらん。」

「そうですね。三邪神事件でイレイザーを使い消息が途絶えましたが、こんな所で見つかるとは思いませ～ンデシタ。早く、捕まえないと大変な事になりマ～ス。」

二つの影が乗ったヘリがアカデミアに向かった、そして二人が言っていたあいつとは誰の事なんだろうか・・・・・

本編

デッキの改造から1週間ついに、制裁デュエルの日がやってきた。
その間にも翔が逃げ出したり、カイザーとデュエルしたりと色々と大変だった・・・・その後、連れ戻し翔のデッキも改良し練習も行い

「ついに、この日が来たな。」

魁吏は二戦目なので明日香達の共に観客席で様子を見ている。

「そうね。所で、貴方は大丈夫なの？」

「ああ、デッキは仕上げてきたし。今は、十代達を応援するぜ。」

「魁吏さん、今日は一体どんなデッキを使うのですか？」

美里は、魁吏を見ながら聞いた。

「ああ、今回はシンクロが主軸のデッキだよ。」

「あら、今までのデッキもシンクロが主軸じゃなかった？」

明日香も話に加わり、魁吏に聞いた。

「今までのデッキとは違く、シンクロの召喚スピードに特化したデッキなんだ。見たら、びっくりするぜ。」

魁吏は、笑いながら明日香達を見た。

「お前は、色んなデッキを使うから対策が取りずらいな・・・・」

三沢も、デッキの内容を聞いて少し疲れたように言った

「はははははは。お、始まるみたいだぜ。」

「では、今から制裁デュエルを始めるの～ネ。」

デュエルの順番はタッグを行った後にシングル戦をやるので魁吏は後という事になる。

「そして、ドロップアウトボーイズのタッグデュエル対戦相手は、あのデュエルキング武藤遊戯と戦ったことのある伝説のデュエリストナのーネ。」

そして、クロノスの声に反応しデュエル場に二つの影が、バク転しながら昇ってきて十代達の前に現れた。

「我ら流浪の番人。」

「迷宮兄弟。」

「お主達に恨みはないが…」

「故あり、対戦する。」

「我らを倒さねば・・・」

「道は開けん！！」

「「いざ、勝負！！！！」」

「（毎回、見るたびに思うがこの二人が伝説のデュエリストとは思えないな・・・・なぜ、この二人を選んだろうか？まぁ、初代でまともなタッグはこの二人だったからかな。）」

「では、デュエルを開始するの～ネ。両者は指定の位置で準備するの～ネ。」

迷宮兄弟と十代達はそれぞれ、デュエル場の端まで行きデュエルディスクを起動させた。

タッグデュエルルール

互いのプレイヤーに助言は禁止

パートナーのフィールドと墓地は自分のフィールド、墓地として扱える。

両チームのＬＰ８０００

順番は　翔→迷→十代→宮

「では、デュエル開始なの～ネ！！」

「「「「デュエル！！！！！」」」」

「僕のターン、ドロー。僕は、ジャイロイドを守備表示で召喚し一枚カードを伏せてターンエンド。」

翔　場
モンスター　ジャイロイド　ＤＥＦ１０００
伏せカード一枚
手札四枚

「私のターン、ドロー！私は、地雷蜘蛛を攻撃表示の召喚しターンエンド！」

迷　場
モンスター　地雷蜘蛛　ＡＫＴ２２００
手札　五枚

「俺のターン、ドロー！俺は、Ｅ－ＨＥＲＯ　スパークマンを攻撃表示で召喚、さらに二枚カードを２枚伏せてターンエンド！」

十代　場
モンスター　スパークマン　ＡＫＴ１６００
伏せカード二枚
手札　三枚

「私のターン、ドロー。私は、カイザー・シーホースを召喚し魔法カード、生け贄人形を発動する。自分の場のモンスター１体を生贄にする事で手札からレベル７のモンスターを特殊召喚する。私は兄者の場の地雷蜘蛛を生贄に手札から風魔神－ヒューガを特殊召喚。」

「馬鹿な、一ターン目から攻撃力２４００だと！？」

「やるわね。これほど、スムーズにモンスターを召喚するなんて。」

「十代さん達は大丈夫でしょうか、魁吏さん？」

「まぁ、始まったばかりだ。大丈夫だろう。（しかし、風魔神か。懐かしい、本当に懐かしい。俺がガキの時だっただろうか？今では、滅多に見る事が出来ないカードだ・・・・）」

魁吏は風魔神を見て少しばかり懐かしさを味わっていた。

「すまむな、兄者よ。」

「いいや、お前のためになら犠牲にでもなろう。」

「だが、それでは私の気が済まない。私は兄者を対象に魔法カード、闇の使命者を発動。このカードはカードを一枚選択しそれが、デッキに入っていれば相手は手札に加える。私は、雷魔神―サンガを選択する。」

「ふふふ、有りがたい。私のデッキには雷魔神―サンガは入っている。よって、手札に加える。」

迷は手札に雷魔神―サンガを加えた。

「私は、これでターンエンドだ。」

宮　場

モンスター　カイザー・シーホース　ＡＫＴ１７００

　　風魔神―ヒューガ　ＡＫＴ２４００

手札三枚

「僕のターン、ドロー！スチームロイドを召喚する。そして、ジャイロイドを攻撃表示に変更。（どうする。どっちを攻撃するべきだ。生贄人形でフィールドが開いた兄を攻撃するべきか、それとも、次のターン出てくるだろう雷魔神サンガのためにカイザーシーホースを破壊しておくべきか・・・・・）よし！スチームロイドでカイザーシーホースを攻撃！」

蒸気を出しながらスチームロイドは、カイザーシーホースに体当たりするが

「させん！風魔神ヒューガの効果を発動し攻撃を一度だけ０にする。」

ヒューガが出した風の壁によって、スチームロイドははじかれた。

「届かない・・・でもこれは、無効には出来ない！ジャイロイドで兄にダイレクトアタック！」

「ぐあ！」

迷宮兄弟　ＬＰ８０００→７０００

「やったぜ！翔、伝説のデュエリストから先手を取ったぜ！」

「やったす、アニキ。僕は、メインフェイズ２に融合を発動しスチームロイドとジャイロイドを融合！来い、スチームジャイロイド！さらに、一枚カードを伏せてターンエンド。」

翔　場
モンスター　スチームジャイロイド　ＡＫＴ２２００
伏せカード二枚
手札二枚

「よし、十代達が先手を取った！」

「翔君が先手を取るとは思ってなかったけど、すごいわ！」

「すごい、このまま行けば勝てる。」

「翔！このまま、押しきれ！（アニメだと初手で融合してダメージが通らなかったが、これでいい。でも・・・次のターンにはあいつが出てくるんだろうな。元の世界でも実戦で見た事がないあのモンスターが）」

「よくもやったな。私のターン、ドロー！私は、死者蘇生で地雷蜘蛛を復活させ魔法カード生贄人形を発動する。この効果により手札から水魔神スーガを特殊召喚！弟よ、今度はお前の力を借りるぞ！」

「ああ、兄者よ。」

「私は、カイザーシーホースを生贄に雷魔神サンガを召喚！カイザーシーホースは光属性の生贄にする時一体で二体分とする事が出来る。」

そして、迷宮兄弟の場には雷魔神サンガ、風魔神ヒューガ、水魔神スーガが揃った。

「そんな、一気に上級モンスターが三体も・・・・」

「まだ、終わりではない。私は、雷魔神サンガと風魔神ヒューガ、そして水魔神スーガを生贄に出でよ。最強のモンスター、ゲート・ガーディアン！！」

「ゲート・・・・」

「ガーディアン・・・・」

「ゲート・ガーディアン・・・・」

「そんな、攻撃力３７５０だなんて・・・」

「あんなモンスターが出てきたら十代さん達は・・・」

「（おいおい、ついに出やがった。ゲート・ガーディアン、実戦で召喚したの初めて見たぜ。でも、ガーディアンにするよりも三体で攻撃した方がいいのになんで、こっちではやたら合体したがるんだ？）」

「私は、ゲート・ガーディアンでスチームジャイロイドを攻撃！魔神衝撃波！」

「ぐぁぁぁぁぁ！！！」

ゲート・ガーディアンから放たれた攻撃がスチームジャイロイドに直撃し破壊された。

十代・翔　ＬＰ８０００→６４５０

「私はこれで、ターンエンドだ。」

迷　場

モンスター　ゲート・ガーディアン　ＡＫＴ３７５０

手札二枚

「俺のターン、ドロー！俺は、融合を発動し手札のバーストレディと場のスパークマンを融合！」

「その素材で召喚出来るＨＥＲＯはいるわけが！」

「来い、炎のＨＥＲＯ　ノヴァマスター！」

十代の場に炎を纏ったＨＥＲＯが現れた。

「バ、バカな！？なぜ、その素材でそのようなＨＥＲＯが呼べる！」

「へへへへへ、こいつは炎属性のモンスターとＨＥＲＯと名のつくモンスターが素材で呼び出せるＨＥＲＯだ！さらに、エアーマンを召喚するぜ！召喚時効果によってデッキからＨＥＲＯを手札に加える、俺はＥ・ＨＥＲＯオーシャンを手札に加え融合を発動！来い、風のＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　Ｔｏｒｎａｄｏ！」

「ふん、たかが攻撃力２８００で何ができる。」

「それはどうかな、Ｇｒｅａｔ　Ｔｏｒｎａｄｏの効果発動！召喚時に相手フィールドに存在するモンスターの攻撃力、守備力を半分にする！」

「「な、何だと！？」」

「くらえ、ダウンバースト！」

ゲート・ガーディアン　ＡＫＴ３７５０→１８７５

「バトル！ノヴァマスターで攻撃、メテオ・フレイム！」

ノヴァマスターから放たれた炎がゲート・ガーディアンを包み込み破壊した。

迷宮兄弟　ＬＰ７０００→６０７５

「ば、バカな！こんな簡単に、私達の最強モンスター」

「ゲート・ガーディアンが破壊される等！？」

十代がゲート・ガーディアンを破壊した瞬間声援がわいた。

「おお！！すごいぞ、十代！」

「まさか、一ターンでゲート・ガーディアンを破壊するなんて・・・」

「あれが、風のＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　Ｔｏｒｎａｄｏですか。なんて強力な効果なんでしょう。」

「はぁ～渡しておいてなんだけど属性融合モンスターと十代のチートドローが合わさったら最強なんじゃね？普通、手札四枚でノヴァとＧｒｅａｔ　Ｔｏｒｎａｄｏをどっちも出すか、普通・・・」

「アニキ！」

「おう、やったぜ！俺は、ノヴァマスターの効果を発動する。こいつは相手モンスターを破壊した時デッキから一枚ドローする。そして、Ｇｒｅａｔ　Ｔｏｒｎａｄｏでダイレクトアタック！スーパーセル！」

「「ぐぁぁぁぁぁ！！！！」」

迷宮兄弟　ＬＰ６０７５→３２７５

「俺は、ターンエンドだ！」

十代　場
モンスター　Ｅ・ＨＥＲＯノヴァマスター　ＡＫＴ２６００
Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　Ｔｏｒｎａｄｏ　ＡＫＴ
２８００
手札一枚

「く、私のターン、ドロー！ゲート・ガーディアンを倒した事は褒めてやろう。だが、ゲート・ガーディアンを破壊した事は失敗だったな。魔法カードダーク・エレメントを発動！このカードは墓地にゲート・ガーディアンが存在するときに発動でき、ライフを半分支払う事でデッキから闇の守護神ーダーク・ガーディアンを特殊召喚する！出でよ、ダーク・ガーディアン！」

フィールドに出来た穴からダーク・ガーディアンが召喚された。

迷宮兄弟　ＬＰ３２７５→１６３８

「攻撃力３８００だと！？」

「そんな、せっかくゲート・ガーディアンを倒したのに」

「バトル、ダーク・ガーディアンよ小僧にダイレクトアタック！ダークショックウェーブ！」

「翔！！」

「大丈夫っす！リバースカードオープン、エネミーコントローラー！一つの効果によってダーク・ガーディアンを守備にするっす！」

フィールドに現れたコントローラーがダーク・ガーディアンに繋がり守備表示に変更した。

「く、私はターンエンドだ。」

宮　場

モンスター　ダーク・ガーディアン　ＤＥＦ３５００

手札二枚

「僕のターン、ドロー！く、手札にあいつを倒せるカードがない。僕は、パトロイドを守備表示で召喚しターンエンド。」

翔　場

モンスター　パトロイド　ＤＥＦ１２００

「私のターン、ドロー！ダーク・ガーディアンを攻撃表示変更し、バトル！ノヴァマスターを破壊しろ。ダークショックウェーブ！」

「くっ！！」

十代・翔　ＬＰ６４５０→５５５０

「私はターンエンドだ。」

迷　場
モンスター　ダーク・ガーディアン　ＡＫＴ３７００
手札三枚

「俺のターン、ドロー！俺は、手札から融合回収を発動、墓地から融合とスパークマンを手札に加え融合を発動！手札に加えた、スパークマンとフェザーマンで融合、来い光のＨＥＲＯ　Ｔｈｅシャイニングを召喚しＧｒｅａｔ　Ｔｏｒｎａｄｏを守備変更しターンエンドだ。」

十代　場
モンスター　Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　Ｔｏｒｎａｄｏ　ＤＥＦ２２００
　　Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅシャイニング　ＤＥＦ２１００
手札０

「もはや、打つ手なしと見える。なら、さらに絶望を与えよう。私のターンドロー！手札から装備魔法カードメテオ・ストライクを発動！装備モンスターは貫通能力を与える。やれ、ダーク・ガーディアンよＥ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　Ｔｏｒｎａｄｏを攻撃、ダークショックウェーブ！」

ダーク・ガーディアンから放たれた攻撃の余波が十代達を襲った。

「「ぐぁぁぁぁぁ！！！！！」」

十代・翔　ＬＰ５５５０→４０５０

「ターンエンドだ。さあ、どうする。サレンダーするなら今のうちだぞ。」

「アニキ・・・」

「翔！諦めるな、まだ勝負は終わってない！」

翔は、観客席にいるカイザーを見て覚悟を決める。

「・・・・うん！（お兄さん、僕は諦めない！！）僕のターン、ドロー！来た！僕は、手札から魔法カードパワーボンドを発動！手札のユーフォロイドとアニキの場のＥ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅシャイニングを融合、ユーフォロイド・ファイターを融合召喚！」

ユーフォロイド・ファイター　ＡＫＴ　？？？

「ばかな、攻撃力が決まっていない！？」

「ユーフォロイド・ファイターの攻撃力と守備力は素材にしたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる！素材になったのは攻撃力１２００のユーフォロイドと攻撃力２６００のＥ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅシャイニングだ、よって攻撃力は３８００になる！」

ユーフォロイド・ファイター　ＡＫＴ３８００

「だ、ダーク・ガーディアンと攻撃力が並んだ！？だが、ダーク・ガーディアンは戦闘では破壊されない！」

「まだだ！パワーボンドの効果発動、このカードで融合召喚されたモンスターは攻撃力は二倍となる！」

ユーフォロイド・ファイター　ＡＫＴ３８００→７６００

「攻撃力７６００だと！？」

「行くよ、アニキ！！」

「おう、翔！！」

「「くらえ、ネオ・オプティカル・トルネード！！！」」

「「ぐぁぁぁ

「すごかったです。」

「ああ、どうなるかと思ったぜ。（ユーフォロイド・ファイターって融合素材によって上に乗るモンスター変わるのか？面白いな。）さて、次は俺の番か。」

魁吏は静かに席から立ち上がった。

「魁吏、頑張ってこいよ。お前が居なくなったらせっかくの研究が無駄になってしまう。」

「貴方とはまたデュエルしたいから勝ちなさいよ。」

「魁吏さん、頑張ってください！！」

三沢、明日香、美里が魁吏に言い

「まかせな、俺もこんな所で負けるつもりは無い！」

魁吏はデュエル場に降りって行った。

第十二話　制裁デュエル　前篇ＶＳ十代、翔（後書き）

どうだったでしょうか？やっぱり、このタッグデュエルはパワーボンドで止め！！しかないと思ったのでこうしました。次回は、魁吏がデュエルします。対戦相手はまさかの相手です。Ｒを見てない誰だ？と思います。

第十三話　制裁デュエル中編　ＶＳ魁吏（前書き）

魁吏編の始まりですが・・・・・短いです。選んだ相手も相手なんで、相手はイレイザーを使った相手ではありません。

第十三話　制裁デュエル中編　ＶＳ魁吏

「十代、翔！！」

「魁吏！」

「魁吏君！」

魁吏がデュエル場に降りたらちょうど観客席に昇ってくる十代達と会った。

「やったな、十代、翔！！」

「おう、今度はお前の番だな。頑張ってこいよ！！」

「魁吏君、応援してるっスからね！」

「おう、誰だろうと瞬殺してくるぜ！！」

そして、十代達と言葉を交えた後ハイタッチしながらデュエル場に向かった。

「魁吏が言うと冗談に聞こえないのが怖いな。」

「そうっすね。魁吏くんっすから。」

魁吏がデュエル場に昇りデュエルディスクにデッキをセットし

「さて、クロノス教諭。俺の相手は誰なんだ？」

「貴方の対戦相手は世界を渡り歩く賞金稼ぎデュエリストなの～ネ。」

「・・・・なんだろ。めちゃくちゃ、モブキャラが出てきそうな気がする。」

そうすると、一人の男がデュエル場に上がってきた

「へっ、お前が如月とかいう奴か。聞いたよりを弱そうな奴だな。」

「ん！！（こ、こいつは！遊戯王Ｒでバンデット・キースの舎弟もどきでボコボコニされたデュエリストの・・・・・・・・え～と、名前なんだけっか？キャラが薄すぎて覚えておらん）」

「俺の名前はテッド・バニアス！！貴様に敗北を叩きこんでやる！！」

「（ああ。そういえば、そんな名前だったけな。でも）言っている事はかなりモブキャラぽいけどな・・・」

「誰が、モブキャラだ！！貴様、俺を馬鹿にする気か！？」

「え、なんで分かったの。」

「魁吏君、口に出てたっす。」

観客席から翔が言った。

「あれま、まぁ勝つのは俺だけどな！」

「く！！貴様なんぞ、すぐに葬ってやる。」

「「デュエル！！」」

「先攻は俺がもらうぜ！俺のターン、ドロー。俺は、魔法カード調律を発動！」

「調律だと、聞いた事のないカードだな。」

「こいつの効果によりデッキからシンクロンと名のついたモンスターを手札に加える。その後デッキの一番上を墓地に送る。俺は、デッキからクイック・シンクロンを手札に加えデッキトップを墓地に送る。（落ちたのは、サンダーブレイクか。落ちが良くないな。なら、）俺はさらに魔法カード愚かな埋葬を発動しデッキからボルド・ヘッジホッグを墓地に送る。そして、モンスターをセットし二枚カードをセットしターンエンド。」

魁吏　場
モンスター　セット一枚
伏せカード　二枚
手札　三枚

「おいおい、粋がってたくせに随分弱気なターンじゃねか。」

「うるせ～よ。さっさとかかってこいよ。」

「貴様、吠えづらを掻くなよ！俺のターンドロー！俺は、スピード・ジャガーを攻撃表示で召喚さらに、装備魔法デーモンの斧を装備して伏せモンスターに向かって攻撃！」

「はい、残念。攻撃したのはライトロードハンターライコウ、効果でデッキより三枚墓地に送りスピード・ジャガーを破壊。（墓地に落ちたのは・・・・ライコウにドッペル・ウォリアー、増援か落ちたのはまぁ、良い所かな。でも、ライコウの効果でなんでライコウが落ちるかな。）」

「くそ！！俺は、二枚カードを伏せてターンエンド。」

テッド・バニアス　場
モンスター　０
伏せカード　二枚
手札　二枚

「俺のターン、ドロー。俺は手札からレベルシティーラーを捨てチューナーモンスタークイック・シンクロンを特殊召喚！」

「チューナーモンスターだと！？なんだ、そのモンスターは！」

「おいおい、分かるぜ。俺は、チューナーモンスター、ジャンク・シンクロンを召喚、このカードが召喚に成功した時墓地に存在するレベル二のモンスターを特殊召喚する。来い、ボルド・ヘッジホッグ。行くぜ、レベル二のボルド・ヘッジホッグにレベル三のジャンク・シンクロンをチューニング！！その頭脳を用いて勝利をもたらせシンクロ召喚、現れろＴＧハイパーライブラリアン！そして、墓地に存在するレベル・スティーラーの効果を発動しＴＧハイパーライブラリアンのレベルを一下げて特殊召喚し、レベル一のレベル・スティーラーにレベル五のクイック・シンクロンをチューニング！！そのドリルは全てを打ち砕く、シンクロ召喚、ドリル・ウォリアー！！」

「お、新しいシンクロモンスターだ！」

観客席から身を乗り上げて十代が言った。

「一気にシンクロモンスターは二体召喚ですって！？」

「なるほど。あれが、シンクロに特化したデッキか。一ターンでシンクロモンスターを並ばれたらきついな。」

三沢は腕も組みながら魁吏の場を見た。

「いきなり、攻撃力２４００が二体っすからね。」

「あれが、魁吏さんシンクロデッキですか・・・私達がもし、あれを使ったとしてもあれほど回せるでしょうか。」

「難しいかもしれないな。魁吏だから出来ることじゃないか？」

「シンクロ召喚だと、何だそれは！」

「ああ、そうか。学園以外じゃ知らないんだった。シンクロ召喚とは、チューナーとチューナー以外のモンスターを素材に合計レベルと同じモンスターを融合デッキから特殊召喚する召喚方法だ。そして、ドリル・ウォーリアーがシンクロ召喚に成功したためハイパーライブラリアンの効果を発動、相手又は自分がシンクロ召喚するたびにデッキから一枚ドローする。さて、バトルフェイズだ！！ハイパーライブラリアンでダイレクトアタック！！」

「させるか、伏せカードオープン！！攻撃の無力化、そしてバトルフェイズを終了させる。」

「なら、メインフェイズ２でドリル・ウォリアーの効果を発動。手札を一枚捨てる事でこのカードを次のターンまで除外し、ターンエンド。」

魁吏　場
モンスター　ドリル・ウォリアー　ＡＫＴ２４００（除外中）
　　ＴＧ　ハイパーライブラリアン　ＡＫＴ２４００
伏せカード　二枚
手札　一枚

「俺のターン、ドロー！俺は、強欲な壺を発動し二枚ドローする。リバースカードオープン、リビングデットの呼び声！効果により墓地からスピード・パンサーを特殊召喚さらに、パンサーウォーリアーを召喚、魔法カード二重召喚を発動し二体のモンスターを生贄にする時に魔法カード薬食いを発動、これにより生贄にしたモンスターの半分の攻撃力を加え能力を吸収する。出でよ、アサルト・リオンを召喚！！」

「っ！！攻撃力３３００の二回攻撃モンスターか。（こいつは、Ｒ

で出てきたこいつの切り札じゃないか。）」

バニアスの場に現れたモンスターを見て会場が沸き、十代達は驚愕した。

「攻撃力３３００だと！？」

「いきなり、こんな上級モンスターを呼び出すなんて・・・」

「しかも、薬食いの効果によりスピード・パンサーの効果を得て二回の攻撃か可能になっている。どうする、魁吏。」

「魁吏君！！」

他の皆が魁吏の事を心配している中、美里は

「大丈夫です。魁吏さんはこんな所で負けません。」

美里の言葉を聞き十代は

「ああ、そうだな。魁吏がこんな所で負けるわけがないし、諦めてないぜ、魁吏は。」

「効果で自分のモンスターを減らした事を後悔させてやるぜ！！行くぞ、アサルト・リオンでハイパーライブラリアンを攻撃！！」

「くそ！！」

魁吏ＬＰ４０００→３１００

「ははは、止めだ！！アサルト・リオンもう一度攻撃だ！！」

アサルト・リオンの攻撃が魁吏に襲う。

「「「「「魁吏（君）（さん）！！！！」」」」」

「リバースカードオープン！！リビングデットの呼び声、甦れハイパーライブラリアン！！」

魁吏　ＬＰ３１００→２２００

「く、止めさせなかったか。まぁ、いいか。俺はターンエンド。」

テッド・バニアス　場
モンスター　アサルト・リオン　ＡＫＴ３３００
伏せカード０
手札　０

「危なかった、リビングデット伏せてなかったら負けてたぜ・・・・でも、このターンがファイナルターンだ！」

「ファイナルターンだと！！貴様、俺様を馬鹿にするのか！！」

「馬鹿にする気はないがそれが真実だ。俺のターンドロー！！その瞬間除外されていたドリル・ウォーリアーが戻ってくる。戻ってこい、ドリル・ウォーリアー。そして、効果発動墓地にあるモンスターを回収する、俺はジャンク・シンクロンを手札に加えそのまま召喚する。効果により、来いライコウ！！」

「また、レベル五のシンクロモンスターか！！」

「いいや、俺は墓地に存在するボルドヘッジホッグの効果を発動。このカードは自分フィールドにチューナーモンスターが存在する時墓地から特殊召喚する事が出来る。これで、準備は完了だ。レベル二、ボルドヘッジホッグとライコウにレベル三のジャンク・シンクロンをチューニング！！今放たれし矢が的確に相手を狙い撃つ、シンクロ召喚出でよジャンク・アーチャー！！」

「何を出すかと思えば攻撃力たかが２３００のモンスターで何が出来る。はははははは！！！！！」

「はっ！！攻撃力しか見えてないからド三流なんだよ、ジャンク・アーチャーの効果発動、一ターンに一度相手モンスターをエンドフェイズまで除外する事が出来る。喰らえ、ディメンション・シュート！！」

ジャンク・アーチャーが放たれた矢がアサルト・リオンに当たり異次元に送られた。

「ば、ばかな・・・・俺のアサルト・リオンが」

ジャンク・アーチャーの効果を見た十代達は

「おい、なんだよ。あの効果はえげつない・・・・」

「一対一だとダイレクトアタックが決まるじゃない。」

「チート効果だな、あれは。」

「あれと当たりたくはないっす。」

十代達はジャンク・アーチャーの効果を見て少し引いていた。

「でも、これで相手の場ががら空きになりました。」

「馬鹿にしたモンスターの一撃で終わりにしてやる。ドリル・ウォーリアーとジャンク・アーチャーで止めだ！！ドリル・ランサー、スクラップ・アロー！！」

ドリル・ウォーリアーからドリルが発射されジャンク・アーチャーから矢が放たれバニアスを襲った。

「そんな、バカなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

テッド・バニアス　ＬＰ４０００→１６００→－７００

「まぁ、こんなもんかな。」

観客席では十代達が魁吏の勝利に喜んだ。

「やったな、魁吏！！」

「あの状況から、一ターンで逆転し勝利するなんてすごいわね。」

「また、魁吏に対する計算をし直さなければ」

「すごいっす、魁吏君！！」

「魁吏さん、流石です！！！！」

「そ、そんな。バカなの～ネ、用意したデュエリストがどちらとも負けるなん～テ・・・」

クロノスは顔を真っ白な顔がさらに真っ白になった。

「良い事ではありませんか。それほどのデュエリストが育っている
と事なんですから、はははは。」

校長は、笑いながら三人の頑張りに健闘たたえた。

「そ、そんな馬鹿な・・・・俺が、こんな雑魚に負けるなんて」

負けたショックか手を地面に付け何かを言っていた。そこに、魁吏は

「ふん、人を雑魚と言っているから成長はしないんだ。これからは、
見掛けで判断しない事だな。」

そう言い、デュエル場から立ち去ろうとした時

「ちっ、やっぱりクズはクズか。」

入口から柄が悪い声がデュエル場に聞こえてきた。

第十三話　制裁デュエル中編　ＶＳ魁吏（後書き）

現れたい人物とは一体！？っと言いつつ、わかりますよね？ついにあいつの登場です。

第十四話ＶＳ　制裁デュエル後編　バンデット・キース　命を狩り取れ悪魔達

ついに、魁吏の一軍が暴れます。
その実態は何なのか！？

第十四話ＶＳ　制裁デュエル後編　バンデット・キース　命を狩り取れ悪魔達

「ち、やっぱり雑魚は雑魚か。」

会場入り口からバンダナを巻いた男が会場に向かって歩いてきた

「（おいおい、なんでこいつがこんな所にいるんだ。遊戯王の中でも虫野郎の次に嫌いなこいつが。）」

そう、歩いてきたのは初代遊戯王で城ノ内勝也と戦ったデュエリスト、バンデット・キースだった

「だ、誰なの～ネ。ここは関係者以外立ち入り禁止なの～ネ。」

クロノスがキースの前に行くが

「うるせ、おかっぱ野郎は退きやがれ！！」

ドッス！！キースはクロノスを蹴り飛ばしテッドに近づいた

「アンギャ！！」

「このカスが！！狩る方が狩られてどうするんだ、だからテメ～は何時まで経っても雑魚なんだよ！！こんな、雑魚が集まったような学校のやつらに負けるようじゃお前も潮時だな。」

キースはそう言いながらテッドを蹴り続けた、観客席からは女子生徒の悲鳴が聞こえてきたがその中魁吏はキースに近づき前に立った。

「おい。」

「ああ、なんだ。テメ～は」

「お前、今何て言った。」

「何を言ったかだと？」

「俺達が雑魚だと言ったか？」

キースは鼻で笑い

「ああ、言ったぜ。雑魚が群がって出来た学校のやつらに雑魚と言って何が悪い。そもそも、海馬が作ったような学校だ、大した事が無いに決まっている。」

キースのその言葉に学園中の生徒が立ちあがり、「ふざけんな。エリートである俺達が雑魚だと」「いきなり来て俺達を馬鹿にするとはふざけた奴だ！！」「貴方なんか私たちの敵じゃないわ」など観客席から聞こえてきたが

「黙りやがれ、屑ども！！群がる事にしか脳の無い奴らが俺の敵じゃないだと？ほざくのもいい加減にしやがれ！！」

その言葉に魁吏はついにキレた

「おい、ド三流野郎。」

「あぁ。おい、誰に向かって言ったんだテメ～？」

キースは魁吏の前まで来て顔を近づけた。
「お前に言ってるんだよ、ド三流デュエリストバンデット・キース。」
その言葉にキースは魁吏の胸倉を掴み
「おい、いい度胸してるじゃね～か。このカスが。」
「カスはお前だ。人を馬鹿にするのもいい加減にしやがれ、ド三流が。」
「カスごときがいい気になってんじゃね～ぞ。なんなら、今からヤルか。」
キースは魁吏の胸倉を話し気絶しているデットからデュエルディスクを外し自らの腕に嵌めた。
「いいぜ、格の違いを見せてやるよ。来な、ド三流野郎。」
魁吏もデュエルディスクを構えたが
「やめたまえ！！如月君、こんな危険人物を戦ってはいけない！！デュエルディスクをしまいたまえ！！」
校長は立ちあがり魁吏に言ったが
「すみませんが、それは出来ない相談です。」
「なっ！！」

「こいつは此処まで俺達を馬鹿にしやがった。俺はオベリスクブルーの奴らは自分達をエリートだとほざいてムカつくが此処の学園は気に入っているんだ。その学園を馬鹿にされて黙ってなんか居られるか！！」

「だ、だが・・・・」

校長が言葉を詰まらせていると

「やっちまえ！！魁吏！！」

十代が観客席の前まで来ていた。いや、十代だけじゃない皆も揃っていた

「如月、そんな奴さっさと倒すんだ！！」

「そうよ。こんな無礼な奴、貴方なら瞬殺でしょ！！」

「魁吏君。僕も此処まで頭に来たのは初めてっす！！魁吏君が色々と教えてくれた事をそいつは馬鹿にした、許せないっす！！」

「魁吏さん、お願いです。そんな輩倒してください！！」

三沢、明日香、翔、美里は次々に魁吏に言った。

「き、君達！！何を言っているんだ、やめ「校長、やらせてもらえませんか。」りょ、亮。」

「俺も此処まで馬鹿にされて黙ってられませんが如月ならきっとや

ってくれます。お願いします、やさせてもらえませんか。」

カイザーは校長に頭を下げた。それを見た十代達も頭を下げた。

「う、うむ。此処までされては仕方があるまい・・・しかし！！如月君、やるからには勝つのだよ！！」

「はい、重々承知しています。」

「は、三文芝居は終わりかよ。なら、さっさとぶっ殺させてもらうぜ。」

「貴様に死の恐怖を見せてやる。十代！！」

魁吏は十代を呼んだ。

「お前、言ってたよな。俺の一軍が見てみたいってよ。」

「ああ、言ったけど・・・・」

魁吏は鎖に縛られたデッキケースを取り出し鎖を外した。

「見せてやるよ、俺の本気のデッキの力を」

魁吏はデッキをセットした。

「行くぞ、糞ガキ。」

「来やがれ、ド三流野郎。」

「「デュエル！！」」

魁吏　ＬＰ４０００
キース　ＬＰ４０００

「もう一度言おう。貴様に死の恐怖を味あわせてやる。俺のターン、ドロー！！俺は、モンスターをセットしカードを二枚伏せターンエンド。」

魁吏　場
モンスター　セット一枚
伏せカード　二枚
手札三枚

「ひゃはははは、テメー程度の雑魚が粋がってんじゃね！！俺のターン、ドロー！俺は、モーター・シェルを攻撃表示で召喚、さらに装備魔法エンジンチューナーを発動このカードは、装備モンスターの守備力の半分を攻撃力に加算する。また、装備モンスターが破壊されてもこのカードは場に残り別のモンスターに装備する事が出来る。これにより、モーター・シェルの攻撃力は」

モーター・シェルＡＫＴ１３００→２２００

「バトルだ！！モーター・シェルでテメーの伏せモンスターに攻撃！！」

「攻撃されたのは、魔道雑貨商人。このカードはデッキから魔法、罠が出るまでカードをめくりそれ以外は墓地に送る。」

「なんだと、自分のデッキを削るだと！？」

「一枚目モンスター、二枚目モンスター、三枚目モンスター、四枚目モンスター・・・・・・・二十二枚目、魔法カード貪欲な壺。これにより効果は終了。」

魁吏がデッキから大量のカードを墓地に送り終わった瞬間、キースは笑った。

「ひゃはははははは！！いきなり、自分のデッキを半分以上削りやがった。なんだ、なんだ。魔法や罠はデッキ下の方にでも固まっていたのかよ、これじゃ俺の勝ちは決まったな、ひゃはははははははは！！！！！！！」

観客席から見ていた十代達をその様子を見て

「魁吏、どうしたんだ。いきなり、自分のデッキを破壊するなんて・・・」

「魁吏がどんな戦略を用意していたとしていても、デッキを半分も削るなんて無理よ！！」

「そうっす。魁吏君のデッキ、後十二枚しか無いっすよ！？」

「魁吏、お前は何がしたくこんなバカげたことをしたんだ・・・・」

十代達が魁吏の様子を心配している横で美里は

「（魁吏さんの事は信じてますが、一体何を・・・）」

「おい、わざわざデッキ破壊なんかしないでも、止めは刺してやるぜ？ひゃはははははは！！！！！」

キースの笑い声を聞きながら魁吏は笑った。

「くくくく、哀れだな。」

「なんだと。」

「俺が貴様程度の奴に何で負けなきゃならない。そして、これは失敗したわけじゃない。墓地にモンスターを大量に落とす事が狙いなんだ。」

「ちっ、むかつく野郎だ。俺は、カードを二枚伏せターンエンドだ。（こいつには、とことんまでつぶしてやる。伏せカードは激流葬と破壊輪、上級モンスターを出そうとも破壊してやる。なにをしてもお前は終わりだ！！）」

キース　場
モンスター　モーター・シェル　ＡＫＴ２２００
伏せカード二枚
装備魔法　エンジンチューナー

手札二枚

「俺のターン、ドロー。バンデット・キース、貴様はさっきの攻撃によりデュエルモンスター界に封印されし神が解き放たれた。」

「封印されし神だと!?」

「こいつらはペガサス会長も知らないモンスター達だ。こいつらは、あまりの凶悪さであらゆる戦を混乱にもたらせたゆえに地下深くに封印されたモンスター達だ。さぁ、その目に焼き付けろ!!俺は、チューナーモンスター魔轟神レイヴンを攻撃表示で召喚。」

魁吏の場に仮面を被った不気味なモンスターが笑いながら現れた。

「は、何を出すかと思えばたかが攻撃力１３００のモンスターで何ができる!!」

「俺は、レイヴンの効果を発動。一ターンに一度手札を任意の枚数捨てる事でレベルを一上げ攻撃力を４００上げる。俺は三枚捨てレベルを二から五にする。」

魔轟神　レイヴンＡＫＴ１３００→２５００

「攻撃力が、モーター・シェルを上回っただと!?」

「安心しろ、言っただろ?貴様に死の恐怖を教えてやるとな。俺は残ったカードを伏せ墓地からレベルスティーラーの効果を発動、レイヴンのレベルを一下げ特殊召喚。逝くぞ、レベル一のレベルスティーラーにレベル四になったレイヴンをチューニング。今こそ魔轟神がこの地に降り立つ、その手で我に力を与えよ。シンクロ召喚、

魔轟神　レイジオン！！召喚時効果により手札が二枚になるまでドローする。俺の手札は０なため二枚ドローする。」

「は、粋がったくせに攻撃力２３００のモンスターかよ。つまら「俺のターンはまだ、続いている。」なんだと。」

「俺は、墓地にある魔轟神　クシャノの効果を発動し手札の魔轟神を一枚捨てる事で手札に戻す。俺は手札の魔轟神クルスを捨てクシャノを回収。そして、今墓地に送られた魔轟神クルスの効果発動、このカードがカードの効果により墓地に捨てられた時レベル四以下の魔轟神を特殊召喚する。もう一度来な、レイヴン。そして、死者蘇生を発動し魔轟神ソルキウスを特殊召喚しレベル六の魔轟神ソルキウスにレベル二魔轟神レイヴンをチューニング。魔轟の王よ、その力を振りかざす為にこの地に舞い降りよ。シンクロ召喚、魔轟神ヴァルキュルス！効果を発動、一ターンに一度手札にある悪魔族を捨てる事で一枚ドローする。俺は、クシャノを捨て一枚ドロー。リバースカードオープン、貪欲な壺を発動し墓地からモンスターを五枚選びデッキに戻し二枚ドローする。俺は、魔轟神クルスを三枚と魔轟神グリムロ二枚をデッキに戻しシャッフル、二枚ドロー。俺は、手札から魔轟神グリムロの効果を発動。このカードは自分フィールドに魔轟神が居る時に手札から捨てる事で魔轟神を手札に加える。俺は、魔轟神クルスを手札に加え墓地のクシャノの効果を発動しクルスを捨て回収、クルスの効果によりレイヴンを特殊召喚。」

「いい加減、うぜ！！リバースカードオープン、激流葬！！フィールドのモンスターを全て破壊する。これで、今までの頑張りが水の泡だ！！「チェーンしリバースカードオープン。」な、なんだと！？」

「王宮のお触れ、このカードが表側で存在する限り罠は無効になる。

よって、激流葬は無効。」

「ば、ばかな・・・・」

「おい、まだ俺は終わりだとは言っていない。蘇生させたレイヴンの効果を発動、手札から三枚捨てレベルを三上げる、暗黒界の軍神シルバの効果発動。このカードがカードの効果によって墓地に送られた時フィールドに特殊召喚される。レベル五の軍神シルバにレベル五のレイヴンをチューニング。魔轟の女神よその手で我らに勝利をもたらせ、シンクロ召喚、魔轟神レヴュアタン。そして、墓地に送られたクルス二枚効果を発動、魔轟神獣ノズチと魔轟神獣ケルベラルを特殊召喚。」

魁吏のプレイングを見ていた十代達は

「何なんだ？レベルを上げたい下げたち足したりして、俺もう何が何だか分からなくなってきた～」

十代は少し眼を回しながら観戦していた。

「なんてデッキなの・・・・レベルを変え変幻自在に操り多種多様のシンクロモンスターを召喚している。」

「それだけじゃない、一つ一つ緻密に考えなければあのデッキは回せない。俺でも、あのデッキを操る事は不可能だろな・・・あれが、魁吏の一軍なのか。」

「でも、あのデッキのモンスター達なんだか怖いっす。悪魔族っていうだけじゃなくてもっと邪悪見たいな感じが・・・・」

「私も、それを感じます。いつも魁吏さんが使っているデッキは面白くデュエルするっていう感じがするんですが、あのデッキからは相手を潰す、否定すると言った気配があります。あんなデッキを魁吏さんが使っているだけでも驚きなのに、あれのデッキに対する信頼という感じが魁吏さんから感じられます。（魁吏さん。なんで、そんな怖いデッキが貴方の一軍なのですか・・・・）」

「おい。まさか、これで終わりだとは思っていないだろうな。貴様がバカにした罪はまだこれからだ。レベル二の魔轟神獣ノズチにレベル二の魔轟神獣ケルベラルをチューニング。今こそ、その速さで戦の中を駆け抜き混乱を巻き起こせ。シンクロ召喚、魔轟神獣ユニコール。」

魁吏　場
モンスター　魔轟神　ヴァルキュルスＡＫＴ２９００
　　魔轟神　レヴュアタン　ＡＫＴ３０００
魔轟神　レイジオン　ＡＫＴ２３００

魔轟神獣　ユニコール　ＡＫＴ２３００

王宮のお触れ
手札０枚

魁吏の場には仮面を被った悪魔が三体笑いながら立ちその横には何時でも攻撃ができる体制になっている馬が現れた。

「テメ～、ふざけやがって！！こんなモンスターが一ターンで並ぶわけがね！！何かイカサマしやがったな！！」

「ふ、自分が不利になるとイカサマ呼ばわりか。やはり、貴様はド三流デュエリストだな。」

魁吏の言葉にさらに切れるキースに向かってさらに

「貴様程度のド三流が俺達デュエルアカデミアの生徒を馬鹿にするんじゃね！！覚えておけ、今お前が感じている物こそ『死の恐怖』だ。」

「ば、ばかな。俺が、俺がこんなガキに負けるなんて・・・・」

「さぁ、これで止めだ。全モンスターでバンデット・キースにむかって攻撃！！」

「俺は、俺はバンデット・キースだぞ！！それが、こんな雑魚にぃいいい

魁吏のモンスター達がキースに向かって攻撃し直撃した。

キースＬＰ４０００→－４３００

デュエルが終了したが会場は静かなままだった。それも、そうだろう。自分でデッキを破壊しもう諦めたと思った後に上級モンスターを四体も並ばされて召喚していたモンスターも手札に戻され丸裸の状態にされたのだから。先の程のシンクロデッキとは全く違う圧倒的という言葉が今最も合う言葉だろう。その状況を見れば誰もが唖然となる。それは十代達も例外ではなかった。

「あれが、魁吏の一軍デッキ・・・・」

「なんなの、あのデッキは。対処したくてもその前に潰されるじゃないの。」

「ああ。しかも、罠で防ごうとしても王宮のお触れで封印し後は上級モンスター達で止めを刺す。何にも知らずに戦ったらトラウマなんて生易しいもんじゃないぞ。」

「あれって、本当に魁吏君の一軍なんすか。なんか、今までと違いすぎるというかデュエルを楽しむというか相手を叩き潰すという感じがするッス。」

翔のその言葉を聞いた美里は

「翔さん、あのデッキは間違いなく魁吏さんの一軍ですよ。だって、あんな複雑な動きをするデッキを普通は使おうなんて思いませんよ。でも、魁吏さんはそれを見事に使いこなしました、一度のプレイングミスも無くで。それに・・・・」

美里が声を詰まらせ言った。

「魁吏さんを見ればわかります。『俺は、負けない。こいつらが居る限り負けるわけがない』という気持ちが感じられました。でも、私にも分かりません。なんで、魁吏さんがあんな恐ろしくて怖いデッキを使うなんて」

美里は手を握り締めながら魁吏の方へと眼を向け直した。

「どうやら、雑魚はお前だったようだな？バンデット・キース。どうだ、馬鹿にしていたガキにしてやられる気分は、デュエルキングダムで城ノ内勝也に負けた以上にみじめになったんじゃないか。これからは、喧嘩を売る時は相手をちゃんと確認してからやる事だな。」

魁吏がデュエル場から降りようとした瞬間

「待ちやがれ、この糞ガキが！！誰に、向かってそんな事をほざいてやがる。俺は、全米チャンピオンのバンデット・キースだぞ！！テメ～程度のカスが粋がった事をほざいてんじゃね！！！！」

「はっ。全米チャンピオンって何時の話をしてんだよ、お前の時代はとっくの昔に終わってんだよ。何時までも過去の栄光にしがみついているつもりなんだか。」

魁吏が手を肩まであげ首を横に振った。

「テメ～！！偶然で俺に勝ったからって良い気になりやがって、ぶっ殺されてのか！！」

「ぶっ殺される、されないは置いておいて勝ったのは少なく偶然なんかじゃない。あのような場を作るためにデッキを作ったんだからな、それが分からないなんてやっぱりお前はド三流だ。」

ブッチ！！と何かが切れる音がした。

「ふざけやがって！！」

キースは懐から出したナイフで魁吏に切りかかった。

「「「「「「魁吏（君）（さん）！？」」」」」」

だが、それを魁吏は上に蹴り飛ばしそのまま回転し首元に蹴りを決め気絶させた。

「なめるな、この程度で斬りかかるなんて十年早い。」

「あそこで、冷静に対処するなんてどんだけ規格外なんだよ。」
十代のその言葉に翔達は頷いた。
「校長、どうするんですか？この、危険人物は。」
「ああ。それは今から警察に「それには及ばん、鮫島。」なっ！！」
キースが入って入口からまたもや声が聞こえてきた。
「（なんで、こいつがいるんだ。初代主人公の最大のライバルであり、ＧＸでは数える位にしか登場しなかった。）」
「オーナー、なぜこちらに！？」
「ふん、ここに用事が合ってな。それと、この男がこの学園に向かったという情報も届いていた。こいつは、俺が連れていく。磯野。」
「はっ。」
突如現れた磯野さんに担がれてキースは運ばれていった。
観客席からは「あの海馬社長！？」「なんで、こんな場所に。」「すげ～、俺、初めて生で見た」等声が上がっていた。
「校長、途中でややっこしい事がありましたけど俺も、退学は無しですよね？」
「うむ、制裁デュエルには見事に勝ったから退学は無しだが。今のデュエルに関しては別件としてレポート２０枚を提出しなさい。」

「まぁ、それくらいなら謹んで受けます。」

そしたら十代が

「ちょっと待った！！それなら、俺達もやるぜ！！」

「そうだな、俺達もお願いしたんだからな。」

「そうね。駆りたてといて知らんぷりは出来ないわね。」

「そうっすね。僕の色々と教えてもらったし、付き合うッす。」

「私もお付き合いします。」

「なら、俺も付き合わないとな。」

カイザーも腕を組みながら言った。

「亮！？」

「俺も、掻きたてた一人だからな。」

「分かりました。では、如月魁吏以下六名に２０枚のレポート提出を命じます。では、これにてか「おい、鮫島。」な、何でしょうか？オーナー。」

「この男を少しばかり用がある。借りていくぞ。」

海馬は魁吏を指さした。

「わ、分かりました。」

「部屋は校長室を借りるぞ。来い、如月魁吏。」

「・・・・ああ、分かった。」

こうして、制裁デュエルは終わった。

第十四話ＶＳ　制裁デュエル後編　バンデット・キース　命を狩り取れ悪魔達

ボ「はい、魁吏の一軍の中身は魔轟神でした～」

魁「おい、いいのか。主人公が悪魔デッキというのは？」

ボ「それには、理由はいくつかあるのだよ。まず一つ目は斬新を求めたため、主人公が悪魔デッキを使うなんてなかなかないかなぁ～と思って選んだ。それに、十代も覇王になったときにＥｌＨＥＲｏを使っているからおもしろいかなぁ～と思ったのもあるかな。」

魁「なるほど、他には？」

ボ「他には、お前の容姿の元になった奴から選んだ。サードフォームでまさに悪魔っていう感じだったから使っていて違和感はないと思ったから、後は自分自身の一軍が魔轟神ていうのがあるかな。」

魁「なるほどな、これから先このデッキはよく出るのか？」

ボ「いや、主にボス戦ぐらいにしか出さないつもりだ。後は、今回みたいにキレたとき以外は使う気はないかな。」

魁「なるほど。では、今回はこれぐらいで」

ボ、魁「「次回をお楽しみに！！」」

第十五話　対話＝デュエルってこの世界の常識（前書き）

という訳で、１５話に入りました。題名にある対話＝デュエルって・・・・デュエルをするだけで分かり合えるなってすごいなと思いますね。

最近、ひたすらヴァンガードにハマってます。

第十五話　対話＝デュエルってこの世界の常識

「おい、俺に用事ってなんだ。」

魁吏は海馬の後ろを歩きながら校長室に向かっていた。

「俺を相手に動じないとはいい度胸だ。貴様に用があるのは俺のほかにもう一人いる。話はそれからだ。」

「（もう一人？こいつの他にって言うともしかして・・・・・）」

『カイリ～、ダイジョウブなの？コノ人にツイテッテ。』

魁吏の前にメカウサーが浮かびながら現れた。

「（ララか。ああ、大丈夫だろ。こいつが俺に聞きたい事は何となく予想が付くからな。そう言えば、ガンはどうした？）」

『俺なら、此処にいるぜ。旦那。』

幻銃士がメカウサーの隣に現れた。魁吏はメカウサーと幻銃士に名前を付けいてメカウサーはララ、幻銃士はガンという名前が付けられている。

「（そうか。多分、大丈夫だと思うが、やばいと思った時は頼んだぞ。）」

『『ウン（アイヨ）。』』

「おい、連れて来たぞ。ペガサス。」

「オーウ。アリガトーうゴザイマース。」

「（やっぱり、こいつか。）」

校長室にいたのはこの世界でデュエルモンスターズの生みの親であるペガサス・J・クロフォードだった。

「ハジメシテ、カイリボーイ。ワタシは「知っている、デュエルモンスターズの生みの親であり神のカードを作った張本人。ペガサス・J・クロフォードだろ。」オーウ、自己紹介は必要アリマセンデシタネ。」

「で、俺に話って言うのはこれの話か。」

魁吏はシンクロモンスターとエクシーズモンスターをデッキケースから一枚ずつ取り出し顔の正面に差し出した。

「なるほど。貴様、分かっていたのか。」

「ええ、このカードはペガサスや海馬さん、貴方達が作ったカードでは無いからな。」

「では、アナタはドコデそれを手に入れたのデスカ？」

ペガサスは腕を組んで魁吏に聞いた。

「教える気はない。」

「なんなら、力づくで聞いても良いんだぞ。」
海馬が睨みながら魁吏に言い少し考え魁吏は。
「なら、条件があります。」
「条件デスカ？」
「デュエルキング、武藤遊戯に会わせてくれ。」
「なんだと。お前、遊戯の知り合いなのか。」
「いいや、面識はない。だが、俺は武藤遊戯の事を良く知っている。お前達と同じ位もしくはそれ以上に。」
その言葉にペガサス達は驚いた。
「俺たち以上にあいつの事を知っているだと。もしそれが、本当だとすればそんな怪しい奴を会わせるわけにはいかんな。」
「なら、俺も喋るつもりはない。これで、帰らせて貰う。」
魁吏がペガサス達に背を向けドアに歩いていこうとした瞬間ペガサスが
「ワカリマシタ。会わせましょう、遊戯ボーイに」
「なっ！！本気か、ペガサス！！」
「エエ、どうやら彼も本気の様デスシ、ココデアノカード達の事を

聞かないとチャンスはもう無いと思いマ～ス。ケド、こちらからも条件がアリマ～ス。」

「なんだ。その条件っていうのは？」

ペガサスは笑いながら何処から取り出し方か分からないデュエルディスクを腕に付けた。

「ワタシとデュエルして貰いマ～ス。もし、貴方が勝ったら約束通り遊戯ボーイに会わせましょう。私が勝ったとしても会わせましょう。」

「？？？なら、何のためにデュエルをする。」

ペガサスの申し出に魁吏は混乱したがペガサスは

「それは、簡単デ～ス。ワタシはまだ、生でシンクロモンスターやエクシーズモンスターを見てないカラデ～ス。」

「なるほど。まぁ、勝っても負けても会わせてくれるならいくらでも相手になってやる。」

「デハ、行きますよ。」

「「デュエル！！！」」

魁吏　ＬＰ４０００

ペガサス　ＬＰ４０００

「先攻はワタシがもらいマ～ス。ドロー、ワタシは手札から魔法カードトゥーンの目次を使いデッキからトゥーンと名のつくカードを手札に加えます。ワタシは、トゥーンワールドを手札に加えそのまま発動シマ～ス。」

ペガサス　ＬＰ４０００→３０００

「トゥーンデッキか。下手に動きだされるとめんどくさいからな、さっさと除去させてもらうか。」

「ワタシは、手札からトゥーン・ヂェミナイ・エルフを攻撃表示で召喚しカードを二枚伏せてターンエンド。」

ペガサス　場
モンスター　トゥーン・ヂェミナイ・エルフ　ＡＫＴ１９００
伏せカード　二枚
手札　三枚

「俺のターン、ドロー。俺は、手札のチューニング・サポーターを捨ててチューナーモンスター、クイック・シンクロンを特殊召喚する。そして、レベル・スティーラーを召喚しレベル１のレベル・スティーラーにレベル５のクイック・シンクロンをチューニング！！そのドリルは全てを打ち砕く、シンクロ召喚、ドリル・ウォリアー！」

ドリル・ウォリアーを見たペガサスは

「オーウ！！これが、シンクロ召喚デスカ！！エクセレントデース！！！」

「バトルフェイズだ、ドリル・ウォリアーでトゥーン・ヂェミナイ・エルフを攻撃！！」

ペガサスＬＰ３０００→２５００

「オ～ウ、私のモンスターが破壊されてしまいました。でも、このままではアリマセ～ンよ？リバースカードオープン、リビングデットの呼び声を発動しトゥーン・ヂェミナイ・エルフを蘇生シマ～ス。」

「モンスターを残したか。俺は、ドリル・ウォリアーの効果を発動し手札を一枚捨ててこいつを除外する。さらに、カードを一枚伏せてターンエンド。」

魁吏　場
モンスター　０
伏せカード　一枚
手札　一枚

「ワタシのターン、ドロー。ワタシは手札からトゥーン・ヂェミナイ・エルフを生贄にトゥーン・ブラック・マジシャン・ガールを特殊召喚シマ～ス。バトルフェイスデ～ス、トゥーン・ブラック・マジシャン・ガールでダイレクトアタック！！」

「リバースカードオープン、サンダーブレイク。手札を一枚捨ててフィールドにあるカードを一枚破壊する、俺はトゥーン・ワールドを破壊！！」

雷に打ち抜かれトゥーン・ワールドが破壊され同時にトゥーン・ブラック・マジシャン・ガールが破壊された。

「オ～ノ～！！！ワタシのトゥーンが、よくもやってくれましタネ。ワタシは、このターンまだ通常召喚を行っていないのでモンスターをセットしさらにカードを二枚伏せてターンエンドで～ス。」

ペガサス　場
モンスター　セット一枚
伏せカード　二枚
手札０

「俺のターン、ドロー。あぶね、伏せてなかったら一気にライフを持っていかれる所だった・・・・メインフェイズに除外されていたドリル・ウォリアーは戻ってくる。来い、ドリル・ウォリアー！！そして、効果を発動墓地にあるモンスターを一枚選択し手札に加える。俺は、クイック・シンクロンを手札に加える。」

「なるほど、除外してはカードを回収する効果デスカ。なかなか、強力な効果デスネ。」

ペガサスは冷静にシンクロモンスターを観察し、海馬は

「ふん。しかし、毎回逃げるだけのモンスターだ。そこまで、脅威ではない。」

「俺は、手札から魔法カード調律を発動しデッキからシンクロンと名のつくチューナーを手札に加える。俺は、ジャンクシンクロンを手札に加え、その後デッキトップを墓地に落とす。（落ちたのは、調律かよ！！モンスターが落ちなかった・・・・）くっ、バトルフェイズ、ドリル・ウォリアーの攻撃力を半分にしダイレクトアタック！！」

ドリル・ウォリアーから放たれたドリルがペガサスに当たる瞬間

「リバースカードオープン、万能地雷グレイモヤ！！ドリル・ウォリアーを破壊シマ～ス。」

「ドリル・ウォリアー！！くっ、俺はジャンク・シンクロンを召喚する。効果発動、こいつが召喚に成功した時墓地にあるレベル二以下のモンスターを特殊召喚する。ドッペル・ウォリアーを特殊召喚。この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効になる。俺は、レベル二のドッペル・ウォリアーにレベル三のジャンク・シンクロンをチューニング！！今ここに、正義という力を振りかざす為に兵器が起動する。シンクロ召喚、ＡＯＪ　カタストル！！」

「新しい、シンクロモンスターですか。そのモンスターは資料にはありませんデシタ。」

「墓地に行ったドッペル・ウォリアーの効果発動。このカードがシンクロ召喚に使用された時フィールドにドッペルトークンを二体特殊召喚する。」

「さらに、場を強化シマスカ。やりますね。」

「俺は、ターンエンドだ。」

魁吏　場

モンスター　ＡＯＪ　カタストルＡＫＴ２２００

　　ドッペルトークン×２　ＡＫＴ４００

手札一枚

「ワタシのターン、ドロー。ワタシは、魔法カード強欲な壺を発動しデッキから二枚ドローシマス。ふむ、カードを一枚セットしターンエンドで～ス」

ペガサス　場
モンスター　セット一枚
伏せカード二枚
手札一枚

「俺のターン、ドロー。（モンスターを引かなかったのか。それとも、考えたって仕方がない此処は一気に攻める！！）俺は、ドッペルトークンをリリースし手札からクイック・シンクロンを召喚。そして、カタストルのレベルを一下げレベルスティーラーを特殊召喚する。レベル一のドッペルトークンとレベルスティーラーにレベル五のクイック・シンクロンをチューニング！！今放たれし矢が的確に相手を狙い撃つ、シンクロ召喚出でよジャンク・アーチャー！！」

「そのモンスターはさっきのデュエルで出てきたモンスターですね。ですが、この瞬間リバースカードオープン、激流葬！！」

「なっ！？」

「フィールドのモンスターを全て破壊シマ～ス。」

大きな激流にジャンク・アーチャーとＡＯＪカタストルそしてペガサスのモンスターが流され破壊された。

「くそ、俺は魔法カード光の護封剣を発動しターンエンド。」

魁吏　場

魔法・罠　光の護封剣（０ターン目）

「ワタシのターン、ドロー。ワタシは再びトゥーン・ワールドを発動し手札からトゥーン・仮面魔道士を守備表示で召喚してターンエンドで～ス。」

ペガサス　ＬＰ２５００→１５００

ペガサス　場

モンスター　トゥーン・仮面魔道士　ＤＥＦ１４００

「俺のターン、ドロー。（どうする、手札にモンスターは無い。護封剣も何時破壊されるか分からないし。）俺は、カードを一枚セットしターンエンド。」

魁吏　場

魔法・罠　光の護封剣（１ターン目）

伏せカード　一枚

手札０

「ワタシのターン、ドロー。ワタシは、魔法カードサイクロンで光の護封剣を破壊シマ～ス。」

「やっぱり、引いてきたか！！」

「では、バトルフェイズで～ス。トゥーン・仮面魔道士でダイレクトアタック！！このカードは攻撃時ライフを払う効果はありませ～ン。」

魁吏　ＬＰ４０００→３１００

「そして、このカードが戦闘ダメージを与えた時デッキから一枚ドローシマス。ワタシは、一枚伏せてターンエンドで～ス。」

ペガサス　場
モンスター　トゥーン・仮面魔道士　ＡＫＴ９００
魔法・罠　トゥーン・ワールド
伏せカード一枚
手札０

「俺のターン、ドロー。（こいつは！？これならいける！！）俺は、久遠の魔術師ミラを召喚し効果発動！！相手の伏せカードを確認できる、これに対して相手はカードを発動出来ない。」

「そのようなモンスターがいたなんて。ワタシのカードは奈落の落とし穴で～ス。」

「（奈落の落とし穴だと、あぶね！！不用意にモンスターを出さなくて良かった～）さて、バトルフェイズだ。久遠の魔術師ミラでトゥーン・仮面魔道士を攻撃！！」

ペガサス　ＬＰ１５００→６００

「ワタシの仮面魔道士が。」

「俺は、ターンエンドだ。」

魁吏　場
モンスター　久遠の魔術師ミラＡＫＴ１８００

手札０

「ワタシのターン、ドロー。（このカードは危険ですがしょうがありませ～ン・・・）ワタシは、魔法カード天よりの宝札を発動しお互い手札が六枚になるまでドローシマス。ワタシは魔法カード二重召喚を発動しマ～ス、これによりワタシは二回通常召喚が出来マ～ス。ワタシはトゥーン・キャノン・ソルジャーとトゥーン・アーメイドを召喚しマ～ス。」

「キャノン・ソルジャー、バーン効果を持つモンスターか。」

「ワタシは、トゥーン・キャノン・ソルジャーの効果を発動シマ～ス。自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースする事で、相手ライフに５００ダメージを与えマ～ス。ワタシは、トゥーン・アーメイドをリリースし５００ダメージを与えマ～ス。」

魁吏　ＬＰ３１００→２６００

「くっ（ライフが４０００だとたかが５００でも大きいな・・・）」

「まだ終わっていませんヨ。さらに、カードを三枚伏せてターンエンドで～ス。」

ペガサス　場
モンスター　トゥーン・キャノン・ソルジャ　ＡＫＴ１４００
魔法・罠　トゥーン・ワールド
　　リバースカード四枚

「俺のターン、ドロー！！（天よりの宝札の効果で手札が計七枚になった。これなら）俺は、愚かな埋葬を発動しデッキからボルド・

ヘッジボックを墓地に送る。そして、ジャンクシンクロンを召喚。効果によってチューニング・サポーターを蘇生させるそれにチェーンし地獄の暴走召喚を発動する！！このカードは、相手フィールドに表側モンスターが存在し自分が攻撃力一〇〇〇以下のモンスターが特殊召喚された時、同名モンスターを可能な限り特殊召喚する。来い、チューニング・サポーター！！そして、チューニング・サポーターはレベルを一又は二にする事が出来る。俺は、レベル二になったチューニング・サポーターとレベル一のチューニング・サポーターにレベル三のジャンクシンクロンをチューニング。怒涛の魔人よ、その力で全てを打ち砕け！！シンクロ召喚、ジャンク・デストロイヤー！！」

魁吏の場に４本の腕を持つモンスターが現れた。

「この、モンスターは一体！？」

「ジャンク・デストロイヤーの効果発動！！このモンスターがシンクロ召喚に成功した時素材にしたチューナー以外のモンスターの数だけフィードのカードを破壊する。俺は、ペガサスさんのセットカード二枚とトゥーン・ワールドを破壊する！！」

デストロイヤーから放たれたエネルギー弾がペガサスの場のカードを全て破壊する寸前

「リバースカードオープン、奈落の落とし穴そして、非常食。奈落の落とし穴の効果でジャンク・デストロイヤーを除外する！！この効果でワタシはトゥーン・ワールドともう一枚のカードをリリースしライフを２０００回復する。しかし、トゥーン・キャノン・ソルジャ達は破壊されてしまいますが」

ペガサス　ＬＰ６００→２６００

「ジャンク・デストロイヤーが除外されたか。しかし、チューニング・サポーター効果発動！！このカードがシンクロ素材にされた時デッキから一枚ドロー出来る、デッキから三枚ドロー！！そして、ワン・フォー・ワンを発動する、手札からモンスターを一枚捨ててデッキからレベル１のモンスターを特殊召喚する。来い、グロアップ・バルブ。そして、墓地に存在するボルド・ヘッジボックの効果発動。フィールドにチューナーがいる時特殊召喚出来る、俺は墓地から二体を特殊召喚。そして、レベル二のボルド・ヘッジボック二体にレベル一のグロアップ・バルブをチューニング！！その頭脳を用いて勝利をもたらせシンクロ召喚、現れろＴＧハイパーライブラリアン。そして、レベルを一下げレベルシティーラーを特殊召喚する。バトルフェイズ、レベルスティーラーとＴＧハイパーライブラリアンでダイレクトアタック！！」

「ノー！！」

ペガサスＬＰ２６００→－４００

「これで、気は済みましたか？」

「ありがとうゴザイマ～ス。実際に戦ってみてとても面白かったデ～ス、それらのカード達の話楽しみにしてマ～ス。遊戯ボーイに会わす日程は後ほど連絡しマ～ス。いいですね、海馬ボ～イ。」

「勝手にしろ、俺は知らん！！」

海馬はそう言いドアを行き良いよく開け出て言った。

「では、また会いましょう。バ～イ。」

「さて、俺も戻るか。」

魁吏は校長室を後にし、ラーイエローに戻るとそこには

「おっ、戻ってきたな。魁吏！！」

「十代、それに皆も。」

いつものメンバーに加えカイザー、ももえ、ジュンコがいた

「今から、制裁デュエル祝勝祝いをやろうと思ってお前を待ってたんだ。場所はお前の部屋で良いか？」

「十代、別に俺の部屋でやってもいいが課題が出てるんだぞ。いいのか？」

その言葉を聞き十代、翔、隼人がうぐと声を漏らしたが

「だ、大丈夫だ。皆でやればどうにかなって、それに今日くらいいいだろ！？」

「そうっすね、がんばって勝ったんっす。今日くらいは大目に見てくれるッすよ。」

十代と翔が肩を組んで力説し明日香も

「そうよ。ずっと、張りつめていたんだもの今日くらいなら良いんじゃない。」

と明日香はウィンクした。

「まぁ、いいか。今日くらいは派手に遊ぶか！！」

「「「「「「おお！！！！！」」」」」」

皆腕を上に上げた。そこにカイザーが腕を組みながら

「魁吏、海馬さんの用って何だっだんだ？」

「そうだぜ、終わったかと思ったら伝説のデュエリストでデュエルキングのライバル海馬瀬戸が現れたんだからびっくりしたぜ。しかも、魁吏に用があるとかで連れていくし、なんだったんだ？」

魁吏は頭を掻きながら話しずらそうに

「ああ、ちょっとな。（言えない、シンクロやエクシーズモンスターの事で話があった事や校長室でペガサスとデュエルしたなんて・・・・）」

そうすると、美里が近づいてきて

「魁吏さん。あの、あのデッキって何なんですか・・・」

「そうだぜ！！なんなんだ、あのデッキは！？」

「魁吏。今まで、色んなデッキを使っているのを見てきたがあれは、型破り過ぎだ。相手のデッキを破壊するならともかく自分のデッキを破壊するなんて。」

十代と三沢も近づいてきた

「あのデッキのモンスターなんか怖かったわ。」

「そうっすね。種族が悪魔なんで怖いのは当たり前なんすけど。」

明日香、翔は魔轟神を見た時の事を思い出していた。

「あのデッキについては、また今度教えてやるよ。それより、パーティーやるなら早くやろうぜ！！明日からは、地獄が始まるんだから・・・・・・」

「そうだった！！とにかく、今日は暴れるぜ！！」

「あまり、騒ぎ過ぎるなよ十代・・・」

こうして、制裁デュエルは終わった。

第十五話　対話＝デュエルってこの世界の常識（後書き）

トゥーンデッキはやっぱり難しかった・・・・

次回は、三沢ＶＳ万城目の話です。お楽しみに

第十六話　万城目ＶＳ三沢（前書き）

はい、万城目ＶＳ三沢のデュエルです。前に書いたとおり、三沢はエクシーズを使いますがナンバーズは使いません。では、お楽しみください

第十六話　万城目VS三沢

制裁デュエルから数日が経ち部屋で休んでいると

「魁吏、少しいいか？」

ドアからノックが聞こえてきて外から三沢の声が聞こえてきた。

「三沢か。ああ、カギは開いているから入ってこいよ。」

ドアが開き三沢が入ってくると後ろから体中に白いペンキ塗れの十代達がいた。

「どうしたんだ、お前達。」

十代は笑い、三沢が

「それが、部屋の模様がえて部屋全体をペンキで塗ったんだが今日一日は眠れなさそうだから部屋に泊めてくれないか？」

「ああ、いいぞ。そういえば、三沢もう少しで寮入れ替え試験があるんだよな？」

「入れ替え試験？」

「ああ、今度三沢がブルーの奴と戦って勝ったらブルーにそいつと寮を入れ替わる事が出来るって話だ。」

「ええ！！ホントっすか！？」

「相手は誰なんだな？」

「それは、まだ分からないんだ。当日になるまでのお楽しみかな？」

「なぁ、デッキは大丈夫なのか？こないだ、エクシーズモンスターの事を聞いていたけどなんなら今からそれに合ったモンスターを選ぶか？」

「いいのか？なら、少し見せてほいいんだが。」

「面白そうだな、俺も混ぜてくれ！！」

「僕も、見てみたいっす。」

「俺もなんだな。」

こうして、三沢のデッキに合うエクシーズを選び十代達は帰って行った。

ドンドン！！！！

翌朝、大きなノックによって魁吏、三沢は起こされた。

「おい、誰だ。こんな朝早くから・・・・寝むい」

魁吏は眼を擦りながらドアを開けたらそこには十代達がいた。

「大変だ、魁吏、三沢！！朝、トメさんが部屋に来たんだけど海に大量のカードが捨てられているらしいんだ！！」

「「！？」」

「とにかく、行ってみよう！！」

「ああ！！」

「こ、これは。ブラッド・ボルスに破壊輪ってこれは！？」

「ああ、俺の予備カードだ。油断していたな、部屋をペンキで塗るために机を出していたんだがそのまま、入れっぱなしだった。本デッキは昨日魁吏が手伝ってくれたおかげで出来たから良かったが。」

「一体、誰がこんな事を！！」

「とにかく、会場に行くんだな。急がないと遅刻で不戦敗にされちゃうんだな。」

「ああ、分かった。」

会場に着くとクロノスとその対戦相手が立っていた。

「遅いの～ネ、セニョール三沢」

「ふん、尻尾を巻いて逃げ出しては良かったものを」
万丈目が腕を組んで三沢を見下ろしていた。
「じゃあ、三沢の寮の入れ替えの対戦相手っていうのは！！」
「お前か、三沢のカードを海に捨てたのは！！」
十代が万丈目を睨みつけた。
「何です～ト！？」
「何の言いがかりだ十代、何のために俺が」
「本当に言いがかりなのかしら？」
魁吏達の後ろから声が聞こえ、振り向くと明日香、カイザー、美里の三人がいた。
「私達、見てしまったのよ。朝、美里と散歩をしていたら貴方がカードを海に捨てる所をね。」
「くっ！！」
「やっぱり、お前か！！万丈目、汚いぞ！！」
「五月蠅い！！俺は、俺のカードを捨てただけだ！！それとも、そのカードが三沢のだという証拠があるのか！！」
「お前！！「待て、十代！！」か、魁吏？」

「どうやら、いくら言っても無駄の様だ。なら、三沢！！昨日、渡し忘れたカードだ、これであいつを捻り潰してやれ。」

魁吏は一枚のカードを渡した。

「こ、これは？」

「お前のデッキに一番相性がいいカードだ。昨日のうちに渡そうと思っていたんだが色々とやっている内に忘れてな。」

三沢はそのカードを見て笑い

「ああ、分かった！！これで、あいつを叩きのめしてくる！！」

「貴様、風情が俺を叩きのめすだと！！ふざけた事を、いいだろ！！俺の憎しみの炎がお前を全て焼き消してやる！！」

「「デュエル！！」」

万丈目ＬＰ４０００

三沢ＬＰ４０００

「俺のターン、ドロー！！地獄戦士を攻撃表示で召喚し、カードを一枚伏せてターンエンドだ！！」

万丈目　場

モンスター　地獄戦士　ＡＫＴ１２００

セットカード一枚

手札四枚

「俺のターン、ドロー。（魁吏、お前から貰ったカードさっそく召喚させてもらうぞ。）俺は、ハイドロゲドンを攻撃表示で召喚。バトルフェイズ、やれハイドロゲドン地獄戦士を攻撃！！ハイドロ・ブレス！！」

万丈目ＬＰ４０００→３６００

「くっ！！しかし、この瞬間地獄戦士の効果を発動する！！俺が受けた戦闘ダメージをそのままお前にも与える！！」

三沢ＬＰ４０００→３６００

「だが、こちらもハイドロゲドンの効果を発動する。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時デッキから同名モンスターを特殊召喚する事が出来る。来い、二体目のハイドロゲドン！！これは、バトルフェイズ中の特殊召喚だから攻撃は可能だ。行け、ダイレクトアタック！！」

「ぐぁぁぁぁ！！！！！」

万丈目ＬＰ３６００→２０００

「そして、メンフェイズ２に移行し魁吏、お前から貰ったカードさっそく召喚させてもらうぞ！！」

三沢はエクストラデッキから一枚のカードを取り出し、魁吏はそれが何のカードが分かり

「ああ！！三沢、タイミングを間違えるなよ！！」

「あの、魁吏さん。三沢さんに何のカードを渡したんですか？」

美里は不思議そうな顔で魁吏に聞き、

「そうだな、エクシーズモンスターの中でもかなり強力なモンスターの一体かな？俺も、良く頼りにしているくらいだし。」

「あ、あなたが頼りにしている強力なカードって一体・・・・」

明日香がそう言い皆は、三沢の方に向き直した。

「俺は、レベル四のハイドロゲドン二体でオーバーレイ！！二体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！！エヴォルカイザー・ラギア！！」

三沢の前に六つの羽を持ち炎を纏う白い龍が渦から現れた。

「あれが、魁吏が頼りにしているモンスター、エヴォルカイザー・ラギアか。あのカードにどれほどの力があるか楽しみだ。」

カイザーは腕を組んだまま見て言った。

「俺は、さらにカードを二枚伏せてターンエンドだ！！」

三沢　場

モンスター　エヴォルカイザー・ラギア　ＡＫＴ２４００

伏せカード　二枚

手札　三枚

「そのモンスターにどんな効果を有ろうと無駄な事だ！！俺のターン、ドロー！！その瞬間、リバースカード、リビングデットの呼び声を発動し墓地から地獄戦士を特殊召喚する、さらに速効魔法暴走召喚を発動！！このカードは、相手フィールドに表側モンスターが存在し攻撃力１５００以下のモンスターが特殊召喚された時にデッキ、墓地、手札から可能な限りモンスターを特殊召喚する。だが、お前のモンスターは特殊召喚は出来ないがな。」

「ああ、俺は特殊召喚出来ない。」

「俺は、デッキから地獄戦士を二体特殊召喚する。」

「そんな、万丈目の場にモンスターが三体も！？」

「攻撃力が１２００しかないがあれを生贄に捧げて上級モンスターを出されたら・・・・」

十代と明日香が万丈目の場を見て言い

「さすがだな。エクシーズモンスターの特性をうまく使った。」

カイザーが言った瞬間万丈目は

「当たり前だ、カイザー！！あんたを継ぐのは俺だ！！」

「召喚されたらの話だがな。」

「へっ！？それは、どう言う意味ですか、魁吏さん？」

「美里、この後をよく見ておけ。」

「俺は、装備魔法ヘル・アライアンスを地獄戦士に装備する。このカードはフィールドに装備モンスターと同名モンスター一体につき攻撃力を８００上げる。よって、攻撃力は２８００になる！！」

「くっ！！」

「これで、終わりだと思うなよ。俺は、ヘル・アライアンスを装備した地獄戦士を生贄に捧げ、手札を全て捨て、炎獄魔人ヘル・バーナーを召喚する！！はははははは！！」

「その瞬間、エヴォルカイザー・ラギアの効果発動する！！」

「この瞬間だと！？」

「オーバーレイユニットを二つ使い、相手のモンスターの召喚、特殊召喚か魔法、罠の発動を無効にし破壊する！！」

「なんだと！！」

「よって、炎獄魔人ヘル・バーナーの召喚を無効にする！！」
ラギアから放たれた火球がヘル・バーナーを焼き尽くした。

エヴォルカイザー・ラギアの効果を見た十代達は
「ノーコストで反転召喚以外を消しさる効果って、なんて強力なんだ・・・・・」
「だから、言っただろ。召喚が出来たらなって。」
「あのモンスターの前だと俺の、サイバーエンドも無力だな。しかし、あの強力な効果だ何かしらの制限はないのか、魁吏？」
カイザーは魁吏に言い皆の眼が向けられた。
「さすがだな、カイザー。その通りだ、エヴォルカイザー・ラギア効果は確かに強力だが強力な分一発しか使えないし、エクシーズ召喚に必要なモンスターが恐竜族が二体と言う制限があるんだ。でも、さっき見たように。」
「ハイドロゲドンは相手モンスターを戦闘で破壊するとデッキから同名モンスターを呼んでくる効果があるため簡単に召喚が出来るというわけですね。魁吏さん。」

「美里の言う通りだ。ハイドロゲドンとエヴォルカイザー・ラギアはかなり相性が良いんだ。」

「どうした、万丈目。もう、終わりか？」

「俺は、ターンエンドだ・・・・」

万丈目　場
モンスター　地獄戦士　ＡＫＴ１２００×２
手札０

「俺のターン、ドロー。俺は、オキシゲドンを攻撃表示で召喚する。そして、魔法カード強欲な壺を発動しデッキから二枚ドローする。そして、強欲な壺を除外しマジックストライカーを特殊召喚。レベル三のオキシゲドンをマジックストライカーをオーバーレイ！！二体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築！！現れろ、グレンザウルス！！」

「二体目のエクシーズモンスターだと！？」

「バトルフェイズ、グレンザウルスで地獄戦士を攻撃！！」

「だが、戦闘ダメージはお前にも跳ね返る！！」

万丈目ＬＰ３６００→２８００
三沢　ＬＰ３６００→２８００
「そして、グレンザウルスの効果発動！！このモンスターが相手モンスターを戦闘で破壊した時オーバーレイユニットを一つ使い相手に１０００ダメージを与える。」
「ぐぁぁぁぁ！！！！」
万丈目ＬＰ２８００→１８００
「エヴォルカイザー・ラギアで地獄戦士を攻撃！！インフェルノ・フレイム！！」
万丈目ＬＰ１８００→６００
三沢　ＬＰ２８００→１６００
「俺は、カードを一枚伏せてターンエンドだ。」
三沢　場
モンスター　エヴォルカイザー・ラギア　ＡＫＴ２４００
　　グレンザウルス　ＡＫＴ２０００
伏せカード　二枚
手札　四枚
「俺のターン、ドロー！！俺は、カードを一枚伏せてターンエンドだ！！」

「（おい、万丈目。あれじゃ、誰が見ても罠だって分かるぞ。でも、三沢の前じゃ無駄だろうな。）」

「ターンエンドフィズ時にリバースカードオープン、王宮のお触れ！！罠を封印する！！」

「何だと！！」

万丈目　場
伏せカード　一枚
手札０

「俺のターン、ドロー。止めだ、エヴォルカイザー・ラギアの攻撃！！インフェルノ・フレイム！！」

「ぐぁぁぁぁぁ！！！！」

万丈目ＬＰ６００→－１８００

「くそ、俺がこんな奴に・・・・」

「万丈目、お前が捨てたこのカードはまぎれもなく俺のカードだ。」

「何だと！？」

「こいつには、ついこれを書き込んでしまったんだ。こんなカードを持っているのは俺だけだからな。」

「では、シニョール三沢はオベリスク・ブルーに昇格を認めるノ～ネ。」

「いえ、それはお断りします。」

「な、なぜなの～ネ！？」

三沢は魁吏達を見て

「俺は、まだ倒したい奴等がいます。それに、もっとカードを研究してからオベリスク・ブルーに行きたいと思います。それでは、失礼します。」

三沢は、デュエル場から降り魁吏達と共に出て行った。

「魁吏、お前のくれたカードで助かったよ。でも、良いのか？こんな強力なカードを貰って」

「元々、渡すつもりだったからいいよ。でも、数式は書き込むなよ。」

魁吏が冗談交じりに言い三沢は笑いながら

「分かってるよ。大事に、使わせてもらうよ。」

「三沢、今度は俺とやろうぜ！！俺も、そのモンスターを戦いたくなった！！」

「ちょっと待った、アニキ。僕も、さっきのデュエルを見ていたらやりたくなったッス。」

十代と翔はさっきのデュエルを見て熱くなってしまったらしい

「ちょっと待ってくれ。このデッキは機能出来たばかりでさっきデュエルをしてみてまだ改良の余地があることが分かったんだ、これが完璧に完成したとき思いっきりやろう。」

それを聞いた万城目は

「ば、馬鹿な。俺は、まだ未完成のデッキで負けたのか・・・・くそ！！」

魁吏達は落ち込む万城目を後目にデュエル上を後にした。

第十六話　万城目ＶＳ三沢（後書き）

ということで、ラギアゲーでした。先行でラギアを出されるとほぼ止まりますよね？

私は、よく大会とかでラビットからラギアを出して御触れを伏せるという動きをして初手で封殺するということよくやっています。おかげで、三位入賞出来ました。

突然ですがアンケートを取ります。魔轟神レイジオン、ヴァルキウス、レヴィアタン、ユニコールの攻撃名を募集したいと思います。期限は今年いっぱいまでとしたいと思います。どうか、お願いします

第十七話　冬休み計画（前書き）

今回はデュエルはありません。が、魁吏の新しい精霊が会われます。

第十七話　冬休み計画

ベットの上で美里がゴロゴロと寝がえりを打ちながら考えていた

「魁吏さんか・・・・私、魁吏さんの事どう思っているんだろ。最初は、見た事も無い召喚方法で興味があったけど実際に話をしてみたりデュエルをしてみたら楽しくって、なんだかとても気が楽になったんだよね。魁吏さんの事を考えると少し胸が熱くなるし、明日香さんを背負ってた時胸がむかむかしましたし、これって恋なのでしょうか？」

美里は、魁吏対して気持ちを考えていた。最近、主に制裁デュエルが終わったあたりから彼女の中で魁吏と言う存在が大きくなってきていた。

「む～ん、分かりません。そういえば、魁吏さんは冬休みはどうするんでしょうか？思い切って今度聞いてみようかな？」

そして、美里は眠りについた。

三沢と万丈目のデュエルが終わり数日が経ったある日、魁吏は珍しく美里と二人で歩いていた。

「（今なら、誰もいませんし絶好のタイミングですよね？）あ、あの魁吏さん、冬休みに入ったらどうするんですか！？」

「そうだなぁ。（転生者だからこっちに家があるわけ無いしな）まぁ、アカデミアで残ると思うぞ。やる事も無いしな。」

魁吏が腕を組みながら美里に言ったら

「あ、あの。それでしたら、私の家に遊びに来ませんか？」

美里は顔を真っ赤にしながら言った

「は？」

「家の方で仲の良い友達の事を言ったら、お母さんが『なら、今度連れてきてよ。貴方が、そこまで言う友達が見たいから！！』っと言っていたのでご迷惑でなかったら来てくれませんか？」

美里の突然のお願いに

「う～ん（どうするかな？いくら、仲が良いって言っても女の子の家に行くのはなぁ～生前だって行く機会が無かったからきんちょうするしなぁ。ここは、断わろう。）美里、悪いけ」

魁吏が断わろうと美里を見たら

「駄目ですか？」

上目づかいで少し涙目になりながら魁吏を見る美里がいた。

「（お～い！！！！こんな目をしている奴の願いを断わる事が出来る奴が居んのか！？無理だろ、そもそも美里って俺の好みのド真ん中だし・・・・仕方がない。）わ、分かった。行くから、その目をやめてくれ・・・・」

それを聞いた瞬間、美里の暗かった顔がまるで花が咲くように明る

くなり

「本当ですか、ウソとか言わないでくださいね！？」

「ああ、言わないよ。（というか、言える自信がね～よ。言った瞬間、あの顔を見る事になるのは嫌だしな。）」

「分かりました！！では、日程の程は追って連絡しますね、さようなら！！」

美里は、魁吏の返事を待たずに光の速さで寮へと戻って行った。

「・・・・・さて、俺も寮に戻るか。」

魁吏も自分の寮へと戻っていた。そして、戻ると同時にＰＤＡが鳴った。

「ん、だれだ？こんな時間に、美里・・・・じゃないか。じゃあ、誰だ？」

魁吏は、仲が良い友達（十代達）は着メロが変わっており分かるようにしていたが掛かってきたのは普通のメロディー、つまり、登録者ではないという事が直ぐに分かり、恐る恐る出てみると

「も、もしもし。」

電話の向うから聞こえてきたのは魁吏の予想を裏切るかのような明るい声が聞こえてきた。

「ハ～イ、魁吏ボーイ。元気でスカ？」

思わず、切ってしまいそうになる魁吏だが静かに指を元に戻した。
「なんで、俺の番号を知っているんでしょうか、ペガサス会長？」
「オ～ノ～、そんな事デスカ。」
「（なんだよ、知っていて当然の様な反応は！！）」
魁吏がペガサスの反応に突っ込んでいると
「そんな事知ってイテ当然で～ス。何を言っているんデスカ？」
「（本気で、電話切るか。切っていいよな？）」
魁吏は額に怒りマークを出しながらも平常心を保った。
「それで、俺に何の用だ？無いなら切りますよ（二重の意味で）。」
「冗談もホドホドにして用と言うのは遊戯ボーイとの予定がようやく付きマシタ。」
「！？それは、本当ですか？」
「ホントで～ス。遊戯ボーイに会わせればカードの話をしてくれるんですから、ウソは付きませ～ン。」
ペガサスの言葉にはウソを感じられなかった。
「分かりました。日程の方は何時ですか？」

「それは、冬休みの中旬と言うのはどうでしょうカ？魁吏ボーイもその方が都合が良いでしょう。」

「分かりました。では、詳しい日程は後ほどという事で、その日にカードに関してお話します。」

「ハ～イ、楽しみにしてマ～ス。それから、今後この番号は登録してもらっても良いですカ？貴方とは色々と連絡をする事になるかもしれませ～ン。」

「分かりました。では、失礼します。」

魁吏は静かに電話を切り枕元に投げた。

「ついに、デュエルキングに会えるのか。楽しみだな、前世では年齢がど真ん中だったしな無印は」

魁吏がベットに寝転がり眼を閉じて思い出していると、

「ふん、我を置いて王と名乗るとは飛んだ不埒者がいたものだ。我とお前以外は全て雑種、そうとは思わんか、魁吏よ。」

「しかし、我々は王以上の存在です。一々気にしていたらキリがありませんよ？」

後ろからララでも無くガンでも無かった。恐る恐る、魁吏が声がした方を見るとそこには部屋には合いそうにはない王が座るに相応しい？といった椅子に座るモンスターと天使に似ているが服装は真っ黒で羽をはやした女型のモンスターがいた。

「お前は、魔轟神ヴァルキウスと魔轟神グリムロ！？な、なんでここに！？」

魁吏が驚き二人？を何度も見た。

「それは簡単な事ですよ、マスター。私達が貴方の精霊だからです♪」

「な！？で、でも、精霊が出てくるには条件があるってララが」

魁吏は未だに混乱している様子でヴァルキウスが傍に歩いていき

ゴッチ！！！！ヴァルキウスが魁吏の頭を思いっきり殴った。

「いで！！」

「馬鹿もの、少しは落ち着かんか！！お主は、我々を使う人間だろうに全くその程度で一々驚いていてどうする！！」

「いって～でも、少しは落ち着いたよ。」

「そうか、それでこそ我が認めた人間だ。」

ヴァルキウスが腕を組みながら満足した顔で頭を頷く

「さて、お前達は俺の精霊で間違いは無いんだよな？」

「そうですよ♪マスター、貴方がこないだのデュエルで私たちを使っていただいたおかげでリンクが繋がったんです。」

「なるほど、いきなり現れてびっくりしたよ。」
魁吏が腰に手を当て笑っていると
「ふん、その程度でびっくりしていたらキリがないわ。」
ヴァルキウスは椅子に座り王の風格を出しながらも魁吏の心配をしていた。
「さて、お前達にも名前をあげなきゃな。ララやガンだけだと不公平だし、さてどういった名前にするか？（ヴァルキウスの方はあいつに似ているから掠った名前にして、問題はグリムロの方だな。女の子だし可愛い名前にしてあげたいな・・・）」
「マスター、名前決まりましたか？」
「魁吏よ、さっさと名前を寄こさぬか！！我を待たすではない！！」
「分かったよ。まずは、ヴァルキウスはメッシュっていうのはどうだ？（こいつの言葉はＦＡ〇Ｅに出てくるあいつそっくりだし良いだろう。）」
「メッシュか・・・うむ、気に入ったぞ！！今日から我の事はメッシュと呼ぶがいい、ふはははははははは！！！！」
ヴァルいやメッシュは余程名前が気に入ったのか途端に笑い始めた、そしてグリムロが魁吏に近づき
「あ、あの、マスター。それで、私の名前は？」

「ああ、そうだな。お前の名前はスレーラと言うのはどうだ？」

「スレーラ・・・・私の名前はスレーラ。」

グリムロは何度も名前を繰り返し言った。

「もしかして、いやだったか？なら、違う名前を「いえ、この名前が良いです！！これで、お願いします！！」わ、分かった。これからよろしくな、メッシュにスレーラ。」

「おう（はい）！」

次の日、散歩している後十代に会い驚いていた

「魁吏！！何か、精霊か増えてないか！？それって、お前の一軍のモンスターの魔轟神のえ～と？」

「ヴァルキウスとグリムロだ。一応、こいつらにも名前があるから紹介するよ。」

「うむ、我の名はメッシュだ。雑種に名前を呼ばせるのは癪だがお前は魁吏が認めた男だ、特別に呼ぶ事を許してやろう。」

「はじめまして、私は魔轟神グリムロの精霊で名前はマスターからスレーラという名前を貰いました。気軽に御呼びください♪」

メッシュとスレーラが自己紹介をし、十代も

「ああ、俺の名前は遊城十代だ。よろしくな！！そういえば、魁吏

冬休みはどうするんだ？俺は、アカデミアに残るつもりだけど。」

十代は自己紹介が終わり魁吏を見て冬休みの予定を聞いてきた

「そうだな。少し予定が入っているか、アカデミアを少しいないかな？」

「そうなのか、翔達も残るって言ってたから暇なときは来てくれよ！！」

「ああ、分かったよ。暇な時に寄らせてもらうよ、じゃあな。」

こうして、真っ白だった冬休みに予定が経った。

第十七話　冬休み計画（後書き）

前回、魔轟神レイジオン、ヴァルキウス、レヴィアタン、ユニコールの攻撃名を募集したんですが、あまり来なかったのでもう一度書きたいと思います。期限は今年いっぱいまでとしたいと思います。どうか、お願いします。

キャラ設定（前書き）

今回は、魁吏の精霊の設定について書きたいと思います。

キャラ設定

メカウサー　名前ララ

効果

星２／地属性／機械族／攻　８００／守　１００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
自分のデッキから「メカウサー」１体を自分フィールド上に
裏側守備表示で特殊召喚する事ができる。
このカードがリバースした時、フィールド上に存在するカード１枚
を選択し、
そのコントローラーに５００ポイントダメージを与える。

魁吏の精霊の一体で一番の甘えん坊、魁吏の事は名前で呼ぶ。現れる時は大抵魁吏の頭の上にいて、一番のお気に入りの場所でそこでお昼寝をするのが大好き。ララは魁吏の獣デッキの中に投入されておりリクルーターとバーンの効果があるため魁吏はとても頼りにしている。また、貪壺のコストにもなるためデッキに戻しバーン効果を使い、止めにバルバロスの生贄要因になる。

幻銃士　名前ガン

効果

星４／闇属性／悪魔族／攻１１００／守　８００
このカードが召喚・反転召喚に成功した時、
自分フィールド上に存在するモンスターの数まで自分フィールド上に
「銃士トークン」（悪魔族・闇・星４・攻／守５００）を特殊召喚

する事ができる。
また、自分のスタンバイフェイズ毎に自分フィールド上に表側表示で存在する
「銃士」と名のついたモンスター１体につき相手ライフに
３００ポイントダメージを与える事ができる。
この効果を発動するターン、自分フィールド上に存在する
「銃士」と名のついたモンスターは攻撃宣言をする事ができない

魁吏の精霊の一体で状況判断に掛けた頼りになるモンスター、魁吏の事は旦那と呼ぶ。ガンはララと同じように獣デッキに投入されているモンスターで召喚、反転召喚等で自分の分身を生み出し銃士と名のつくモンスター一体につき３００のバーン効果を持っている。自分の場が危険だった場合や迂闊に攻撃が出来ない場合にとても頼りになるモンスター、分身と自身を生贄に捧げる事でバルバロスの効果を発揮させる時にも頼りになる。ガンは他の精霊よりは冷静でどんな状況でも判断が出来る、見掛けに騙されてはいけない。

魔轟神　グリムロ　名前スレーラ

効果

効果モンスター
星４／光属性／悪魔族／攻１７００／守１０００
自分フィールド上に「魔轟神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、
手札からこのカードを墓地へ送る事で自分のデッキから「魔轟神グリムロ」以外の
「魔轟神」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

魁吏の精霊の一体で魁吏が一番頼りにしているモンスター、魁吏の

事はマスターと呼ぶ。
魔轟神は悪魔族だが普段はそのような素振りは見せないが、マスター（魁吏）の事になると話は別、マスターを侮辱とスレーラが感じた時は真夜中相手の夢に現れては相手を徹底的に追い詰めトラウマを植え付けようとする、しかし魁吏の前ではその顔は絶対に見せない。魁吏はその事は知っていない。スレーラは異性としてマスター（魁吏）の事を気になっている。

魔轟神ヴァルキュウス　名前メッシュ

効果

星８／光属性／悪魔族／攻２９００／守１７００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
手札から悪魔族モンスター１体を捨てて発動する。
自分のデッキからカードを１枚ドローする。
この効果は１ターンに１度しか使用できない

魁吏の精霊の一体で、精霊の中では一番の攻撃力を持っている。魁吏の事は名前で呼んでいる。魁吏が危機に陥ると率先して魁吏を守ろうとする。口は悪いが魁吏の事は気にっており、そうでない者には「我に話しかけるとはいい度胸だ。散れ、雑種が！！」と魔弾を放ってくる。魁吏はメッシュの口ぶりはまるでＦＡ〇Ｅの英雄王だったためこの名前を付けた。

キャラ設定（後書き）

以上です。どうだったでしょうか？次回は、冬休み篇に入ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8089w/

遊戯王ｇｘ　転生者の介入録

2011年12月24日07時56分発行